

牧羊者

教師の方々へ

いよいよ、今年度も後半になります。委ねられている子どもたちに、福音は届いているでしょうか。教会学校は、伝道の最前線です。21世紀の教会を担う後継者を育てる場です。他の教会行事も決しておろそかにしてはなりません。どうか教会学校を大切にしてください。未来を見つめ、子どもたちを愛して、深い人格関係を築いて下さい。

局長という立場上、過去2年間に、幾つかの教区のCS教師研修会に招いていただきました。そこではいつも、「聖書の示す教育」をテーマとして語らせていただきました。所用があつて教師研修会に出席できなかった方々のために、ここで短くまとめてみたいと思います。

ユダヤ人は、モーセの時代から教育を重んじていました。申命記は、出エジプトの出来事や律法を、子や孫に教えるように命じています(4・10、6・7)。彼らの教科書は律法でした。大多数の人々は読み書きができませんでしたが、祭司たちが読み上げる律法を丸暗記し、それを子どもたちに口移しで教えていたのです。家庭が教育の現場でした。

ソロモンの時代に記されたと思われる箴言を読むと、その教育の姿がみごとに描かれていることに気づきます。一例と

して4章を開きましょう。ここに述べられている教育の姿は、以下の3つにまとめられるのではないのでしょうか。

第一に、それは人格を通しての教育です。ここには、「子供らよ」とか「わが子よ」という呼び掛けが何度も用いられています。実際に親が自分の子に教えたからでしょう。しかし、たとい師弟関係でも、教師は弟子に「わが子よ」と呼び掛けていたと学者は考えています。そういう場合でも、親子のような人格関係が前提にされていたのです。

現代は、実際の親子でもあまりコミュニケーションがないのが実情でしょう。親が、毎日の生活の中で、自分の経験を通してどう生きるべきかを教える機会が少ないのです。ですから、一週にたった一時間余りの教会学校において、他人の子どもを「わが子」のように思い、彼らの悩みを聞けるような関係を築くのは、簡単ではありません。しかし、少しでもそれに近づきましょう。何よりも、毎日の静まりの時に、委ねられている子どもたちのために祈って下さい。それが、人格教育の第一歩です。

第二に、それは、正義を教える教育です。「悪しき者の道」ではなく「正しい者の道」を教えることです。親が考える正しい道ではない。聖書が教える正義の道

です。様々な価値観がうすまわす現代社会においても、「聖書は明確に善悪の基準を示している」と、確信をもって教えることが非常に大切です。

クリスチャンの親でも、「子どもに信仰を強制できない」と言う場合があります。もちろん、最終的には本人が決断しなければなりません。しかし、親や教師が「正しい道」を教えなければ、知らず知らずのうちに、テレビや雑誌が「悪しき道」を教え込んでしまします。

教師の方々、まず自分が聖書をしっかりと読んで、「正しい道」を理解して下さい。そして確信をもって語って下さい。そのためには、おさなりの準備では役にたかないのです。

第三に、心を重んじる教育です。子どもたちが御言葉を「心にとめ」、「心のうちに守り」、そして「心を守る」ように導きましょう。御言葉が、口・目・足による行動の原動力になるように、彼らの心(意志)に訴えかけましょう。

ワークの質問は、決して優等生的な答えだけを求めているものではありません。「そんなことできない」と正直に答える子どもと、しっかり話し合ってください。彼らの意志が、御言葉によって変えられることこそ、私たちがめざすべきところです。(鎌野善三)

目次

インタビュー 木村裕彦師に聞く	2
本書を用いる方々のために	4
教案とワークブックの使い方	5
年間カリキュラム	6
10月教案	8
11月教案	28
12月教案	44
1月教案	60
2月教案	80
3月教案	96
編集後記	112

10月

11月

12月

1月

2月

3月

●インタビュー● 木村裕彦師に聞く

木村裕彦先生は、日本福音自由教会のグレース宣教会の牧師です。現在、教会教育に重荷を担っている牧師や信徒の超教派的な団体である「チャーチ・エデュケーターズ」の代表を務めておられます。先生の教会教育に対する関心をお伺いしました。

質問 この団体は、『ホップ・ステップ・ジャンプ』という、教会学校教案誌と関係があるように聞きました。

——その教案誌を発行しているのは「教会教育推進会」で、親しい関係にはありますが、私たちの団体とは別組織のものです。私たちは、教会教育をもっと広く深い観点から考えています。

質問 先生が教会教育に関心をもちたれるようになったきっかけは、どんなことでしょうか。

——私がまだ学生の頃、インドネシアへの宣教師が見方を教えている姿にであいました。これこそ、教会教育の原点と考えることでした。また、キリスト者学生会（KGGK）の主宰として学生伝道にあたりながら、すぐに回心する学生もいましたが、長い時間をかけて聖書を学んだ結果、信じる者もいました。また学生たちと交わる中で、回心後も、じつくりと聖書的な価値観を伝えていく

ことが、その人がクリスチャンとして成長していくために不可欠なことだと確信をもったのです。

質問 すると先生は、幼児から中高生くらいまでの子どもたちを教える、狭い意味の「教会学校」より、かなり広い範囲での教会教育に関心をもっておられるんですね。

——その通りです。幼児から高齢者に至るまでの様々な人々が、ともに生活する中で、聖書的な価値観を学び、また分かち合うことが非常に大切だと思っています。伝道にしても、未信者に救いの教理を教えるだけではなく、共に生活する中で、クリスチャンの考え方、行動の仕方を示していくのも重要ではないでしょうか。どのように考え、どのように行動していくかを、聖書から学ぶことが、教会教育の根本だと思っています。

質問 それは、『牧羊者』がめざしていることと同じですね。旧約聖書の様々な箇所を取り上げて

小さい時に明確な信仰告白へと導き、さらに聖書に基づいて教育していくのです。

質問 この勉強グループの他に、人格的な関わりをもつ活動をおられますか。

——友だちのネットワークを広げる活動をしています。同じ趣味をもつ友人と一緒に過ごす時をもつのです。「友だちの友だちは友だち」という考えで、友だちの関係を拡大して、自然体で証していく働きです。これなら青年や婦人たちにもできるでしょう。実際、婦人のパッチワークの集まりには多くの未信者も集まり、そこで新しい友だち作りがなされています。

もう一つ私が力を入れているのは、夫婦単位での交わりです。土曜の朝、信徒のカップルと私たち夫婦で、一緒に朝食をとっています。まず、落ち着いた雰囲気でおいしい朝食がとれるレストランを、信徒のカップルに探してもらったことから、この働きは始まります。そして、「きのう、夫婦でどんな話をしたの?」「自分にとって意味のある会話はあった?」というような質問をします。すると、夫婦間の行き違いなどが、色々現れてきます。私たち夫婦も、教えられることがたくさんあります。まだ、4組ほどしかできていませんが、このような人格的な関係づくりは、非常に重要だと思っています。

質問 カウンセリングと似ていますね。

——似ていますが、私はこれは「教会教育」だと

考えています。言葉に表現することはしていませんが、そこには明確な目標があるからです。夫婦は、キリストを中心とする人間関係の一番基本的なものですから、それをしっかり確立することが目標です。夫婦関係が聖書的なものになると、親子関係もよいものになってきます。

質問 小学生以下の子どものための教育は、どのようになさっていますか。

——日曜学校の働きは、信徒教師にすべてを任せています。昔は、信徒教師のトレーニングを私ひとりがしていた時期もありましたが、現在は彼らだけで幾つかの研究部門を作り、研修の時をもっています。立派なことだと思います。

質問 牧師としての他の働きも色々あると思いますが、時間をどのように用いておりますか。

——幸いなことに、私たちの教会は複数の牧師で牧会しています。私は牧師ではありませんが、自分の賜物から、使命の中心は教育担当だと認識していますので、できるだけ多くの人々と人格的な交わりをもっています。主管牧師は、大所高所に立ち、教会全体を見渡して方向づけをする責任があるでしょうが、私はもっと低いところに立って、信徒・求道者にかかわらず、そのレベルにあわせて、共に話し合い、共に聖書を学びながら、聖書の示す価値観を学んでいくよう、努めています。たとえ牧師らしくなくても、私はこれが自分の使命だと確信しています。

いますが、一貫した主題は、神様の前に出て、神様と人格的な交わりをもつことです。しかもそれを、教師が生徒と人格的な交わりをもつ中で伝えていくとしています。先生はどんな形で、人格的な交わりをもっておられますか。

——私は、週に二回、平日の夜に中高生と一緒に勉強しています。スタッフが他に二名います。普通の塾とはまったく違って、私たちは、それぞれの生徒の実力にあったドリルや問題集を提供するだけで、生徒はそれを自分にあったペースで勉強します。わからない所があれば、上級生に尋ねます。そんな中で、聖書的な価値観から、クリスチャンとして、遅刻するのがなぜ悪いのか、あいさつするのはなぜか、なぜ勉強するのかなど、生活に則した話題や事柄を自由に話すときをもちます。中高生にとっては、勉強という、至って普通の生活の中で、聖書的な価値観を分かち合うのです。

質問 参加しているのは、クリスチャンですか。そうでない生徒たちですか。

——洗礼を受けてない場合もありますが、ほとんどがクリスチャン・ホームの子どもたちです。私は、クリスチャン・ホームの子女は将来の教会を担う重要な働きをするものだと思います。彼らは、いわば、言葉は良くないですが、教会の「固定給」のようなものです。（決してそうでない子どもたちを軽視するものではありませんが。）彼らにちゃんと聖書的な価値観を伝えていくなら、必ずすばらしいクリスチャンに成長していきます。

質問 超教派的な働きをおられるのは、何か理由があるのですか。

——一言でいうなら、色んな教派や教会の先生方から、伝道的教育や教育的伝道のヒントをいただきたいからです。また、信徒、求道者を問わず、子どもから老人に至るまでの幅広い人々に、聖書の示す価値観をしっかりと身につけてもらうため、今後も協力しあって、話し合いの時をもちたいと願っています。

質問 最後に、『牧羊者』を読まれた感想をお聞かせください。

——人間が教育を通して成長していくことは、神がそうなさいたいからです。ですから、神の言葉である聖書から学ぶことは、私たち人間の「人格教育」「信仰教育」の基本です。『牧羊者』は、その基本に忠実な教案誌だと思います。どの頁にも御言葉の掘り下げがあります。

このように良い教案誌ですから、次の問題はそれをを用いる人にあります。まず教師が御言葉に、そして神様に感動して、その感動を子どもたちに伝えていくなら、必ず伝わります。感動を共有する生活があるところで人は成長していくと、私は確信しています。

今日は良いヒントを教えてください、本当にありがとうございました。

本誌を用いる方々のために

主にある兄弟の篤い祈りと暖かい励ましゆえに、『牧羊者』の二〇〇一年度の上巻は、すべて売り切れました。幾つかの教会の追加注文におたえできなかったことを、心からおわび申し上げます。今回は、そういうことのないように、多めに印刷しました。といっても、無駄になることがないように、配慮しなければなりません。なかなか難しいことです。

三月に執筆者の会議、五月には各教区の教会学校部員の先生方の会議をもちました。そこで、現在の『牧羊者』をさらに良くするために、どのようにすべきかを色々話し合いました。また、個人的に要望をお寄せくださる方々もおられます。そんなご意見を可能な限り生かして、下巻の編集にあたりました。確認をも含め、以下の五つの点について説明したいと思います。

『牧羊者』の基本的性格

第一に、『牧羊者』の基本的な性格についての確認です。『牧羊者』を成人科に用いてくださっている教会も幾つかあることを喜んでいますが、九割は、三歳から十八歳までの子どもたちのために使われています。さらにその多くは、教会学校に定期的に出席してはいても、まだ洗礼を受けていない子どもたちです。そのような子どもたちのために、『牧羊者』のカリキュラムは考えられています。ですから、本書の主眼点は、そのような子どもたちの人格をめざめさせ、神の前に立たせ、悔い

改めに導くことだと言えます。もちろん、聖書知識を教えることも、決しておろそかにしてはいけません。しかし、彼らが自分の罪に気づき、主イエスを救い主として受け入れるように、細心の注意を払っていただきたいのです。たといクリスマスチャ・ホームの子どもたちであっても、この点をあまいにしてはなりません。明確に悔い改めと信仰に導くことが、その後のクリスチャン生活をのり豊かなものにするには、私たちが自身が経験していることだと思えます。

ただし、単発的に教会学校に来る子どもたちにとっては、このカリキュラムは難しく感じられるでしょう。開拓教会など、出席する子どもたちの顔が毎回違うような場合は、使いにくいと思います。そういう場合に用いられる教案も、将来は準備したいと思っています。

カリキュラムの修正

第二に、上巻で発表したカリキュラムを、下巻では少し変更しました。色々なご意見をうかがった上で、より良くするために変更したことです。で、ご了承ください。聖書箇所を変えたところが4箇所、順序を変えたところが1箇所あります。また、週題を内容に即したものに変わったところもかなりあります。詳しくは本書の6〜7頁をご覧ください。この下巻のみを用いていた際には何の問題もないのですが、上巻にはさみこんだ一覧表を用いると、混乱が生じます。そこで、修正

した一覧表を薄緑の用紙で作成しました。今までの一覧表を掲示しておられるのでしたら、ぜひこの新しいものに変えておいてください。お手数をおかけしますが、よろしく願います。

暗唱聖句か、中心聖句か

第三に、暗唱聖句も幾つかの箇所を変更しました。一例をあげるなら、12月9日の場合です。一見すると、暗唱する必要はないと思われるような聖句が選ばれています。しかし、その週の目的を明確にするためには、この聖句が最もふさわしいと判断しました。「暗唱聖句」というよりも「中心聖句」というほうが、より適切かもしれません。このような場合には、各教会で上手に扱って下さい。

教会暦との関連

第四に、教会暦との関係について説明します。上巻において、母の日には特別教案を用意したのですが、ペンテコステには何も配慮していませんでした。確かにペンテコステは、受難週と降誕節に並ぶ重要な日ですので、来年は特別な教案を用意したいと思います。このようなご意見を聞かせてくださったことを感謝します。

フラッシュ・カードの使い方

第五に、フラッシュ・カードの使い方について説明します。多くの教会で、礼拝説教の時とか、幼稚園の子どもたちのために、紙芝居として用いてくださっているようです。その場合、拡大コピーをする必要がありますが、今までのサイズだと普通の用紙にあいません。そこで今回はサイズを変更しました。そして余白の部分にそれぞれの絵の説明をつけ加えましたので、簡単にその日の内容を教えることができると思います。前回に続いて、今回も付録として各教会に一セットずつ贈呈いたします。

各週の構成

今年度から、聖書講解・研究資料・礼拝メッセージ例・ワーク解説の順番に配列するようになりました。おおむね好評を得ているようです。忙しい教師であっても、まず聖書を読んだ後、この順序に従って目を通してください。聖書そのものが何を訴えているのかを理解してこそ、子どもたちにも語りかけられます。「この箇所はもう何度も読んでよく知っている」と思わないで、新しい発見をしてください。

「礼拝メッセージ例が難しく、そのまま話せない」という意見もありました。経験の少ない教師は、特にそう思われるでしょう。しかしメッセ

ーシ例は標準です。標準を低くして、教師がそれに付け足すという方法もあります。でも標準を低くすると、伝えるべき真理まで失われる場合もあります。ですから、三・四年生に理解でき、伝えるべき真理は必ず伝えることを標準としています。何とか教師の方でしっかり準備して、それを単純にしたり、つけ加えたり、もっと説明したり、省いたりしていただきたいのです。

メッセージ例はあくまでも一つの例であり、そのままこれを子どもたちに読み聞かせることを想定してはいません。ぜひ、熟練した教師がなりたての教師を助けてあげてください。そして、子どもたちの理解力にあわせて、メッセージ例からより簡単にする方法や、細かく説明する方法などを考え出していただければ幸いです。

ワークブックの使い方

A・B・C・Dの四種類のワークブックが用意されていますが、いろいろな教会で、学年にこだわらずに用いていることを聞いています。それこそ私たちの願っていることです。ワークDをもう少しやさしく」という意見がありました。中学生にも用いられているので、あまり簡単にはできません。しかし執筆者にお願いして、多少ともやさしくなるようにしています。

「ワークAの紙質が厚すぎる」との意見もありました。切り取って製作する場合もありますので、他のワークと同じにはできませんが、今回は少し

薄目にしました。

ワークの定価について

最後に、祈っていただきたいことを申し上げます。ワークは、各教会の負担にならないように、できるだけ廉価でお届けできるよう努力してきました。しかし、部数が伸び悩んでいることもあって、赤字の幅が広がっています。どうしても値上げをしなければならぬときは、かかった実費を発行部数で割るという形で定価を決めたいと思っています。

終わりに

『牧羊者』は、私たちの教団が生み出し、育ててきた貴重な財産です。より良いものにするために、最善の努力を続けたいと願っています。ぜひ各教区のCS部員か、あるいは直接局長に、ご意見をお知らせください。すべてを実現することは不可能ですが、今までのものとの整合性を十分考えた上で、改善していきたいと思えます。続いてお祈りください。



神との関係

中心聖句・創世記1:26

神はまた言われた、
「われわれのかたちに、われわれにかたどって人
を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地
のすべての獣と、地のすべての這うものを治め
させよう」。



第一期 神の救いの計画

2001年		週題	聖書	暗唱聖句
4月1日	進級式	従われた主	ヨハネ18:1-11	同上
8日	受難週	救いの完成	ヨハネ19:28-30	同上
15日	イースター	復活された主	ヨハネ20:19-29	同上

●天地創造からヤコブまで		週題	聖書	暗唱聖句
4月22日	天地創造	人間の創造	創世記1:1-31	同上
5月6日	人類への命題	罪の侵入	創世記2:15-25	同上
13日	母の敬う	母を敬う	創世記3:1-24	同上
20日	母の敬う	母を敬う	ルカ2:20-21	同上
27日	アブラムの召し	アブラムの召し	創世記12:1-20	同上
6月3日	ベニヤミン	困難に立ち向かう	創世記14:13-24	同上
10日	父の日	信仰による義認	創世記15:1-16	同上
17日	父の日	自己の無能と神の全能	創世記17:1-8	同上
24日	父の日	神の友となる	創世記18:1-33	同上
7月1日	父の日	争わないイサク	創世記22:1-19	同上
8日	父の日	争わないイサク	創世記26:1-33	同上
15日	父の日	争わないイサク	創世記27:1-28	同上
22日	父の日	争わないイサク	創世記32:1-33	同上

第三期 主イエスとの関係

●降誕節		週題	聖書	暗唱聖句
12月2日	アドベント	その名はインマヌエル	イザヤ7:10-14	同上
9日	アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25	同上
16日	アドベント	博士の訪問	マタイ2:1-12	同上
23日	クリスマス	クリスマスの贈り物	ヨハネ3:16	同上

●イエスに出会った人々		週題	聖書	暗唱聖句
12月30日	年末感謝	罪を赦された人	マルコ2:1-12	同上
1月6日	新年	主のあわれみとみわざ	マルコ5:1-20	同上
13日	新年	たた信じていなさい	マルコ5:21-34	同上
20日	新年	汚れたままで近づくと	マルコ5:25-34	同上
27日	新年	神の恵みとゆるぎない信仰	マルコ9:14-29	同上
2月3日	新年	信仰のスタート	マルコ10:17-31	同上

●わたしは～である		週題	聖書	暗唱聖句
2月10日	柔和で謙遜な主	柔和で謙遜な主	マタイ11:25-30	同上
17日	安息日の主	安息日の主	マタイ12:1-8	同上
24日	父とひととなり働く主	父とひととなり働く主	ヨハネ5:17-24	同上
3月3日	救いを完成する主	救いを完成する主	ルカ9:28-36	同上
10日	共におられる主	共におられる主	マタイ28:16-20	同上

●受難節		週題	聖書	暗唱聖句
3月17日	不正な裁判	不正な裁判	ルカ23:1-25	同上
24日	十字架による救い	十字架による救い	ルカ23:32-43	同上
31日	復活を信じる視点	復活を信じる視点	ルカ24:1-12	同上

第二期 神の前に立つ備え

●神の国の価値観		週題	聖書	暗唱聖句
7月29日	人を汚すもの	人を汚すもの	マルコ7:1-23	同上
8月5日	生きている者の神	生きている者の神	マルコ12:18-27	同上
12日	一番重要な命令	一番重要な命令	マルコ12:28-34	同上
19日	まことの献金	まことの献金	マルコ12:41-44	同上
26日	良きサマリヤ人	良きサマリヤ人	ルカ10:25-37	同上
9月2日	天に宝をたくわえる	天に宝をたくわえる	ルカ12:13-34	同上
9日	招いておられる神	招いておられる神	ルカ14:15-24	同上
16日	神のもとに帰る	神のもとに帰る	ルカ15:1-32	同上
23日	死後の世界	死後の世界	ルカ16:19-31	同上
30日	謙遜な祈り	謙遜な祈り	ルカ18:9-14	同上
10月7日	悪い農夫のたとえ	悪い農夫のたとえ	マタイ21:33-46	同上
14日	人を裁くのはだれか	人を裁くのはだれか	ヨハネ8:1-11	同上
21日	苦難がある理由	苦難がある理由	ヨハネ9:1-12	同上

●罪の解決		週題	聖書	暗唱聖句
10月28日	罪とは何か	罪とは何か	創世記1:26-3:23	同上
11月4日	罪の支払う報酬	罪の支払う報酬	ローマ6:23-7:23	同上
11日	罪が赦されるために	罪が赦されるために	民数記30:1-15	同上
18日	罪を犯す兄弟に	罪を犯す兄弟に	マタイ18:15-20	同上
25日	収穫感謝	収穫感謝	ピリ4:4-7	同上

聖書 マタイ21・33～46
過 題 悪い農夫のたとえ

序論

今週のテキストは、28節から始まる第一のたとえ話と、22章から始まる第三のたとえ話の中間に位置する。これら3つのたとえ話は、先に招かれていた者が神の招きを拒絶するという共通の主題をもっている。ユダヤ人指導者は、神に選ばれた民でありながら神の御心を理解していなかった。

一、神のものを私物化したユダヤ人

ぶどう園はイスラエルの国をたとえている。この国を神から任された農夫たち（つまりユダヤ人指導者）は賃賃料を払わなかった。それだけでなく、彼らは神から遣わされた僕たち（つまり旧約の預言者たち）を迫害し、さらに主人の息子（つまり御子イエス）も殺してしまった。その動機は、△あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう△というものだった。

神のものを自分のものにするとは、横領罪である。指導者たちは民を正しく導き、神の国を建設すべきだったのに、それを私物化しようとしたのだ。そこで神は、実を結ぶ他の農夫である異邦人たちに神の国をゆだねられたのである。

しかし現代の人々も横領罪を犯している。農作物は人間の力だけでできるものではない。太陽、雨、水、空気、と絶妙なバランスで保たれて、はじめてできる神の作品なのである。そして家畜や

海の魚も空の鳥も、神の作品であって決して人が造り出すことはできない。工場で造られる工業製品であっても、その原料は被造物である。さらに自分の健康も才能も、そして地上の人生すら人が自分で造ったのではなく、神からまかされたものである。人には使用権はあるが所有権はない。この農園のようにまかされているのである。このように、神のものを神からまかされておきながら、「神はいない。神は死んだ」と言い、神のために用いないばかりか、神に感謝すらしない人々は、この農夫と同じく横領罪を犯している。

二、実を結ばなかったユダヤ人

ぶどう園の収穫を主人に分けなかった農夫たちは、ちょうどこの章の18～19節に述べられているいちじくの木のよう、「看板だおれ」だった。もしユダヤ人指導者が民を正しく導いていたなら、神の恵みがこの国から異邦の国々までも広がっていったであろう。しかし実際は、彼らが神に従わずに横領したために、神の御名が汚されたのである。その結果が、あのバビロン捕囚だった。その後、神の大きな憐れみによって彼らは回復されたにもかかわらず、彼らは再び形式的な信仰に陥り、神と人とを愛する生き方をしていなかった。それゆえ神は、△神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう△と仰せられたのだ。

神は私たちが実を結ぶことを願っておられる。すべてが神から与えられていることを心から感謝して神のために用いることや、人々を愛し

て仕え、良きものを人々に分け与えることを神は願っておられる。それができていないなら、できない自分を正直に認め、まず悔い改めねばならない。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、神を信じて罪を悔い改め、主により頼む者こそ御国の民である。彼らはその信仰によって、必ず実を結ぶことができるようになる。

三、隅のかしら石である主イエス

42節の△家造りらの捨てた石が隅のかしら石となった△は、詩篇118篇からの引用である。この石は本来、選民としての特権が与えられたイスラエル民族のことだが、ここでイエスはご自身をこの石にあてはめておられる（『新聖書注釈』）。バビロン捕囚から回復されても結局実を結ばなかったイスラエルの民は、紀元70年、ローマ帝国によって滅ばされた。しかし人々から捨てられ、十字架刑に処せられた主イエスは、三日後に復活され、教会のかしらとなられたのである。

隅のかしら石なる主は、信じる者にはその上に教会と自分の人生を築き上げる土台となってくださる。しかし信じない者に対しては、死後ならびに再臨の時に彼らをお裁きになられるのだ。

結論

現在与えられているものは、本来すべて神のものである。それを自分のものとするなら、横領罪である。そういう人は、必ず裁かれる。罪があるならそれを悔い改め、神から与えられたものを感謝して、実を結ぶ生活をしよう。それこそ、主イエスという土台の上に人生を築くことである。

研究資料

(足立)

マタイ21・28～22・14には、イエスが語られた3つのたとえが記されている。ここ21・33～46は「悪い農夫のたとえ」と呼ばれている2番目のたとえである。最初のたとえが、指導者たちのこれまでの態度を指摘しているのに対し、このたとえは指導者がこれからどういう生き方をするかを預言している。すなわち、ユダヤ人が自ら神の道を継続的に拒否することによって、どのような立場に自分たちを置くかが告げられている。ぶどう園の主人は神を表し、ぶどう園はイスラエル、農夫たちは国の指導者たち、僕たちは預言者たち、そして息子はイエス自身である。

テキスト

33～34 このたとえは、多分ユダヤ人指導者（23節）だけではなく、神殿の庭にいた群衆に対しても語られたのであろう（参照ルカ20・9）。33～34節は、明らかにイザヤ5・1～7と詩篇80・8をほのめかしている。土地所有者が負う数々の労苦が、ぶどう園を管理することで示されている。彼は動物を締め出すかきを作り、盗人や火事を見張るやぐらをたて、ぶどうの実を絞るための酒ぶねを掘った。これらはみな、彼のぶどう園が実を結ぶようにとの確かな願いを示している。農夫たちは、主人が留守の間ぶどう園の世話をし、労働に励む。そして主人の使いとして僕たちが遣わされたのは、ぶどうの実の収穫の分け前を受け取る

うとしたためである。

35～37 35節の動詞の、袋だたきにし（デロー）は、ひどく叩く、或いは鞭で打つことも意味し、一般に肉体を虐待することを表す（参照エリミヤ20・1～2、37・15。ミカヤに因しては、列王上22・24を参照）。預言者殺しが旧約に証言されている（列王上18・4と13、エリミヤ26・20～23）石打での処刑（歴代下24・21～22、参照マタイ23・37、ヘブル11・37）。主人はさらに僕たちを送ったが、彼らは同じように残酷な方法で取り扱われた（36節）。最後に（37節）主人は、自分の息子を遣わした。これは息子になら、農夫たちも敬意を払ってくれるであろうとの主人の希望とあわれみであった（参照ローマ2・4）。

38～41 農夫たちの行為は一貫して冷淡なものであった。厳密にはそれがどのようにイエスに適用されるかは、明確ではない。イエスは彼の存在を根本的に認めようとしないうダヤ人指導者たちの態度を他の箇所でも示している（23・27）。そしてイエスは、彼らが彼の権威に服従することを望まない主張している（21・23～27）。

6ヶ月間、イエスは弟子たちに「エルサレムで支配者たちは自分を殺すであろう」と語ってきた（16・21、17・23、20・18）。今イエスは支配者たち自身に、たとえの形ではあるが指導者たちが理解できるレベルで語っている（45～46節）。数週間後にペテロの説教（使徒2・23～24、3・14～15）を聞いた者たちは、これらのイエスの御言葉を思い出して、更なる罪の自覚を持ったであろう。

42 新約聖書においてもつばらイエスが尋ねるのは、あなたがたは、まだ読んだことがないのかと言つ言い回しである（マタイ12・3、19・4、21・16、マルコ12・10）。そしてこの場合でも、事実上聖書が自分を指していることを主張している（ヨハネ5・39～40）。ここは詩篇118・22～23からの引用である。石の象徴は、キリスト者がなぜイエスは非常に多数の自分の民から拒絶されたかを理解するために、初代教会においては重要であった（使徒4・11、ローマ9・33、1ペテロ2・6）。

イエスは建物のイメージに移る。隅のかしら石とは、大方屋根の手すりや欄干のえり抜き石、外部の階段、町の壁のことである。詩篇118篇はダビデについて書かれたものであるが、彼の偉大な子孫の型である。家造りら（複数）とは、コリアテやダビデ自身の家族やサウルのことを指す。彼らはダビデを見過し、拒否したが、神は彼らを選ばれた。同様にイエス時代の家造りら（民の指導者たち）は、ダビデが予表したイエスを拒絶した。だが神は、彼を隅のかしら石とされた。他に考えられるのは、多分この詩篇はイスラエルを問題にしていることだ。国家としてすべての外敵から侮蔑され脅かされてきたが、神はこれを隅のかしら石とされた。そのイスラエルを辿り直した（参照2・15）お方がイエスであり、彼こそイスラエルの真の中心である。そのイエスが彼の敵から同様な扱いを受けるが、神は彼を立証される（参照23・39）。

43 参照マタイ7・16～20、使徒13・46、18・5～6、1ペテロ2・9。

● 週 題 悪い農夫のたとえ

● 聖 書 マタイ21・33〜46

● 暗唱聖句 神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられる。

マタイ21・43

● 目 標 神様から預かったものを神様のために用いて、実を豊に結ぶべきことを発見する。

序論

パリサイ人や祭司は、自分たちは神に選ばれた者で律法を守っているから天国に入れるが、取税人や異邦人は入れないと考えていました。ところがイエス様は、それとは反対に、取税人や異邦人こそ天国に近いことを教えられました。

(起) ストーリーを語る

イエス様は、譬えで話されました。一人の主人がブドウ園を造りました。かきめぐらし酒ぶねを掘り、やぐらを立て、全てが整ったブドウ園になりました。そして、それを農夫たちに貸して旅に出たのです。このブドウ園は神の国のことで、主人は神様、農夫はユダヤ人を表しています。神様は、神の国をユダヤ人に預けて、そこから全ての民が祝福を受けるように計画されました。

そして、収穫の時期がきました。主人は、分け前を受け取るために、僕たちをブドウ園に送りました。この遣わされた僕は、神様の遣わした預言

者のことを表しています。しかし、農夫たちは主人に借りていた農園なのにもかかわらず、分け前を渡しません。それどころか僕の一人を袋だたきに、一人を殺し、もう一人を石で打ち殺したのです。そこで主人は、次にもっと多くの僕たちを送りましたが、前と同じようにひどい目に合われるばかりです。これは、信仰の実をらせるようにと忠告するために神様が遣わした預言者を、ユダヤ人たちが殺したり追い出したりしてきたことを意味しています。

そこで主人は、最後の切り札として、あと取り息子なら敬ってくれるだろうと思い、彼を送り出しました。この息子はイエス様を表しています。ところが、その息子を見た農夫たちは、財産を手に入れるために、彼をブドウ園の外に引き出して殺してしまいました。そう、ユダヤ人たちはイエス様を十字架で殺してしまつたのです。

こう話してからイエス様は、この譬え話を聞いていた人たちに、「この主人は農夫たちをどうするでしょうか」と質問されました。彼らは、「悪人どもを皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫にそのブドウ園を貸し与えるでしょう」と答えました。彼らも、農夫たちは悪人だと判断したので、農夫たちが農園を任されたのは、自分勝手に使つたためでなく、収穫を主人と分かち合うためでした。人に借りたものを自分の勝手に使うのは、泥棒と同じです。さらに彼らは、息子であるイエス様を殺してしまいました。でも殺されたイエス様は隅のかしら石となって、人類の救いの土台、教会の土台となられたのです。そして、神

の国は神様を信じる異邦人の手にゆだねられ、神様を信じて、神様のためにちゃんと実を結ぶ人に与えられるようになりました。

(承) 学ぶべき真理

神の国は良い農夫しか入れません。神様から預かったものを、神様のために用いる人が良い農夫です。神様のものを自分のものにしてしまつて、神様のために使わない悪い農夫は、結局滅びてしまいます。最初、神の国はユダヤ人たちのものでした。信仰の父祖アブラハムから始まって、神様の祝福を受けて、それを世界の人々へあふれさせるのが彼らの役割でした。しかし、これはユダヤ人の手から、異邦人の手にわたされました。神様を信じて、神様から預かったものを神様のために使う人にまかされたのです。

(転) 生活への適用

皆さんはどうでしょう。神様から預かったものを神様のために用いていますか。元氣なからだも読み書きできる能力も、神様から預かったものです。あなたは神様から預かったものを、感謝もせず自分のためだけに使っていないませんか。

結論

預かったものを自分のためにだけ使っているなら私たちも泥棒です。悔い改めて実を結ぶためには、何ができるかを考えてみましょう。そして私たちが救い、人生の土台となられたイエス様を信じて、神様から預かったものをういて実を結んでいく、神の国にふさわしい者になりましょう。

ワーク A

● 導入のヒント

秋になると、たくさんのお菓子を食することができま。栗、ぶどう、梨、柿など、たくさんのおいしい実がなりますね。神様は、私たちもすばらしい実をみのらすことができるとおっしゃっているのですよ。

● ワークについて

神様からいただいたものはたくさんあります。私たちのからだも、神様からいただいたものです。みんなは、自分のからだで神様のためにどのようなことができるでしょうか。

ワーク B

● 質問1 「悪い農夫のたとえ話」をくり返しつつ、主人のために実を結べなかつた「農夫」のあやまりを知りましょう。

● 質問2 「わたし」が神様から預けているもの(体力・性質・賜物など)を発見しましょう。

● 質問3 自分の賜物や得意なものをういて、神様や他の人のために何が出来るでしょうか。それが、実を結ぶことであり、祝福なのです。

● 賛美歌 「わたしたちはるばるの子」

(日本ホーリネス教団子どもさんびか99番)

● 今日のお祈り 「神様、わたしが神様からいただいているものを、自分のためだけでなく、他の人のためにも使えるよう助けて下さい。」

ワーク C

● ワークをする時に、テストのようにならないように心がけて下さい。答案用紙を配って、書き込むための沈黙の10分を過ごし、その後答えあわせをする、という風にならないように。準備の中でメッセージとワークの内容を把握し、その上で、ワークを材料・媒介として子どもたちと会話をしましょう。考えや思い、気持ちを聞きながら、本心で話し合えるように努力して下さい。そこから生活状況、信仰の内容を知ることが出来ます。

● 3問目は、すべて神様が作られたものです。いちいち「神様ありがとう」と言うのはめんどくさかったり、照れくさかったりして、言いたくないかもしれません。しかし、これをすれば、きつと「すべては神様が作られたんだ」と印象深く心に残るでしょう。

ワーク D

● 質問1 主人は、働くために必要な準備を十分にしたらうで農夫に貸したこと、また、主人は労働に報われるけれども、元手があつての収穫でしかないことを考えて下さい。

● 質問2 農夫が収穫を横領するためにした仕打ちをみましょう。労働の実は、農夫のものという考えが正しいかどうか、一緒に考えて下さい。

● 質問3 神様は、ぶどう園を準備して農夫に貸した主人のように、世界を造り、人に治めるように委ねておられることを理解しましょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 ぶどう園の主人、ぶどう園を借りた農夫、主人が遣わした僕、主人の子とは、それぞれだれのことを意味しているのでしょうか。

2 ぶどうの収穫の季節になって、主人の遣わした僕と主人の息子を、農夫たちはどのように扱いましたか。

3 あなたがぶどう園の主人ならば、この農夫たちをどうしますか。

● 自分に当てはめてみよう

1 主人がぶどう園を農夫たちに貸し与えたように、私たちにも神様から貸し与えられているものがあります。どんなものがあるでしょう。

2 神様から与えられていることを感謝し、神様にその感謝を表していますか。

3 あなたは、神様から与えられたものを、農夫たちのように横領しようとしていませんか。

● 話し合ってみよう

1 預かったものを自分だけのものにしてる人を見たら、あなたはどう思いますか。

2 ぶどう園をまかされた農夫たちは、地代や年貢を払うべきでしたが、それを横領しました。同じように私たちも、神様に支払うべきものがあります。例えば、神様に感謝することは、実を結ぶことではないでしょうか。

3 あなたは、イエスキリストを土台にして、どんな家を建てようとしていますか。

聖書 ヨハネ8・11-11
週題 人を裁くのはだれか

序論

7・53-8・11が括弧で包まれているのは、幾つかの有力な写本に、この箇所が省かれているからである。しかし、この記事は非常に重要な意味をもつ。これは、あなたがたは肉によって人をさばくが、わたしはだれをもさばかない(8・15)という主の言葉の意味を具体的に例示しており、主の愛と義の両面をみごとに説明しているからだ。私たちをさばくのはだれと考えるかによって、人生は大きく変わってくる。

一、当事者は人を裁けない

主イエスが宮で教えておられたとき、八律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱって来た。姦淫の現行犯逮捕である。律法学者たちは、前の日から張り込みでもしていたのだろうか。それに、姦淫の相手の男性はどうなったのか。6節の「イエスをためして、訴える口実を得るためであった」という句から考えると、どうもこれは仕組まれた罠だったように思える。本当は人々が罪を犯さないように警告すべき律法学者たちであるのに、人が罪を犯すのを待っていたのである。

申命記22・23-24によると、姦淫していたふたりは石で打ち殺されなければならない。もし主が石打ちを認められるなら、ローマ法に背くことに

なり、それを否定されるなら、モーセの律法に背くこととなる。どちらにせよイエスを八訴える口実を得ることができるので、律法学者たちは、一人の女性を犠牲にしたのであろう。これは、律法の精神にふさわしいことだろうか。

しかし主は、黙って八指で地面に何か書いておられた。十戒を一つ一つ書いておられたのかも知れない。そしてあなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよいと仰せられた。あなたも律法のすべてを守ることでできない罪人であり当事者ではないか、と示唆されたのである。八彼らは年寄から始めて、ひとりひとり出て行った。私たちも、自分が罪を犯しているのに、よく人を裁いているのではないだろうか。当事者は、決して審判者にはなれないのだ。

二、主も人を裁かない

残された女に、主は「あなたを罰しない」と言われた。主は御父からさばきの権威を与えられている(5・27)が、あえてその権威を行使されなかったのだ。でも最後の審判の時には裁かれる(5・28-29)。そして彼女に八今後はもう罪を犯さないようにと仰せられたのである。彼女は、主が自分を罰せられなかったことを大きな恵みと感じ、その後二度と同じ罪を犯さないように、主に従って歩んだであろう(12節)。

現在でも神は、私たちの罪をすぐに裁かれはしない。でも、すぐに裁かれないからといって、罪を犯し続けてはならない。神は忍耐して、罪人が悔い改めるのを待っておられるのだ。死んだ後、

最後の審判の時に、神は私たちの隠れたこともすべて裁かれることを覚え、どんな小さな罪をも悔い改めて生きる毎日とすべきである。

三、神の裁きの前に立つ

私たちの考えや行動は、人からの評価によって左右されやすい。これは、つい最近までの日本人の行動パターンだった。人の目を意識して行動するのは、他人の目や世の中の評判が審判者になっているのである。また最近では、人目を気にせず、自分が楽しいと感じる行動をする人々が増えてきた。これは自分が自分の審判者になっているのである。しかしこの両者とも、聖書的な生き方ではない。だれがあなたの本当の審判者なのかよく考えよう。本当に必要なのは、神の前を歩むことである。神が審判者なのだから、神がどう見ておられるかを考えて行動すべきである。

自分がしたくても、してはいけないことはしないし、したくなくても、しなければならぬことはする者となる。自分が自分の審判者ではないのだから。また、人々がどう評価しようが、しなければならぬことはするし、してはならないことはしない者となる。他人が自分の審判者ではないのだから。

結論

私たちは、毎日、神の目を意識して生活しているだろうか。自分が神のようになって、だれかを裁いたり、自分のことだからと自分を評価してはならない。日々神の前に出て、神の目で見て善か悪かを判断し、神の目の前を歩もう。

研究資料

(足立)

7・53-8・11の部分が、ヨハネ福音書の確かな一部であると支持することには多少の異論がある。最も古い写本には存在が立証されていない。また写本に出てくる場合にも、時々他の部分で発見される(7・36の後、7・44の後、ヨハネ福音書の最後、ルカ21・38の後)。この部分があまりにも重要で失いたくないと感じた写本生たちが、これをどこに置けば確信できなかったのではなからうか。そして、もし正しい配置に関して彼らが一致できなかったとすれば、本当のテキストかどうかでも一致できなかったであろう。

この箇所に本文批評上の問題があるということに十分認めた上でも、この箇所の主旨は、イエスの生涯と使命のみわざと十分調和を保っている。多くの本文批評学者が認めている。配置の場所が確定できないにしても、イエスの生涯における挿話的事件を説明するものであることに疑いはないと支持されている。

テキスト

1 この出来事が起こった背景は、イエスの生涯の最後の部分に適合すると考えられる。彼の受難前の一週は、ベタニヤで夜を過ごし、昼間はエルサレムの宮で教え、オリブ山で休息を取っていた(参照マルコ11・11-12、19-20、特にルカ21・37)。オリブ山はイエスにとって最も大切な場所の

ひとつであったであろう(参照ルカ22・39)。

2 この節の内容はルカ21・38と密接に比較できる。集まってきた、教えておられたという動詞は、どちらも未完了時制なので、継続を意味している。

3 律法学者たちやパリサイ人たちは、共観福音書ではしばしば見られる結合であるが、ヨハネにおいては「律法学者」(グラマンテウス)という言葉は、一度も言及されていない(マタイ22回、マルコ21回、ルカ14回)。この二つの言葉は同じ人々を意味しない。というのは律法学者は必ずしもパリサイ人である必要はなかったから。姦淫をしている時につかまされた女とは、その現場を押さえられたと言ふ意味。本来ならイエスの前に男も連れて来られるはずである。しかしひとりの女だけが連れ出されている。

4 先生とは間違いなく同じと同等の評価である。5 モーセ律法引用の権威が、広く議論される問いが起きている。この女性既婚者か、独身者か、婚約中なのか。石打の刑は聖書に記述されている刑罰である(レビ20・10、申命22・22、23・24)。律法学者とパリサイ人は、あなたを強調している。次節から明らかであるが、彼らは誠実ではない。イエスを罵るにはめるための質問だった。最も受け入れられているのは、ローマの法律とモーセの律法のいずれかで、イエスを告発する理由を見出す見方である。もしイエスが「石を投げろ」と言えば、ローマ法に抵触する(当時ユダヤはローマの属国で、死刑執行権を持っていなかった)。逆にイエスが、「石を投げるな」と言えば、モーセ

律法に抵触することになる。またそれまで愛を説いてきたイエスを攻撃することも可能である。

6 彼らはイエスを訴える法的根拠が欲しかった。それに対するイエスの態度は、彼らを無視することであった。イエスが地面に何を書いていたかはわからない。出エジプト23・1bという説がある。

7 執拗な質問に対してイエスは沈黙を破って答えられた。罪のない(アナマルテス)という言葉は、新約聖書のどこにも見出せない。イエスの言葉は良心へのアピールであり、そこにいたすべの者自身の生活にかかわる警告である。もしだれかが彼女に石を投げたなら、その人は確かな証人にならなければならない。

8 ここでもイエスが何を言っていたかはわからない。出エジプト23・7との説もある。

9 出て行き(エグゼルコント)と言ふ動詞の時制は、未完了で継続を表している。すなわち行列を作るように出て行く様子。年寄たちから出て行ったのは、人生の経験そのものが自分自身の罪の現実を告発しているであろう。イエスの言葉は、そこにいたすべての人間に自分の罪を自覚させた。10 女よ(ギユナイ)と言ふ言葉は、この女性の尊厳を語るのに十分である(参照2・4、4・21、19・26、20・13)。

11 イエスの言葉は、彼女の罪を容認してはいない。彼はあわれみを示し、義に導いている。

●週題 人を裁くのはだれか
●聖書 ヨハネ8:1-11
●暗唱句 あなたがたの中で罪のないものが、まずこの女に石を投げつけるがよい。
●目標 神様がその真の裁きをする方だと発見し、神様の目を意識して歩むようになる。

導入
ケンカやいじめなどのいろんな問題がおきたとき、その解決に苦勞しますね。どのように裁くかは難しいことです。今日は、イエス様がどのように裁かれたのかを学びましょう。

(起) ストーリーを語る
イエス様が宮で教えておられるとき、律法学者やパリサイ人たちが、姦淫をしている現場で捕まえた女を引っ張って来て、イエス様に質問しました。それは、この罪を犯した女をモーセの律法で裁くなら石打ちの刑にしなければいけないが、あなたはどうか思うか、というものでした。この質問には、イエス様を訴える口実を見つけようとする罠が仕組まれていました。当時のユダヤの国を支配していたローマ帝国の法律では、裁判をせずにユダヤ人が勝手に石打ちの刑を行って、人を殺すことは許されていませんでした。でも、石打ちをしないのはモーセの律法に背くことになります。そこで、イエス様が石打ちで殺せとおっしゃって

も、殺すなとおっしゃって、彼らはイエス様を訴える口実を得ることができたのです。
イエス様はすぐには返事をされず、黙ったままかがんで地面に何かを書いておられました。しかし彼らが問い続けるので、イエス様は身体を起こして、「あなたがたの中で罪のないものが、まずこの女に石を投げつけるがよい」と言われ、もう一度身をかがめて地面に何かを書き続けられました。すると、そこにいた人たちは、自分の過去の罪を思い出したのか、年寄りから一人二人といなくなり、最後にはイエス様と女だけがそこに残されたのです。罪がないと言える人は、一人もいませんでした。罪を犯した者は、審判者になって裁くことができないのは当然です。
イエス様は身を起こし、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰するものはなかったのか」と尋ねられました。そしてだれもいないことを聞かれて、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」とおっしゃいました。イエス様も、その女の人を裁かれなかったのです。それは、イエス様が罪を犯されたからではありません。神様が人を裁かれるのは人が死んだ後です。地上の人生は、人が罪を悔い改めるのを神様が待っておられる期間なのです。神様がすぐに裁かれないのは、人が自分で罪に気づいて悔い改めてほしいからです。イエス様はこの後、十字架で死んで復活されました。そして裁きを行う権威が与えられ、審判の時に、明確に裁きを下されます。

(承) 学ぶべき真理
罪を犯した私たちは、人を裁くことはできません。当事者だからです。きよく正しく、全ての事情を存じの神様以外に、裁きができる者はいません。その神様も、罪を犯したらすぐにばちをあてたりなさいます。神様は、私たちが罪を悔い改めるのを待っておられるのです。ですから、私たちは勝手に人を裁いてはなりません。
さらに、審判者は神様であることを、徹底して覚えましょう。あなたも、あなたの周囲の人も審判者ではないのです。ですから、自分の好みで善悪を判断したり、回りの人の目や評判を気にして善悪を決めてはいけません。大切なことは、神様の目で見て正しいかどうかです。

(転) 生活への適用
友だちと下校中にだれかの帽子が風で足下に飛ばされてきたとき、友だちに見られてるから拾ってあげませんでした。この場合、だれが審判者になっていきますか。逆にあなたが、拾ってあげた子をひやかしました。これは自分が裁いてますね。ゲームソフトの発売日だから学校を休んで買いに行きました。この場合、だれが審判者ですか。自分勝手に善悪を決めて裁いてはいけません。

結論
本当の裁きができるのは神様だけです。私たちは当事者ですから、自分勝手に人を裁いてはいけません。正しい裁きを神様に委ねましょう。また、神様が猶予されているのですから、先走って、自分勝手に人を裁いてはなりません。また、私たちもこの期間に悔い改めて、裁きに備えましょう。

ワーク A

●導入のヒント
みんなは嘘をついたことがありますか。だれにも教えられたことがないのに嘘をついてしまうのはなぜでしょうか。考えてみましょう。
●ワークについて
今日のお話を聞いて、自分の心は何色だと思っただでしょうか。自由に色をつけてみましょう。罪のない心になるためには、イエス様に任せていただくのが良いのか、それとも蛇なのか、心の上的のりで貼ってみて下さい。

ワーク B

●質問1 「裁き」を考えるために「罰」について知ります。律法では、罪を犯した女性に対してどんな罰を与えたでしょうか。
●質問2 イエス様の言われた「光と愛の言葉」です。石打ちの刑を思いつつ、しかも、私たちがだれをも裁ける者ではないことを、自分の心に光を当てながら考えましょう。
●質問3 心に光が当てられた私たちは、だれも裁けません。人を裁くお方は神様だけです。
●賛美歌 「神よこの日」(子どもさんびか56番)
●今日のお祈り 「神様、悪い人だと思ったり、決めつけたりしないで、神様が判断して下さい。ことにおまかせできますように。」

ワーク C

●裁く資格のある方は、罪のないイエス様だけだと把握させます。
●そのイエス様が、裁かなかった事実注目させ、その理由を考えさせます。ここで、主の十字架の意味を感動的に教えることができます。
●身近なけんかや争いも、裁く資格があるのはイエス様であって自分ではないことを確認します。
●でも実際は、兄弟や友だちとけんかしたり、親に逆らったりして、行動においても内心においても、人をさばっていることに気づかせ、本当にさばく資格のあるイエス様にお任せすることを指導します。

ワーク D

●質問1 弁解の余地のない現行犯。しかし、人に知られなくても、罪は罪であることを忘れないように。
●質問2 イエスを陥れるためですが、自分のことは棚上げて断罪することがもつと問題です。
●質問3 他人の罪を咎めていた者が、自分の内面を探られる場面にいたらどうかを考え、主の言葉の意味を理解しましょう。
●質問4 自分にとって不条理な断罪を受けた経験から、人は必ずしも正しい判断をするわけではないことを考えてみましょう。公正な絶対者である神がわかるように話しあって下さい。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 姦淫の現場で捕らえられて、人々の前に立たされた女性の気持ちはどうなものであったでしょうか。
- 2 当時の律法によれば、この女性はどのように裁かれることになっていましたか。
- 3 律法学者、パリサイ人は、イエス様をためして、この女性を石で殺すべきかどうか尋ねましたが、この質問にはどのような魂胆があったのでしょうか。
- 3 イエス様が「罪のない者が石を投げよ」と言われた時、石を投げることでできる人はいますか。なぜでしょう。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 律法学者、パリサイ人は、自分たちは正しい者だと考えていましたが、あなたは自分を正しい者と考えているでしょうか。
- 2 あなたなら、この女の人に石を投げますか。
- 3 自分の考えは、いつも正しいでしょうか。あるいは他の人の考えが正しいのでしょうか。その判断する基準は何だと思えますか。
- 話し合ってみよう
- 1 なぜイエス様は、姦淫の女に「わたしもあなたを罰しない」と言われたのでしょうか。
- 2 あなたは、神の目か、他の人の目か、自分の目か、どの目を一番意識していますか。
- 3 神様に評価される人は、どんな人でしょうか。

聖書 ヨハネ9・1～12
週 題 苦難がある理由

序論

障害をもって生まれたのは、本人が親が先祖が罪を犯したからだという考え方は、洋の東西を問わず見られる。しかし今週のテキストで、主イエスはそれを明確に否定された。障害や苦難に対する私たちの考え方は、この主の言葉に基づくべきである。因果応報は聖書の教えではない。

一、障害は罪の結果ではない

十戒の中には、△わだしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼす▽（出エジプト20・5）と記されている。確かに親の悪い影響は子に及ぶことはある。例えば、酒が食卓に置いてある家庭では、子にとって飲酒は当たり前で、悪いことだとは思えない。そしていつしか自分も酒を飲むようになる。しかしそれはお互いが交わることでできる△三、四代▽の期間でしかない。孫が曾孫までなら影響があるだろうが、生きて交われない人々には影響しないのである。

聖書には、個々人がその罪の責任を負わねばならないことが、明確に記されている。エゼキエル18章20節には、△子は父の悪を負わない。父は子の悪を負わない。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰する▽と書かれている。さらに主イエスはよりはっきりと、障害があるのは△本人が罪を犯したのではなく、また、その両親が犯

したのではない。ただ神のみわざが彼の上に現れるためである▽と仰せられた。つまり、障害や苦難は、因果応報ではなく、神のみわざが現れるためだと宣言されたのである。

二、神のみわざとは何か

ヨハネ6・29で、△神がつかわれた者を信じておられる。障害や苦難があるのは、神が遣わされた方を私たちが信じるためのものだ。痛みは、病があることを教えるために必要である。病は、死があることを教えるために必要である。死は、人には裁きと永遠の死が待っていることを教えるために必要である。神は、病も死も地上から取り去られない。病や死は、人間が信仰を持つという神のみわざが現れるために必要だからである。

病は癒される。神は△わだしは主であって、あなたをいやす者である▽（出エジプト15・26）と仰せられた。神様は病を癒す方なのである。私たちはほとんどの病を癒され続け、最後の一つの病だけ癒されずに死ぬ。それなのに癒してください。た神様に感謝せず、病気になる△神も仏もない△と言つのはおかしい。神様は全能の力で奇跡的に癒してください。また、人間に与えた自然治癒力で癒してください。どのように癒されるかは神様にまかせねばならないが、確かに癒されることによつて神のみわざは現れる。

地上で障害が癒されない場合でも主のみわざは現される。星野富弘さんやシーナ・マリヤさんを見よう。障害を負いつつも、彼らは詩を作り給

を描き、主を賛美することによって、神のみわざを現している。主イエスを救い主と信じるがゆえに、障害を乗り越える力が与えられ、たとい地上において障害が癒されなくても、天において癒される希望をもって明るく生きている。彼らの障害は、まさに神のみわざを現しているのである。

三、遣わされた者として生きる

主イエスは父なる神から遣わされ、地上で世の光として働かれた。しかし主はいつまでもおられるわけではない。主の昇天後は、主を信じる者たちが世の光として、遣わされた方のわざを世の間に現さなければならぬ。主はこの盲人を癒すために、つばでどろをつくり、それを彼の目に塗らせた。主は、この方法をこの箇所以外では一度も用いられていない。このやり方をされたのは、彼にシロアムの池で目を洗わせるためだったであろう。シロアムとは「遣わされた者」という意味である。そこで目を洗って癒されることも、遣わされた方のみわざを現すことであつた。また彼は、自分を癒してくださいだったのでどんな方が知らなかったが、△あのかたが神からきた人▽（33節）であることを大胆に証した。遣わされた者として、神のみわざを現したのである。

結論

因果応報は、聖書の教えではない。病や障害や苦難は、神のみわざが現れるためなのである。あなたには障害はないかもしれない。しかし、必ず苦難はある。その時、苦難は、神のみわざが現れるためであることを思い出そう。

研究資料

(足立)

主題に関して ヨハネ9章は、世の光であるイエス（9・5、参照8・12）への明快な言及を通して、仮庵の祭り結びついている。9章は、その光がくるとき何が起るかをありありと描写している。ある者は、この生まれつきの盲人のように見えるようになる。他方自分たちは見えると言つた者たちは、言わば光によつて目が見えないままに放置される（9・39～41）。と同時に9章は10章のための道を備えている。10章には、自分の羊のためにいのちを与える良い羊飼いと、盗人や強盗以外の何ものでもない、9章に登場するような宗教のリーダーとの間に存在する鋭い対照がある。

この9章の癒しの記事に関しては、ユニークな特徴がある。癒された人が、生まれながらの盲人であつたということ。その男に関する理由づけの議論。そして癒しに用いられた手段。すなわち泥を作り、シロアムの池で洗ったと言つこと。

テキスト

1 時がいつかは記されていない。共観福音書には盲人の目が回復させられる幾つかのケースへの言及がある。しかしそれらは生まれながらの盲人の例を扱っていない。ここでイエスが見られたとあるのは、単に傍観したのではなく、確かな行動を呼び起こすための導入と考えられる。

2 その男の苦境を見て弟子たちは、イエスにその理由を尋ねている。彼らは当時の多くのユダヤ

人が考えたように、罪と苦しみとは密接に結びついているものと決めてかかっている。ある意味で彼らは正しい。すなわち様々な苦しみは、単純に人間の墮落（創世記3章）に伴って生み出されたものである。罪がなかったら死もなかったし、過ちがなければ苦しみもない。パウロも確かに同意している（ローマ1～2章）。しかし個人的な罪とその他の人の苦しみとの結びつきに関しては、聖書的根拠を超えている。確かに、特別な病気や苦みの経験が、特殊な罪の直接の結果である場合がないわけではない（例・ミリアムの反抗―民数記12章）。しかし数多くの聖書テキストはきつぱり否定している（例・ヨブ記、ガラテヤ4・13、IIコリント12・7）。ヨハネ9章の場合、弟子たちは罪と病との間に個人的な堅い結びつきがあると推定している。

3 イエスは罪と苦しみとの間の普遍的結びつきを拒否しなかったが、個人的結びつきの一般化を完全に拒否する。この場合、本人の罪、両親の罪とも無縁である。むしろ神のみわざ（複数）があらわされるためなのである。

4 代名詞わたし（複数）と、わたしを（単数）の結びつきは重要である。イエスだけがしなければならないことを言っていない。わたしだち（イエスを信じ従う弟子）も神が意図されたことをする責任をイエスと共に分かち合うのである。イエスが言うわざとは、人が、神の遣わしたイエスを信じることである（ヨハネ6・29）。そしてしななければならないという言葉（ギリシャ語はテイ）

は、聖なる必然性を思い起こさせる（イエスの従順4・34）。昼の間と夜という言葉によって、私たちは恵みの機会と宣教の緊急性を意識させられる。

5 イエス自身が世の光であるとは、8・12の繰り返してある。しかしここでは、この世にいる間

はという言葉によって、受肉が限定された期間であることを意識しているのかもしれない（参照ヨハネ11・9～10、12・35～36）。

6～7 イエスはその男の癒しへと進む。4～5節で自分が光であると宣言されたイエスは今、生まれつき目が見えない人（光を遮断されてきた彼）に、光を与えると言つポイントで実際に導くとして。イエスは自分のつばで泥を作り、それを彼の目に塗って、シロアムの池に行つて洗いなさいと、御言葉を語られた。この意味づけは定かではない。大切な要素と思われるのは、イエスが彼に触れ、御言葉をお聞かせになった人格的な関わりである。その男はイエスの御言葉を受けとめて行動し、主の奇跡を経験した。このみわざの中心は、イエスが完全に主導権を持っていたと言つことである。

8～9 ここには2つのグループがある。近所の人々と、彼がもとこじきであつたのを知っている人々。そしてこの男の癒しに驚いている。人々の議論に対して、彼はわたしと答えた。彼は10～11 奇跡の方法を尋ねた人々に対して、彼はイエスというかたがと答えた。この時彼はイエスの人格についてほとんど知らなかった。彼は徐々にイエスの重要性を知る（9章）。

● 週題 苦難がある理由

● 聖書 ヨハネ9・1-12

● 暗唱聖句 たた神のみわざが、彼の上に現れるためである。ヨハネ9・3

● 目標 苦難や障害があるのは、それを通して神様のみわざがあらわれるためであることを発見する。

導入

私たちの回りには、生まれつき身体に障害を持つ人や、突然の苦難に遭う人がいます。そこで、障害や苦難は何かのバチがあたったためだと考える人もあります。では、イエス様は障害や苦難についてどのように教えておられるでしょう。

(起) ストーリーを語る

ある日、イエス様が弟子たちと歩いておられると、生まれつき目の見えない人に出会いました。弟子たちは、「彼が生まれつき目が見えないのは本人が彼の両親が罪を犯したためですか」と尋ねました。するとイエス様は、「本人の犯した罪のためでも両親のせいでもなく、ただ神のみわざが現れるためである」と言われたのです。そして地面につばきをして泥を作り、それを彼の目に塗って、シロアムの池に行って洗うようにおっしゃいました。彼は、言われた通りにシロアムの池に行って洗うと、見えるようになったのです。人々は、座ってこじきをしていた人と別人ではないかと疑いましたが、本人が「わたしがそれだ」と言ったので、みんなビックリしてしまいました。

聖書は、自分の罪は自分で負わなければならぬことを、「子は親の罪を負わない」と教えています。ところが私たちはしばしば、障害があったり苦しみがおきると、何かのせいだとか、だれかのせいだと考えます。しかしイエス様は、障害があるのはだれかの罪のせいではなく、神のみわざが現れるためであると教えられたのです。

では神のみわざとはどういうことでしょうか。イエス様は、神様が遣わされた者を信じるのが、神のみわざであると教えられました。私たちには、障害や苦難はいろいろなもののように思えます。けれども人は、痛みがなければ、病気になることがわかりません。また病気がなければ、自分の死を考えません。死がなければ、永遠の死や神の裁きについて考えもしません。障害や苦難は、それを通して、神様が遣わされた方を信じるという神のみわざが現れるためにあるのです。

また、神様は病気を癒される方です。時には奇跡的に、時には自然の治癒力で癒されます。病気が癒されるのも、神のみわざが現れるためです。ところが、癒されない病気や障害もあります。しかし、癒されなくても神のみわざが現れます。たとえば、星野富弘さんは首から下が動かない障害を持っていましたが、口に筆をくわえて素晴らしい絵と詩を書きます。レーナ・マリアさんは手足が極端に短くても、美しい賛美を歌ってイエス様を信じる喜びを証しています。彼らは地上で障害があっても、天で癒されることを知って、神のみわざを現しているのです。

(承) 学ぶべき真理

すべての障害や苦難は、神のみわざが現れるためにあります。それは、イエス様を信じる信仰によって神のみわざが現れるためであり、癒されて神のみわざが現れるためです。また、癒されなくても天にて癒されることを信じ、その障害があるからこそできる働きによって、かえって神のみわざが現れるためなのです。

(転) 生活への適用

皆さんは、自分の身体の小さな欠点がとても気になってしまったり、人と比べてガックリして、そのために惨めな気持ちになってしまったりしたことはありませんか。しかし、不幸の原因が何かの因縁やたたりであるかのように考えるのは誤りです。また、神様に愛されていないように思うのも間違いです。障害や苦難は、神のみわざが現れるためにあるのです。天では必ず癒されることを確信しましょう。そして普通の人が歩めない人生を歩み、神のみわざを現す者となりましょう。

結論

この生まれつき目の見えない人も、癒された後、イエス様が神様から遣わされた方であることを人々に大胆に証しました。障害や苦難は、それを通して神のみわざが現れるためにあるのです。神様は、私たちが神様を信じることによって、障害や苦難があっても力強く生き、世の光として輝く人にして下さいます。

ワーク A

● 導入のヒント

イエス様は、旅をしている間に、いろいろな人に出会いました。その中には、病気で死にそうな女の子や、兵隊さんや、中風の人や、生まれつき目の見えない人などがいました。

● ワークについて

聖書のお話にそったすごろくにしました。さいころは各自で用意して下さい。またいくつかのポイントに、「一回休み」や「歌をうたう」など加えると、おもしろくなるでしょう。

ワーク B

● 質問1 多くの人々を生かしてきた聖句。苦しみや痛みも、イエス様はすばらしい「祝福」に変えて下さることを知りました。

● 質問2 目が癒された人は「神のみわざ」を体をもってほめたかったです。たとえ癒されない場合でも、不思議な慰めや助けが用意されることがあります。それも「神のみわざ」なのです。

● 質問3 自分の体験した「神のみわざ」の確認。

● 賛美歌 「どんなときでも」

(子どもさんびか120番)

● 今日のお祈り 「神様、いろいろな悲しいことやつらいことに出会う時、神様が良いことに変えて下さることを信じてのりこえられますように。」

ワーク C

● 神のみわざとは、盲人の目が開かれる奇跡であり、滅びに向かっていてる罪人がイエス様を信じて救われることです。さらに、全宇宙すべてが神のみわざの結果です。

● 私たちは、神のみわざを、自分の生活の衣食住の満足だけに限ってしまい、ご利益的に捉えてしまいがちです。しかし、霊の目が開かれるなら、神のみわざに取り囲まれていることを知ることができます。

ワーク D

● 質問1 ①目が見えないという現実を自分のこととして考えましょう。不便だけでなく、良い点も考えられるでしょうか。

②因果応報という観念がなくても、不幸の理由は悪いことが原因と考えやすいものです。ここで、それぞれがもっている観念は何かを確かめます。

● 質問2 聖書が教える事実の確認。

● 質問3 人々の反応の中に、人々が神のみわざを認めている事実を確認しましょう。

● 質問4 神の愛はいつも変わりません。苦難の中にいる人が、自分が苦難にあう時でも、その中で神のみわざを発見していけるように。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 身体に障害を持った場合、それは先祖や親の罪のせいでしょうか。

2 私たちが身体の痛みを感じなくなったとしたら、どんなことが起こると思いますか。(例えば、熱があっても感じなかったら?)

3 苦しみを通して、見出すものがあります。それはどんなことでしょうか。(痛みを通して、病を知る。病から死を知る。死から神を見出して永遠のいのちを見出す)

● 自分に当てはめてみよう

1 今まで、身体に障害について、あなたはどのように思っていましたか。

2 自分の痛みだけでなく、他の人の痛みを感じる心を持っていますか。

3 あなたに障害があったら、どのようにして神のみわざを現すでしょう。

● 話し合ってみよう

1 この盲人に対する弟子たちの態度は、冷たいものでした。私たちも、身体に障害を持っている人に同じような態度をとったことがなかったでしょうか。

2 私たちの周囲には、悪いことがあると、因縁やただりのせいだと言っている人がいます。思い当たる経験話し合ってみましょう。

3 あなたは、因縁やただりを恐れているでしょうか。

聖書 創世記1・26、3・5、ローマ3・23
週題 罪とは何か

序論

今まで学んできた「神の国の価値観」に即して自らを省みると、だれでも罪を犯していることに気づくだろう。今週から5週間は、この罪の事実とその解決の方法について考える。

人間は神のかたちに造られたのだが、それは決して神と全く同じだということではない。創造者と被造物という大きな違いがあることは明白である。それを忘れて人神のように▽なろうとすることが罪の根本原因である。そのとき、人生の目的は「的はずれ」のものとなる。聖書の冒頭にこのことが象徴的に記されている。

一、善悪を知る木

神は、エデンの園の中央に命の木と善悪を知る木とをばえさせられた。そして、人善悪を知る木からは取って食ってはならない▽とアダムに命じられた。命の木については禁止命令がされていないだけでなく、人園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい▽とも言われている。なぜ善悪を知る木だけが禁止されたのか。『新聖書注解』は、「彼（人）は神の意志に従うことにより、神のよきな善悪の知識を得る。忍びよる悪を識別し、それに抵抗し、自らの決断を用いて本当の自由を持つに至る。しかし不従順において彼は、善悪を自らの罪責の経験の中で知り、悪に支配され

て死に至る」と解説する（旧約第1巻88頁）。

問題は神の命令に従うかどうかである。与えられた自由意志で、神の命令を守ることを決断することが善であり、従わないことが悪なのだ。ところがアダムとエバは、この木から取って食べた。へびの誘惑は狡猾である。へびは人それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知ることとなることを、神は知っておられるのです▽とそそのかした。人神のように▽なることを求めさせ、自分の考えで善悪を決めさせたのだ。

へブル語の罪という言葉は、的はずれという意味だ。人間が自分の都合や考えで善悪を定めてやってみて、その結果で善悪を知るとするのは、自分を神の立場におき、神に取って代わって神のようになる的はずれである。同時に、これは必ず罪を犯す。罪を犯してみても悪を知るのである。これは自己中心の生き方、的はずれの人生となる。

二、命の木

アダムとエバが罪を犯した結果、彼らはエデンの園から追い出された。そのとき、人彼は手を伸ばし、命の木からも取って食べ、永久に生きるかもしれない▽（3・22）と神が言われたことに注目したい。古代東方宗教では、不死の探求が特徴的であった。しかし聖書が善悪の方をより重視しているのは、「死の問題よりも生きること、不死より倫理性にかかわっている」からだ。『新聖書注解』は説明している。永久に生きることは、まさに人神のように▽なることだ。しかし神の言葉に従わず、神の顔を避けるような人間が永久に生き

るなら、それこそ最大の悲劇である。神の言葉に従わないなら、人は人きつと死ぬ▽（2・17）。しかしへびは人決して死ぬことはない▽と嘘をつく（3・4）。バックストンは、「死ぬることは全く生命が失なうて消ゆることではありません。死ぬることは幸福を離れることです。神の恩を失うことです。すべての恩の源たる神を離れることです」と言う（『創造と墮落』59頁）。神のようになることを求めた人は、反対に神から離れてしまった。神に取って代わって神のようになるのではなく、神を信じて神の子ともとなり、神に導かれて神に似る者となるのが神のご計画であった。

三、皮の着物

エデンを追放されるアダムとエバに、神は皮の着物を着せられた。そのために、一度も血が流されたことのない地上で、初めて動物が殺されたのである。人間が作る人いちじくの葉▽（3・7）よりもずっとすばらしいものを、神ご自身が用意してくださったことに注意しよう。これは後に、罪が赦されるために動物の犠牲がさけられることへの備えだった。人血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない▽（へブル9・22）。キリストの十字架はすでにここに暗示されている。

結論

神の立場に立って、自分の判断で善悪を定めるところに罪の根本原因がある。そういう者は、神の言葉に従おうとはしない。自分がそのような罪人であることに気づき、悔い改めて神の子ともとなり、信仰によって神に似る者となろう。

研究資料

（長田）

罪に関する用語

旧約聖書において、罪を表す用語は多い。ハーターは、もともと、「的（目標）、または道をはずす」という意味。アーンは、「曲げる」が原意。ペシヤは、神に背くこと。新約聖書では、最も代表的なのは、ハマルティアで、動詞のハマルタノーは「的をはずす」を意味する。

罪の定義

「罪は不法である」（ヨハネ3・4）とあるように、最も簡単に言うならば、罪とは、神の律法への違反であると言うことができる。A・H・スロング博士の定義によれば、もう少し詳しく「罪とは、行為、性向、状態における神の道徳的律法への適合の欠如である」と言われる（ワイレー&カルバートソン『キリスト教神学概論』日本ウェスレー出版協会、221頁）。神は、人が生きるべき正しいあり方を定められた。神は、それがある程度までは、人間の理性と良心を通して、また、最も明確には、聖書を通して明らかにしておられるが、その神の法に対して、違反することが罪である。

罪の本質

具体的な個々の罪の背後には、「罪の本質」と呼ばれるべきものが潜んでいる。それが何であるか

については、意見の相違もあるが、それらは、多くの部分において重なり合っている。

アウグスティヌスは、罪の本質を誇りと考えた（ヘンリー・シーセン『組織神学』406頁）。被造物に過ぎない者が、神を誇らず、自らを誇ることは、確かに神への大きな罪である。

また、ルターやカルヴァンは、罪の本質を不信仰と考えた（前掲書）。どんなに真面目に生きていくようであっても、造り主なる神を信じない生き方は、神への最大の罪に他ならない。さらに、アダムとエバが罪を犯したのも、神の愛を疑い、神の御言葉の真実を疑い始めるところから起こった。右の聖書講解では、罪の本質として、「神のようになろうとする」ことを捉えている。それは被造物としての立場を超えて、自らを神の立場に置くことである。サタンの起源もその点にあったと言われているし、アダム、エバに対する誘惑の焦点もそこに置かれていた。そしてそれは、自己への「誇り」、神への「不信仰」とも強く結びついている。

認罪

今週より5回にわたっての単元は、「罪の解決」である。聖書全体において、「救い」とは、何にも増して「罪からの救い」である。従って、この単元では、福音の最も中心的な部分が扱われることになる。一層の祈りをもって、準備にあたりたい。その初回となる今回の目標は、「認罪」ということになろう。すなわち、生徒たちが自分の罪

を認めることである。これなしには、救いの必要も分らないし、救い主の必要を認めることもできない。

どのようにして、私たちは、生徒を認罪に導いたらよいだろうか。まず、明確に罪とは何かを示すことである。また、より深い認罪のためには、罪の本質的な部分を明らかにし、それが自らの内に確固として存在していることに気づかせる必要がある。

しかし、このことは、実は聖霊の働きなしにはなしえない（ヨハネ16・8）。一層の祈りが必要とされる理由がここにある。生徒たちの霊的な状態に心を留めつつ、愛をもって真理を語りたい。

テキスト

創世記1・26 上巻26頁参照。なお、取り上げられているアダム、エバの罪については、上巻33頁も参照のこと。

ローマ3・23 すべての人は罪を犯した 1・18、3・20の罪惡論に関する論証を受けて、その結論を簡潔明瞭に示す言葉。

神の栄光を受けられなくなっており 本来、「神のかたち」を持ち、神の栄光をあらわすべき者として造られたのに、罪を犯した結果、神の栄光から遠ざけられている人間の現実を示す。

礼拝メッセージ例

●過題 罪とは何か
●聖書 創世記1:26,3:5,ローマ3:23
●暗唱聖句 すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなった。
ローマ3:23
●目標 神様の目の前に立つなら、自分は罪人の一人ではないという事実を発見する。

導入

聖書は、一度も罪を犯したことがないと言える人は一人もないと教えています。そして、罪を犯した人には永遠の命がないと教えています。皆さんは、自分が罪人であると知っていましたか。私たち人間は神様に似るように、神のかたちに造られました。でも、神様に似るには、神様に取って代わって神様のようになる場合と、神様の子どもとして神様に戒められ、教えられ、導かれて、神様のようになる場合と、二通りあるのです。神様に取って代わって神様になろうとするのは罪の根本です。これは、神様が人間を創造された目的からはずれた「的はずれ」の生き方です。罪とは、神様の創造の目的からそれて、的をはずして生きることなのです。

(起) ストーリーを語る

最初の人、アダムが住んでいたエデンの園の中央には、命の木と善悪を知る木がありました。神様が食べることを禁じられたのは、ただ一本「善

悪を知る木」だけでした。善悪は神様が決めるもので、人間が勝手に決めてはいけません。損得や好き嫌いなら自分の勝手にすればよいでしょうが、善悪は自然の法則と同じく、神様が決めたもので、自分の都合によって変わるものではありません。人が善悪を決めるなら、その人は神様に取って代わって、神様の立場に立つとする偶像礼拝者なのです。

また、人は自分で善悪を決めてやってみて、その結果が善ければ善で、悪ければ悪だと思うようになりませんでした。その結果、全ての人は、悪いことをしてしまっただけで、これは悪いことだと知るようになってしまったのです。つまり、全ての人は必ず罪を犯す存在になってしまいました。

罪の結果、アダムとエバはエデンの園から追い出され、命の木から食べることもできなくなり、永遠の命の望みが絶たれてしまいました。私たちは死ななければならなかったのです。肉体の死だけではなく、死んだ後にさばきを受け、永遠に死ぬ可能性も出てきました。

エデンの園を追い出されたアダムとエバは、いちじくの葉をつづり合わせたものを身につけましたが、神様は皮の着物を下さいました。これは後に犠牲の血が流されることによって罪の赦しが与えられることを象徴しています。それは、イエス様が十字架にかかって血を流し、私たちの全ての罪の身代わりになられた時に実現しました。

(承) 学ぶべき真理

皆さんは自分が罪人であることを認めていますか。罪を犯さないで、善悪を知る人はアダムとイ

エス様しかいません。生まれたときから信仰をもって生まれた人だけが、罪を犯さないでいることができるのです。私たちもけんかを始めてけんかをしないといけないことを知り、悪口を言ったり言われたりして、初めて悪口を言っていないことを知ったのです。罪を犯してしまっただけで、それが罪であることを発見するのですから、私たちは罪人です。ですから、どんな人も罪を悔い改めなければ、永遠に滅びます。また、神様との交わりも回復しません。

(転) 生活への適用

「ぼくは警察につれていかれたり、先生に呼び出されたりするようなことをしたことがないから罪人ではない。」「わたしは、クラスのだれと比べてもまじめな方だから、罪人ではない。」「そのように思っている人はいませんか。また、自分勝手に善悪を決めてはいませんか。嘘をついたり、ごまかししたり、一度だけだからといっていじめに加わったり、だれも見ていないからといって人のものを勝手に使ったことはありませんか。そういうことをしていたら、きっと心が痛み、罪であることに気づくでしょう。

結論

皆さんも自分が罪人であることが分かったなら神様に悔い改めなければなりません。神様の立場に立って自分で善悪を決め、罪を犯してから罪だと知る生き方は、的はずれです。悔い改め、神の子とされ、神様に教えられて善悪を知り、神様に従って神様に似る子どもとなりましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 アダムとエバは、神様から食べてはならないと言われた善悪を知る木の実を食べてしまいました。なぜ食べたのでしょうか。
- 2 アダムとエバが、善悪を知る木から実を食べたときの気持ちはどんなものだったでしょう。
- 3 アダムとエバは、「善悪を知る木の実を食べると死ぬ」と言われていましたが、この場合の死とはどんな意味ですか。

●自分に当てはめてみよう

- 1 あなたは今まで、してはならないと知っていたがらしてしまったこと、あるいは、しなければならぬと知りながらしなかったことはありますか。
- 2 アダムとエバは、神様の言葉を疑い、してはならないことをしてしまいました。その結果、罪に気づいて、その罪を隠そうとしました。あなたは、罪を隠そうとしたことはありますか。
- 話し合ってみよう
- 1 今までに、「自分は罪を犯した」と気づいたときの経験を話してみよう。
- 2 聖書の言う罪は、世の中で使っている罪と、どのように違っているでしょうか。
- 3 神様は、アダムとエバが罪を犯した後、皮の衣を着せて、はだかを覆われました。このことは、今日の私たちにどのように当てはめることができるでしょう。

ワーク A

●暗唱聖句 (10月28日、11月25日)

罪の支払う報酬は死である。

(ローマ6:23)

●導入のヒント

「きみ、走るのが遅いね」とか、「あんだ、絵がへたね」って、お友だちをいじめたことがありませんか。反対に、友だちにいやなことを言われて、悲しい思いをしたことはありませんか。お友だちのことを、悪い人だとして決めてしまうことは良いことでしょうか、悪いことでしょうか。

●ワークについて

2枚の絵を比べて、神様が喜ばれるのはどちらかを考えてみましょう。

ワーク B

- 質問1 「罪」は「悪いこと」と言うより「神様からはすれた生き方」であり「神様との断絶」であることを知ります。わたしも罪人なのです。
- 質問2 具体的な罪を認識しましょう。これらは神様のお心を痛めていることを知りました。う。質問3 光を当てて頂き、「わたしは罪人」であることを悲しみ、イエス様の十字架を自分のものとして深く認めましょう。
- 賛美歌 「イエスさまはこどものすくいぬし」

●今日のお祈り 「神様、わたしも罪人の一人であ

ワーク C

●「自分自身が罪を犯した者だ」と気づかせることが目標です。

●罪という「犯罪」をイメージしがちです。人に危害を加えれば、その報いが来て、自分も痛い目に会い、悪いことだとよくわかります。

●しかし、心の中の怒り、憎しみ、ねたみや、人を馬鹿にするなども、罪であることを示します。

●さらには、愛さないこと、無視することも罪であることを示します。

●4問目の四角の中に「わたし・ぼく」と自分の意志で書ければ、目標に到達です。

ワーク D

- 質問1 b①目が開けて恥を知った。隠さなければならぬ罪がわかった。②園からの追放。神様の恵みからの断絶による死がわかった。
- c 神様の命令を無視して勝手に判断したこと。
- 質問2 a それぞれの罪の概念を確かめる。
- b 神様の創造の目的を無視して勝手に生きるこの問題を、一人一人がわかるように一緒に考えて下さい。

●質問3 「的はずれ」という視点で、罪について自分を反省できるように一緒に考えて下さい。

聖書 ロマ6・23、Ⅱテサロニケ1・9
週 題 罪の支払う報酬

序論

先週学んだように、神の言葉に従わず、自分が神の立場に立つて勝手に善悪を決め、神に代わって神のようになろうとしたアダムとエバは、その霊が死んでいるに等しい存在になり、神と交われなくなった。また、その後、肉体の命も失うことになってしまった。聖書は冒頭から八罪の支払う報酬は死であることを明確に証言している。永遠の死は、神のさばきの結果である。

しかし、肉体の死後に他のものに生まれかわる（輪廻思想）と考えたり、また死後には何も無い（唯物思想）と主張する人々がいる。それらの考えに惑わされてはならない。死後にさばきがあるからこそ（ヘブル9・27）、現在どのように生きるべきかを真剣に考えなくてはならないのだ。

一、報酬の意味

〈報酬〉と訳されている用語は、もともとは、定められた期間、食料を買うために兵士たちに当然与えられるべきものを意味していた（キッテル『新約聖書神学辞典』）。罪を犯したゆえに、当然のこととして支払われるのが、肉体の死と永遠の死である。自分の得になると考え、行動した結果が死であるとは何という皮肉か。神が罪を犯した人間をさばかれるのは当然だ。神は人間を創造された方であるから、「自分が創造したものを」自

分の責任で裁かれる。そして良いものは手元に残し、悪いものは滅ぼされるのである。

しかし、神はアダムの場合でも、その子孫である全人類でも、罪のゆえにすぐに滅ぼされることはなさらない。かえって、滅びないように最善を尽くされる。神は、創造者であるがゆえに、一人も滅びないで手元に残ること、すなわち永遠の命を得ることを望んでおられる。それがこの節の後半にある八神の賜物である。アダムの時は皮の衣だったし、新約の時代にはキリスト・イエスにおける永遠のいのちなのである。

二、さばきの意味

罪のさばき（審判）には、二つの側面がある。一つは処罰（刑罰）であり、もう一つは償い（弁償）である（『ウエスレアン神学事典』37頁）。例えば窃盗犯をさばく場合、盗んだものを返すことは当然の弁償として命じられるが、それで罪がなくなるわけではない。罪は処罰される必要がある。神が人をさばかれる場合は、もっと徹底している。罪に対しては死が命じられる（弁償）だけでなく、死後に永遠の苦しみ（刑罰）が待っているのだ。肉体の死は滅びではなく、期限の終了である。死後の永遠の苦しみこそが滅びだ。義なる神は、神に従わずに生きる人間をいつまでも放置するわけにはいかない。罪を正しくさばき、肉体の死のみならず、永遠の苦しみを与えられる。

しかし神は、罪を犯した者でも人ひとりも滅びないで、永遠の命を得るため（ヨハネ3・16）に、御子イエスをこの世に遣わしてくださった。

研究資料

(長田)

罪の結果

罪を犯したとき、人はその結果を刈り取らなければならない。人生の喜びと平安を失い、家庭や人間関係に暗い影をもたらすなど、その影響は、はかり知ることができない。今週の聖書箇所は、罪がもたらす破滅的な結果について、簡潔明瞭に「死」をもたらすものと教えている。この「死」という言葉は、少なくとも次の三つの内容を含んでいる。

①肉体の死

アダムが罪を犯したとき、神は罪の裁きの宣告として、「あなたは…ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから」（創世記3・19）と語られた。アダムとエバとが、善悪を知る木の実を食べるならば「死ぬ」と言われた時、そこには肉体の死が含まれていたことは確かである（ローマ6・12）。

②霊的な死

これは、神と人との間の交わりが断絶することの意味する。人は、神との交わりの中に生きるように造られている。従って、命の源なるお方との交わりが絶たれることは、霊的な死を意味する。

アダムとエバとが罪を犯したとき、肉体的な死はすぐには訪れなかった。しかし、神の御顔を避けて身を隠したとき、彼らは、自分たちの内にすでに霊的な死が始まっていることを証ししたと言える。

クリスチャンは、御子イエスに出会うまでは、霊的に死んでいたのである（エペソ2・1）。だが御子によって、霊的な命、神との交わりが回復された。

③第二の死（永遠の滅び）

「第二の死」という表現は、黙示録の20・6、14、21・8等に見られるものである。これは、最後の審判の時に火の池に投げ込まれることを意味している。最終的に神との永遠の断絶を宣告されるものであり、良心の呵責と肉体的な苦しみが伴うものと考えられる（マタイ22・13、25・41、46、マルコ9・48、Ⅱテサロニケ1・9）。現在の世にあつては、罪が人の目に隠されていたり、見過ごしにされたりすることがあるが、審判者なる主は、悔い改めない者の罪を必ず裁きなさる。私たちは、神を畏れることを知らなければならぬ。

テキスト

ローマ6・23 報酬 本来は、労働に対して、その労働内容に見合ったものとして支払われる賃金等を表わす表現であるが、ここでは、「罪に対して、その罪悪の内容に見合ったものとして与えられる報い」という意味で用いられている。

死 上記「罪の結果」参照。

賜物 「賜物」という表現は、死が罪に対する必然的な結果（報酬）であるのに対し、永遠の命が神の一方的な恵みによって与えられるもの（フレンチ）であるということを示している。

キリストは、私たちが当然受けるべき神のさばきを身代わりに受けてくださったのだ。それを信じる者は、どんな罪を犯していても、刑罰と弁償が代わりに支払われて、決して滅びない。

三、神の賜物の意味

だからこそ、イエス・キリストは八神の賜物なのである。それは、無代価で受け取るプレゼントだ。罪を犯した人間はだれも、肉体の死を迎えねばならない。しかし、その後、永遠の死という弁償を支払う必要はない。また永遠の滅びという刑罰を受けなくても良い。私たちが支払うべき弁償と受けるべき刑罰は、主イエスが十字架の上で受けてくださった。この恵みは、何かと引き換えに与えられるものではない。それなら報酬であって、賜物ではなくなる。罪を解決する方法は一つ。それは、そのままの姿で、この賜物を受け入れることだ。主イエスに信頼するなら、肉体の死はもはや恐れる必要がなくなる。たとい罪を犯したときでも、アダムとエバが神を恐れて隠れたようなことをしなくてもよい。ありのまま主イエスに告白すればいいのだ。これこそ神との交わりの回復である。

結論

自分の定めた善悪の基準でどんなに良いことをしても、それで自分を救うことはできない。だから、ただ感謝してイエスを救い主として受け入れよう。救いは報酬ではなく、賜物である。神が、すべてを用意してくださったのだ。あなたがすることは、ただ信じることだけである。

キリスト・イエスにおける 永遠の命の恵みの前提には、御子の贖いのみわざがある。御子から離れて永遠の命はない（ヨハネ3・36）。

永遠の命 「死」ということの中に、三つの意味合いが含まれているように、「永遠の命」ということの中にも、三つの意味が含まれている。

①肉体の命 人間の罪によって、死が全人類を支配するようになったが、キリストは、私たちに復活の命を与えて下さる。すなわち、キリスト再臨の時、信じる者に復活の体、栄光の体が与えられる。その時、死に対する勝利が宣言される（1コリント15・54～57）。

②霊的な命 御子にあつて、罪赦され、神の子とされた者は、神との自由な交わりを楽しむことができる。霊的な命はここに回復する。永遠の命は将来の恵みにとどまらない。この地上にあつて、神と共に生き、キリストと共に生きるとき、すでに永遠の命は始まっている（ヨハネ17・3）。

③神と共に永遠に生きる命 キリストにある者は復活の命を与えられるが、「永遠の命」の中心概念は、神の国において「神と共に」永遠に生きるということにある（黙示録21・3、Ⅰテサロニケ4・17）。

Ⅱテサロニケ1・9 主のみ顔とその力の栄光から返けられて 罪の結果としての永遠の滅びは、主に自身とその栄光から永遠に返けられることを意味する。

永遠の滅び 「罪の結果」の③参照。
刑罰 罪を犯したものに對する報い、罰、制裁。

- 週 題 罪の支払う報酬
- 聖 書 ロマ6・23、IIテサロニケ1・9
- 暗唱聖句 罪の支払う報酬は死である。ローマ6・23
- 目 標 神様の裁きはいかなるものかを発見する。

導入

聖書は、罪とは何かということと共に、罪を犯した人々に裁かれるかもし記しています。神様は、天地万物を造られた方ですから、造ったものに責任をもたれます。ですから、造ったものが悪ければそれを裁かれます。今日は、神様が罪をどのように裁かれるのかを見てゆきましょう。

(起) ストーリーを語る

私たちの肉体は、必ず死にます。「そんなことはあたりまえだ」と言うでしょう。では死んだ後に何があるか知っていますか。それは、神様の裁きを受けるのです。神様は、その人がどのような人生を送ったかを全て知っておられ、その行ないに応じて裁きをなさいます。ここで、一つ間違っていないことがあります。肉体の死は罰ではないということです。裁かれて刑が定まる前に、罰を受けることはありません。肉体の死は地上で生きる期間の終了を意味します。罪を犯す前の人類には、命の期限がありませんでしたが、罪を犯した人類は神様の裁きを受けなければならなくなつたので、命に期限ができたのです。

そして、罪を犯した人に対する裁きについて、聖書は二つの重要なことを教えています。罪を犯した者は、永遠の死という弁償と、永遠の滅びという刑罰をうけなければならぬことです。

今日の御言葉の「報酬」というのは、たとえば皆さんがお手伝いをしてお駄賃をもらったりする行ないに対する報いのことです。罪を犯した人への神様の報い(報酬)は、まず一つは罪の弁償として永遠の命を支払うことです。窓ガラスを割ったならその代金を弁償しなければいけないように、また盗んだら盗んだものを返さないといけないように、罪を犯して肉体の命を無駄にしたなら、永遠の命を支払わないといけないのです。神様とともに天国で生きることが永遠の命であり、神様のおられない、正義も愛もない無秩序な地獄(ゲヘナ)に行くことが永遠の死です。罪の支払う報酬は、犯した罪の弁償として永遠に死ぬことなのです。

もう一つの報いは、罰を受けることです。例えば万引きなら、盗んだものを返すことは当然しなければならぬ弁償ですが、「返したからもういいだろう」ではすみません。罪には罰が与えられます。人のものを盗んだら、刑務所行きという刑罰が待っています。

つまり罪の支払う報酬には、人に害を与えたことに対する弁償と、ルールを破ったことに対する罰とがあるのです。神様の定めたルールを破ったことに対する報酬として、人は永遠の滅びの刑罰を受けなければなりません。それは、ゲヘナの火で焼かれるという刑です。神様は罪を正しく裁いて、永遠のいのちを失うという弁償と、永遠の滅

びという刑罰を与えられるのです。

(承) 学ぶべき真理

しかし神様は、私たちが罪を犯したら、そのとくすに滅ぼされるわけではありません。創造者は造ったものに責任があるので裁かれますが、同時に創造者は造ったものを愛しておられるのです。手元に残したいのです。だから神様は、私たちの中のだれ一人も滅びないで、永遠のいのちを得ることを望んでおられます。そこで、神様は私たちを永遠の滅びから救うために、イエス様をこの世に遣わして下さいました。イエス様は、私たちが支払わなければならない弁償を十字架の死で代わりに支払い、私たちが受けなければならない刑罰を十字架刑で代わりに受けられたのです。

(転) 生活への適用

お兄ちゃんのラジコンを使っている操作を間違えて壊してしまったら、どうしますか。謝って、弁償しないといけませんね。では、学校の宿題を忘れていたらどうしますか。謝って、バツ当番をするとか、倍の宿題をしてもらうかの罰を受けないといけませんね。神様が人の罪を裁くなら、やはり弁償と罰があるのです。

結論

神様の裁きは正しく厳しいものです。弁償と罰を自分で支払ったら、永遠に死んでしまいます。しかし、イエス様の十字架によって、弁償も罰もすでに支払われました。イエス様を信じて、イエス様に代わりに支払ってもらいましょう。

ワーク A

● 導入のヒント

私たちは死んだらどうなるのでしょうか。そんなこと、考えたことがないかな。では、みんなは「私は絶対天国に行ける」と言えますか。

● ワークについて

スタートから、十字架をたどって天国に行きましよう。私たちが天国に行く道は、イエス様の十字架の道以外はありません。

ワーク C

● いつも、福音の中心メッセージは十字架です。

今回も十字架が出てきます。しかし、今回は「罪の結果は死・滅び」であることを、明確に感覚的に捉えさせることが目標です。

● スタートは誕生です。だれも生まれながらに罪人です。生まれつき救われている人はいません。

しかし、人生の途上で、イエス様の十字架に個人的に出会い、信仰を持った人は罪が赦され、救われます。

● 肉体の死を迎えるまでは二者とも同じように歩んでいます。その死の瞬間に永遠に過す場所が二つに分かれ、変更することはできません。

● 分かれ道とは「肉体の死」であることを、質問によって悟らせましょう。

ワーク D

● 質問1 ①良いことや悪いことをしたために受け取るもの。②死。永遠の滅び。③害を与えた弁償と規則を破ったことへの刑罰。身近なことを例にして、具体的なことを一緒に考えて下さい。

● 質問2 ①値なしに与えられるプレゼント。何かしたことに對して受ける報酬とは違う。②と③では、主イエスの十字架での身代わりで解決される、償いと刑罰について考えて下さい。

● 質問3 さばきの日があること。終わりの時であるけれど、今備えなければならぬことがわかるように、一緒に考えて下さい。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 聖書には、神様は私たちの罪をどのように裁かれると書かれていますか。
- 2 ここで「報酬」という言葉が使われていますが、どんな意味があると思いますか。
- 3 自分で自分を、善あるいは悪に定めて、自分を救うことはできるでしょうか。

● 自分に当てはめてみよう

- 1 あなたは、神様の定められたルールを破ったことはありませんか。もしあるなら、具体的にあげてみて下さい。
- 2 もしあなたが、神様の定められたルールを破っているとしたら、あなたは何をしなければならぬでしょうか。
- 3 あなたは、人間の死後に神の裁きがあることを信じていますか。そう信じるようになったのはなぜですか。

● 話し合ってみよう

- 1 かつて、アダムとエバは、自分が神の立場に立つて善悪を判断し、食べてはならないと言われた木の実を食べたことがありました。その結果、人類に何が入って来たでしょうか。
- 2 世の中には、死後に関して、様々な思想があります。聖書は何と言っているでしょうか。
- 3 イエス様の十字架を信じる人は救われます。救われた人は死を恐れる必要がありません。その理由は何でしょうか。

聖書 民数記5・5～8、エペソ1・7
週題 罪の赦しのために

序論

民数記は4章まで、イスラエルの民が荒野を進むための外的な準備を記している。そして5～6章では、内的な備えについて述べる。特に5章の5～8節で、神はどんな罪でもきちんと処理すべきことを命じておられる。罪を犯した者は、次の三つのことをしなければならぬ。

一、罪を告白する

まず、その罪を自分で認めて言い表す必要がある。神は、私たち人間が犯す罪を、それがどんなに小さなものであっても、あるいは他人には知られないものであっても、すべてに存じである。「それならわざわざ言い表さなくてもいいじゃないか」と言うかもしれないが、決してそうではない。例えば子どもがつまみ食いをした場合、それに気づいた母親は、「こめんなさいって謝りなさい」と叱るだろう。子どもが自分の意志で罪を認めて謝らないと、再び同じ間違いを繰り返す。その性格は直らない。神と人との関係も同じだ。私たちが犯すどのような罪も、主が定められた法に反している。それは神のもの（秩序）を破壊しているから、主の罪を得ることに他ならない。それゆえ、神がいくら「存じ」であっても、罪を犯した人は、その罪を告白しなければならぬ。自ら罪に気づき、自ら主に告白して、はじめて人は自ら罪を犯

さない者になるのである。

二、とがを償う

さらに神は、犯した罪に値するものを相手に返すべきことを命じられている。これについては、レビ6・1～7にかなり詳しく述べられているので参照していただきたい。隣人を欺いて預かり物や質草を返さなかったとき、かすめ奪ったとき、落とし物を拾いながら欺いて自分のものにしたとき、それらはすべて返さねばならない。そればかりか、その5分の1をも加える必要がある。

返すべき相手が死んでしまったり、引っ越したりしていない場合は、親族に返すように命じられている。その親族もいないなら、主に償いをしなければならぬ。これらが、弁償である。

よその家の窓ガラスを割った場合、「こめんなさい」と言ったら、あとはしらんぷりしていいだろうか。やはり、ちゃんと窓ガラスを修理すべきである。子どもでお金がなければ、親が弁償すべきなのである。しかし、私たちの犯した罪に対して、すべてを償いきれるだろうか。

三、刑罰を受ける

神はさらにもう一つのことを命じられている。贖罪の雄羊をささげねばならないのだ。これは、罪を犯した者が、必ず刑罰を受けねばならないことを意味する。日本人は、血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない（ヘブル9・22）という聖書の言葉がなかなか理解しがたい。「罪は水に流せばよい」と簡単に考えがちである。しかし罪はそんな生易しいものではない。神は、「小さ

研究資料

(長田)

罪の赦し

「そのとががゆるされ、その罪がおおい消されるものはさいわいである」（詩篇32・1）。罪の結果の何であるかを知るとき、罪の赦しこそ、私たちが神に求めるべき緊急の事であることを知る。そして、神はそれを御子によって全人類に提供していただく。今回の学びを通して、生徒が明確に罪の赦しを頂くことができるよう、祈りつつ備えたい。

①罪の赦しの土台

御子の贖いこそは、私たちの罪の赦しの唯一の根拠であり、十分な土台である（ローマ3・24）。私たちのどんなわざをも、罪の赦しを可能にするものではない。

しかしながら、御子によって提供されている罪の赦しの恵みが、個人のものとなるためには、人の側で果たさなければならぬ条件もある。

②罪の赦しを得るために

一、罪の告白（エペソ1・9）

まず、神の前に自らの罪を認め、言い表すことが必要である。「神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば」（エペソ1・7）とあるように、聖なる神の光の前に自分自身をさらけだし、大小どんな罪をもこまかさに、神の前に言い表すことである。

二、信仰（ローマ3・25～28）

しかし、私たちのわざが罪の赦しをもたらすのではないとすると、罪の告白も、それ自体で罪の赦しをもたらすのではない。あくまでも、御子の贖いのみわざに基づき、御子への信仰によって、罪赦され、義とされ、救われる。信仰とは、すでに神によって完成されたみわざを、単純に感謝をもって受け入れることである。

三、対人的な行動（ルカ3・8、19・8）
神との関係においては、罪の悔い改め（告白）と信仰によって、罪の赦しを受ける。しかし、対人的な面では、当然処理すべき事柄が生じる場合がある。それは、罪の悔い改めが真実なものであることを、具体的な行動によって証明することでもある。

盗んだものは返さなければならぬ。迷惑をかけたならば、謝罪をし、おわびの気持ちをはかる。返して表わす必要もある。どのような反応が返ってくるかは主にお委ねすべきことであるが、もし人からの赦しも得るならば、その経験は、神による罪の赦しを更に鮮明にし、その喜びを大きくするであろう。

テキスト

民数記5・5～8 モーセを通して、イスラエルの人々に対して、生活上の具体的な命令が語られる中、ここでは、特に、人の持ち物に関する罪についての処置方法が教えられている。レビ6・1～7の補足としての規定なので、そちらを参照のこと。

な罪なら見逃してやる」というような、中途半端なお方ではない。罪は必ず裁かれる。罪の支払う報酬は死であり、永遠の滅びの刑罰が待っている。罪人は必ず刑罰を受けねばならない。本当は罪を犯した人自身が受けねばならないのだが、羊がその人の身代わりにされるのである。羊は遊牧の民にとって、自分の命を支えるものだった。自分の命の身代わりは、自分の命を支えるものでなければならぬ。これは主イエスを表している。

結論

エペソ1・7を見よう。義なる神から見れば、私たち人間はすべて罪人である。しかしそんな者でも八罪過のゆるしを受け、救われることができる。それは、八御子による、あがなひを受けたからである。御子イエスは、ご自分のいのちを捨ててくださった。八罪の支払う報酬は死であるゆえに、本当は私たちが死ななければならなかったのに、主イエスが身代わりになんでくださった。ちょうど親が子のために弁償するように。

さらに主イエスは、刑罰を受けてくださった。人類が考え出した最も残酷な刑罰である十字架刑を受け、使徒信条にあるように「死に替わられ、陰府にくだり」と、罪人が行くべき陰府にまでくだられ、刑罰を受けてくださったのだ。

私たちがすべきことは、八御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめる（エペソ1・7）ことを信じて、罪を悔い改め、それを正直に神に告白し、イエス様の十字架はわたしのためですと、受け入れることである。

モーセ律法は、現代においては、そのまま適用する必要のない部分（祭儀的な面その他）も多いが、その点を考慮しつつ学ぶならば、現代においても多くのことを教えられる。

7 犯した罪を告白し 人の持ち物に関する罪を犯したときも、その処置法の第一は、罪をありのままに告白することであった。

その物の価にその五分の一を加えて 第二は、損害に対する弁償であった。

8 贖罪の雄羊 第三は、贖罪の雄羊をささげることであった。現代に当てはめるならば、御子の尊い贖いを信仰をもって受け入れることである。

もし、そのとがの償いを受け取るべき親族も、その人になくは 弁償に関して、被害を受けた本人も死に、その親族もいないという特殊ケース。この点で、レビ記の規定を補足するものとなっている。この場合は、祭司に対して弁償すると規定している。

エペソ1・7 御子にあって 「キリストにある」は、パウロの常套句。御子から離れて罪の赦しはありえない。

神の豊かな恵みのゆえに 罪の赦しは、神のあふれるばかりの恵みの豊かさから出るものである。血によるあがなひ 罪の贖いは、十字架上で流された御子の血に基づく。

すなわち、罪過のゆるしを受けた 血による贖いを受け、その結果として罪過のゆるしを受ける。

礼拝メッセージ例

●週題 罪が赦されるために

●聖書 民数記5:5-8、エペソ1:7

●暗唱聖句 その犯した罪を告白し、そのことがことごとく償わなければならない。

民数記5:7

●目標 罪が赦されるために、告白し、弁償し、刑罰を受ける必要があることを発見する。

導入

先週は、神様が罪を犯した人を裁かれることを学びましたが、今週は、神様が罪を裁く方であると同時に、罪を赦される方であることを学びます。

(起) ストーリーを語る

民数記には、イスラエルの人々が約束の地で守るべき約束が書いてあります。その中で神様は、罪をきちんと処理しなければならないことを命令されました。そして、罪を犯した人は次の4つのことをしなければなりませんでした。

まず第一に、犯した罪を告白することです。悪いことをして見つかっても、ふてくされて謝らない人がいます。どろぼうがつかまって反省しても「今度はみつからないようにうまくやろう」という反省なら、何の価値もありません。したことが悪かったと反省し、もう二度と同じ間違いを犯さないという決心をして、「ごめんなさい」と言うべきなのです。自分の口で謝らないのは、本当に悪かったと反省していないからで、また同じ間違い

を繰り返します。本心から、「ごめんなさい」と告白しましょう。

第二に、弁償することです。神様は犯した罪に相当するものを相手に渡すように命じておられます。友人から借りて返さなかった物、盗んだ物、拾ったものも返さなかった物などは、本当は返さねばなりません。聖書には、さらにその5分の1をも加えて返し、返すべき相手が引越していたら、親戚に返し、その親戚もいないなら、神様に償いをしなければならないと書かれています。これが弁償することです。皆さんでも、よその家の窓ガラスを割ったとき、「ごめんなさい」と言ったら、あとは知らんぷりしていてもいいでしょうか。やはり、ちゃんと窓ガラスを弁償しないといけません。お金がなければ、両親が弁償しないといけません。

第三は、刑罰を受けることです。イスラエルには投獄、ムチ打ち、目には目、歯には歯のように同じ害を与える刑、石打ちによる死刑などがありました。罪を犯すと、弁償だけではなく、ルールを破ったことに対する刑罰があるのです。

第四は、神様に告白した上で弁償と罰を受けることです。「血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」と聖書は記しています。罪を犯した人は、しみも傷もない一番良い羊を殺し、祭壇でその血を流さねばなりません。罪を犯した人の払うべきと弁償と受けなければならない刑罰を、羊が身代わりとなって殺されるのです。人の犯すどんな罪も、神様の定めだルールに反するゆえに罰があり、神様から預かった命を無駄にしているゆ

えに永遠のいのちで弁償しないといけません。どんな罪も、人間だけではなく神様に対しての悪ですから、必ず告白し、弁償し、罰を受けなければならないのです。

(承) 学ぶべき真理

羊を、現在のペットの感覚で理解してはいけません。遊牧の民にとっての羊は、それがなければ生きてゆけない命の基礎でした。自分の命を支える一番良い、しみも傷もない羊をささげるのは、イスラエル人にとって最も厳しいことです。でも、罪が赦されるためには、命を支えるものが身代わりとなるべきでした。これは、イエス様を表しています。私たちを造り、命を支えて保つ方が身代わりになってはじめて、罪は赦されます。

(転) 生活への適用

皆さんが罪を犯したら、謝ること、弁償すること、罰をうけることが必要です。それは神様に対しても同じで、神様に謝る悔い改めと、羊のささげめが必要なのです。しかし、現在は羊をささげてはいけません。なぜなら、神の小羊であるイエス様が、十字架で死なれて払うべき弁償を払い、十字架の刑を受けて、受けるべき刑罰を受けてくださったからです。今は、イエス様を信じることで羊をささげることなのです。

結論

皆さんも、罪を悔い改め、イエス様の十字架は自分のためだと信じるなら、刑罰と弁償が払われて、罪を赦していただけるのです。

ワーク A

●導入のヒント

お母さんとの約束を守らなかった時や、友だちのおもちゃを壊した時など、悪いことをしてしまった時に、みんなは「ごめんなさい」ときちんと言えるでしょうか。

●ワークについて

4コマ漫画を読んで、最後のシーンに適したせりふを選びましょう。横に書いてあるものを先生が読んで下さい。正しいと思うものを選びましょう。

ワーク B

●質問1 罪の赦しのためにまずすべきことは、「告白」です。心から「ごめんなさい」と告白するところから赦しが始まることを学びましょう。

●質問2 罪の赦しには「弁償と罰」が必要。イスラエルの民の間では、人間の命に代わって羊の命が犠牲として捧げられていたことを知ります。

●質問3 「羊」ではなく、御子イエス様の十字架があることを心の底から感謝しましょう。

●賛美歌

「両手いっぱい愛」

(ブレイズワールド13番)

●今日のお祈り 「神様、わたしの罪の告白を聞いて下さることを、また、イエス様が代わって罰を受けて下さったことを感謝します。」

ワーク C

●「罪」を身近にとらえるため、物を壊してしま

った場合を例として、考えましょう。

●「つぐなう」と「罰を受ける」という概念は子どもには難しいかもしれません。子どもが物を壊したら、親があまり、弁償しなければならないことを例として示すと良いでしょう。

●そして、イエス様は十字架で、私たちの身代わりにより、「つぐなう」と「罰を受けること」をしてくださったと導きます。

ワーク D

●質問1 ①自分の罪と向き合うことの恐れから罪の重大さを考えて下さい。②ハッキリと認めることなしに、罪の処理はできません。

●質問2 罪の責任としてつぐないが必要であることを考えましょう。罪を犯した相手は、人間だけでなく、神様に対することでもあります。払いきれない死の代価を主が払って下さったことを、自分の罪の問題として考えましょう。

●質問3 償いで罪は消されません。罪には、必ず刑罰があります。主の十字架は、すべての罪の刑罰の身代わりであることを、自分の罪の問題として考えましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- なぜ神様は、私たちに罪を告白するように求めておられるのでしょうか。
- 私たちは、これまで犯してきたすべての罪の弁償をすることができのでしょうか。
- 私たちの罪を赦すための神様の計画は、どんなものだったでしょう。

●自分にあてはめてみよう

- あなたはこれまで、罪を犯しながらも、あやまらなかつたり、償いをしなかつたりしたことはありませんか。
 - もし、あなたが、犯した罪を告白しないままでしたら、あなたはどのような思いですか。
 - 神様は、罪を告白した人をどうなさると思いますか。反対に、告白しない人をどうなさると思いますか。
- 話し合ってみよう
- 罪を犯しても、それを告白しないのは、どういう理由によるのでしょうか。
 - 悪いことをしても、ふてくされてあやまらな人を見たら、あなたはどのような思いですか。
 - 罪がばれて叱られながら、「今度は見つからないように悪いことをしよう」と考えている人がいるとするなら、あなたはその人に対して、どのように感じるのでしょうか。

ワーク解説

聖書 マタイ18・15・20
週 題 罪を犯す兄弟に

序論

主イエスはマタイ18章で、神を信じる者たちは人との関係をどのように持つべきかを教えておられる。まず前半部で、幼子のように謙遜になり、一人の価値を尊ぶようにと勧告されている。その後、今週の箇所では、罪を犯す兄弟に対して取るべき態度を具体的に教えておられる。それには四つの段階が見られる。

一、個人的に忠告する

第一の段階は、人彼とふたりだけの所で忠告することである。友人がどのような罪を犯したとしても、事をうやむやにしないで、彼と十分に話し合うべきである。直前の箇所が主が話されたように、迷い出た一匹の羊でも決して無視してはならない。罪を犯して迷いだした人を捜し出し、悔い改めて再出発するように、忠告すべきなのだ。

その友人のことを大切に思うなら、その人に恥をかかせないように、事が公になる前に二人だけになって忠告すべきである。それが罪だと気づいていないのか、あるいは何か事情があるのかを聞き、この時点で悔い改めたら公にしないがよい。彼がその忠告を聞いてくれるなら、二人の間はより親しい本当の友となるだろう。一緒に悪いことをするのは本当の友ではない。本当の友なら、勇気をもって忠告するべきなのである。

二、友人と一緒に忠告する

個人的な忠告を聞いてくれない場合は、第二の段階として、人彼かにひとりかふたりを、一緒に連れて行きなさいと勧められている。それは、最初の忠告が決して独善的なものでないことを証明するためだ。申命記19・15には、人ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられると記されている。もしその忠告が悪意から出たものであったり、独善的なものであるなら、この段階ではつきりわかるだろう。

これは今でも大切なことである。時には自分の忠告がまちがっていたり、状況が把握できていない場合もある。しかし、三人が同じ意見をもっているなら、その危険性はより少なくなる。

三、教会に申し出る

第二の段階の忠告にも耳を傾けない場合は、教会に申し出るように勧められている。つまり、犯した罪を公にして、悔い改めるように命じるのである。もし教会が罪を見逃し、罪が侵入してくることを許すなら、キリストの血潮で贖われた神の教会ではなくってしまふ。教会とクリスチャンは、世の光として善悪を明確に照らし出す役目を神から賜っている。教会が罪を見逃すなら、この世の善悪を照らし出す光が消え、不道徳という闇が世を支配するようになるのだ。教会は、罪を断固として処分し、この世に対して善悪を明確に表すべきである。

このことを現代に適用するなら、教会の牧師に申し出ることだろう。子どもたちの場合なら、学

校の先生や親に伝えることだろう。問題がおこったら、まず自分たちで考えて取り組むべきだ。しかし忠告が聞かれないなら、友に罪を犯させ続けるのではなく、公に注意すべきである。

四、交わりをもたない

第三の段階である教会の忠告も聞かないなら、人その人を異邦人または取税人同様に扱おうべきだと命じられている。教会は、罪に対して罰があることを明確に示さなければならぬ。つまり、善悪を判断できない人として扱い、主を信じる者だと認めないという罰を与えるのだ。

しかし、主イエスは、異邦人や取税人の中に入って導かれたことを思い出してほしい。「仲間はずれにせよ」と、主はおっしゃっていない。彼らの仲間になって罪を犯してはならないが、彼らに一人から伝道し直すべきだと仰せられるのである。そこで、彼らが悔い改めて立ち返ることを祈り待ち望むことが必要とされている。だからこそ人地上で心を合わせ、祈ることが大切なのだ。

結論

私たちの周囲にも、気づかずに罪を犯している人がいるだろう。もしクリスチャンでそんな人がいるなら、まず個人的に、次に証人と共に、忠告しよう。それでも聞かなかったら教会に言うべきである。罪は決してごまかされてはならない。クリスチャンでない友人の場合も、基本的には同じだ。彼らは自分の罪を認めようとしなくてもいいが、悔い改めて、神に立ち返る日が来ることを信じて、あきらめずに伝え続けよう。

研究資料

(長田)

罪を犯す者への対応

今回のテキストは、教会戒規の教えの根拠を与える箇所の一つであって、本来は、主にある兄弟(信仰を持っている者)が罪を犯しているのを知った時の問題を扱っている。生徒への適用を考えると、同世代の友人とも言えるクリスチャンがいる場合には、そのまま適用できるが、そうでない場合は、罪を犯す友人(未信者)のために、どのように対応したらよいかを教えることになる。

未信者の場合、聖書の基準に立って忠告するだけでは、聞く耳を持たない場合も多く、良い形で忠告できる時与えられるまで、とりなし祈るべき時もある。同時に、福音を語り続けていくことが必要になる。また、事の次第を大人に伝える場合には、大人の側で思慮深い扱いが必要になることもある。生徒の状況に即して指導したい。

信者の場合は、罪を悔い改め、罪から離れるよう忠告することを、より積極的に行なっていくことができる。教会の中でのきよさを保ち、御名が汚されないためという消極的理由と共に、その兄弟を真理に回復させ、主のもとに獲得するためという積極的理由のゆえに、愛にあって真理を語る必要がある(エペソ4・15)。

テキスト

15 彼とふたりだけの所で 忠告は、興味本位の

罪の暴露や、一方的な非難であってはならない。本人の側での事情を聞いたり、事の真偽を確かめたりするためにも、また、事を不必要に公にしないためにも、まずは、本人と二人だけのところで忠告するよう教えられている。

もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。忠告の目指すところは、あくまでも、その兄弟が罪を離れて、真理の道に回復することである。

16 ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい 一対一での忠告が聞き入れられない時は、次の段階に進む。信頼できる成熟したクリスチャン一、二人と共に忠告することである。これは、一人だけの判断では思い込みや誤りに陥りやすいためでもあるし、また、本人にもこの忠告が個人的な思い込みによるものでないことに気づかせて、悔い改めに導くためである。

ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられる 申命記19・15参照。17 もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい 第三の段階は、教会に申し出ることである。罪をうやむやにしないことは、教会の中にきよさが保たれ、主の御名が汚されないために必要なことである。

もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい 同じ主の弟子として受け入れることを中断し、主から離れた未信者同様に扱うことを意味する。罪の悔い改めなしに、主の弟子であり続けることはできない。

教会は、時としてそのことを明確にすべき時がある。

18 あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つなぐが、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう 主はここで、教会に与えられた権威の大きさを教えておられる。それだけに、教会戒規の執行に当たっては、愛をもって慎重に行なう必要がある。

19 もしあなたがたのうちのふたりが 16、20節の「ふたりまたは三人」と並び、主にある者が集う時、それがどんなに少数であっても、大きな権威と力が与えられていることが強調されている。どんな願い事についても 文字通り、すべての願い事についての主の約束である。しかし、文脈からは、特に、罪から離れようとしぬ兄弟について、回復を願う祈りが暗示されていると見ることもできる。これは、忠告のすべての段階で必要なものであり、最後の段階まで行っても忠告が聞かれず、やむを得ず交わりを失う場合にも、継続される祈りである(ヤコブ5・19、20)。

地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう 地上での一致した祈りが、天上での御父の御手を動かす。

20 ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである 主イエスの名による集いには、どんなに少数であっても、主の臨在が約束されている。

礼拝メッセージ例

- 週題 罪を犯す兄弟に
- 聖書 マタイ18・15と20
- 暗唱聖句 あなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。 マタイ18・15
- 目標 罪を犯している人に、どのように対処したらよいかを発見する。

導入

皆さんには友だちがたくさんいますか。友だちは大切ですが、お互いに注意し合うことができるでしょうか。たとえば、友だちがだれかをいじめたり、人の悪口を言っていたり、嘘をついていたりしたとき、あなたはどのようにして言うか。すぐに注意できるときもあるでしょうし、言いにくい時もあるかもしれません。今度は、罪を犯す兄弟に対して取るべき態度を学びます。

一、個人的注意

友だちが悪いことをしていると気づいたら、まず彼と二人だけの所で注意するべきです。一緒にあって悪いことをしたり、見逃したりしてはいけません。友だちのことを大切に思うなら、放っておいてはいけません。その人は永遠のいのちを失おうとしているからです。

その人に恥をかかせることが目的ではなく、罪から離れてくれることが目的ですから、他の人に知られないように、二人だけになって注意しましょう。それが罪だと気づいていないのか、何か事

情があるのか、よく聞いて、話し合いましょう。そこで悔い改めたら、後はそっと黙っておきましよう。そうすれば、二人はそれまで以上の本当の友だちになります。

二、証人を連れての注意

それでダメなら、次に他の友だちと一緒に注意するのです。だれか他に一人か二人を証人として一緒に連れて行って話します。それは、最初の注意が独りよがりでないようにするためです。もし自分のしている注意が間違っているなら、この時にわかります。自分が誤解していたり、かたよって見えている可能性もあります。すぐに善し悪しの判断をせず、慎重に考える態度が必要です。

三、公の注意

二、三人の注意も聞かないときは、教会に言うように勧められています。その人が罪を犯していることを発表して、悔い改めるように勧めるのです。教会は正義の神様のことで、罪をそのままほっておけません。イエス様を信じる人は、世の光として善悪をはっきり照らしだす役目と、地の塩として悪を防ぐ務めを神様からいただいているので、罪を取り除くのは教会の責任です。

教会に言うということは、皆さんにとっては、学校の先生や両親に伝えることです。大人にも知らせて、悪い行ないを止められるように、知恵と助けを受ける必要があります。

四、罰はある

公の忠告も聞かないなら、「その人を異邦人ま

たは取税人同様に扱いなさい」と命じられています。これは、罪に対して罰があることを示すことであり、その人の仲間になるなど教えることなのです。しかし、罪を悔い改めない人を仲間はずれにせよということではありません。善悪をわきまえることができない赤ちゃんとして、始めから教えてあげるべきだということです。イエス様も異邦人や取税人を忌み嫌わず、その中に入っていくから、一から教えられました。大人は子どもと仲間になって、幼稚な遊びをしたりしません。それと同じく、罪を悔い改めない罰として、彼らと仲間付き合ひをしてはいけません。しかし、その人が悔い改めて立ち返るように、みんなで心を合わせて祈ることが求められます。

結論

他人の陰口ばかり言う人の話を一緒に聞いて聞いているなら、本当の友だちとは言えません。お互いにまず注意し合うべきです。問題は小さなことから解決しましょう。本当の善悪を知るためにも、神様のことを伝えて、イエス様を信じる同じ道を一緒に進むことはすばらしいことです。

あなたの周囲には、気づかずに罪を犯している人がいないでしょうか。もしいたら、はじめは一對一で、次に友だちと一緒に注意しましょう。それでダメなら、ことを公にして親や教師に相談しましょう。それでもダメなら、友だちとしては付き合わないけど、その人が自分の罪を認め、悔い改めるように、あきらめず真理を伝え続け、祈り続けましょう。

ワーク A

導入のヒント

幼稚園で遊んでいた時、大好きなお友だちがいじめられていました。みんなは、この友だちのために何ができるでしょうか。助けてあげますか。神様が喜んで下さるためには、どうしたら良いのでしょうか。

ワークについて

友だちの靴を隠している絵を見て、自分ならどうするか考えましょう。そしてその答えを下の4つの例から選んで下さい。今日のメッセージを思い出しなが、導いてあげて下さい。

ワーク B

● 質問1 イエス様が教えて下さった「罪を犯す兄弟」に対しての教えの順序を知ります。イエス様の「一人一人に対する細やかな愛と思いやり」に感動しますね。

● 質問2 学校や家庭での出来事を話し合いながら、暗唱聖句の意味を考えましょう。

● 質問3 最終的にイエス様は祈りの尊さを教えておられます。祈りは人を愛え、生かします。

● 賛美歌 「まいこのひつじ」

(ふくいん子どもさんびから番)

● 今日のお祈り 「神様、まちがいをおかしているお友だちに忠告できる勇気を下さい。一緒に光の子どもになれるようにして下さい。」

ワーク C

● ちゅうごく料理は、「ちゅうごく(忠告)」をもじってのだじゃれです。解説しなければならぬようなしゅれは落第なのですが、わかついていただけでしょうか。ご協力を感謝します。

● この1問目は〇つけて終わりとし、すぐ次に進まないで下さい。結構現実味ある選択肢です。「知らんぶり」は一番多いと思います。また、「いっしょに悪いことする」も常に受ける誘惑でしょう。2問目以下を、優等生的正解でやり過すことは簡単です。ですから、この1問目で、子どもたちの本心を会話の中でとらえたいのです。

● そのためにも教師はかつつけないで、自分の失敗、恥、罪をさらけ出して下さい。

ワーク D

● 質問1 罪の滅びから救われることの方が、友人のためにすることです。神の赦しを得させるためであって、決して恥をかかせるためではありません。罪をいい加減にはいけないことを考えましょう。

● 質問2 自分が間違っていないか、偏見や誤解ではないかが確かめられ、冷静で適切な忠告ができるために必要です。

● 質問3 ただ教会に連れて行くのでも、さらに者にするのもありません。単なる人の忠告ではなく、神の真実の前に立つことが大切なのです。

● 質問4 注意するためには、注意される身になって、その人に配慮することを考えましょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 罪を犯している友人を見かけた場合、どうしたらよいでしょうか。
- 2 自分が罪を犯しながら、そのままで滅んでしまふことに気づいていないとしたら、自分の友人に何をしてもらいたいと思いますか。
- 3 罪を犯している人を見て、注意する勇気がない場合、どうしたらよいと思いますか。

● 自分に当てはめてみよう

- 1 あなたには、罪を犯している人のところへ一緒に忠告に行けるような友人がいますか。
 - 2 あなたは、相手に恥をかかせないように配慮することが出来ますか。できないとしたら、どうすればよいと思いますか。
 - 3 あなたは、今までに陰口を言ったことはありますか。あるいは陰口を聞いたことはありますか。それは建設的なことでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 友だちのことを心底愛しているなら、その友だちが罪を犯しているのをただ見ているのと、注意するのと、どちらが良いでしょうか。
 - 2 自分がだれかに忠告をする場合、その忠告は必ず正しいと言えるでしょうか。もし自分で判断することが難しい場合、どうしたらよいと思いますか。
 - 3 あなたなら、どのように忠告されると、改めようと思うでしょうか。

ワーク解説

聖書
ピリピ4・4-7
週 題 事ごとに祈る

序論

毎年一回、祈りについて学ぶ。人格が目覚めて神の前に立つには、祈りが不可欠だからだ。人は信仰をもって祈ったかというところ、そうではなく、主イエスを信じる前から祈り、祈りによって神と出会う。今日の箇所では、なぜ私たちは祈るべきなのかを学ぼう。

一、いつも祈る

いつも喜んで、寛容で、思い煩わず、感謝している人になれたら幸いである。しかし神は、信仰を持っている人でも、いつもこのような状態にあるわけでないことを存じだ。そこで、神が与えてくださった方法は、あらゆる場合に祈ることだ。△事ごとに△ささげる祈りとは、何かあるたびに祈ることである。朝起きて祈り、食前に祈り、学校や会社に行く前に祈り、授業や就業の前に祈り、帰る前に祈り、寝る前に祈り、事があるごとに祈りなさいと聖書は勧めている。神は何でも、いつでも、「お父ちゃん」と祈ることを求めておられる(ローマ8・15)。何のはばかりもな、思い煩いもなく、小さな子どもが「ねえねえ、おとうさん」と話しかけるように何でも申し上げたいのだ。たとえそれが間違っていることであっても、祈って差し支えない。神はそのことも示し、正してくださる。いい格好をして立派な祈り

をしようにする必要はない。

二、神の平安

事ごとに祈るのは、神が私たちの願いを「存じない」からではない。聖書には、祈る前から「存じ」であるとして記されている(マタイ6・8)。では何ゆえ祈るのかというと、神に知られていることを自分が自覚するためである。神は、私たちの思いや願いをすべて知っておられる。そして、神の私たちに対する計画も、当然、神は「存じ」である。それは、わざわざではなく、平安を与え、将来と希望を与えるものだ(エシマイ29・11)。神の計画は、また当然、人の考えにまさっている。だから、神の計画にそって歩むなら、これ以上のものはないのである。事ごとに祈って、神の計画を知ってゆこう。そこに△神の平安△がある。

しかし注意すべき点がある。それは、自分が神と人のために計画したことだから、神は祝福してくださるはずだという考えである。自分が計画したから、神は祝福すべきだというなら、それは、自分が主で、神が僕になっている。本当は神が主なのだ。まず、神の計画をうかがって、それを具体的に実現してゆくと、最善がなされる。

三、心と思いが守られるために祈る

△心と思いが△はどう違うか。単純に感情と意思と考えてよい。感情はコントロールできない脳の働きで、意思はコントロールできる脳の働きだ。しかしこの心と思いは、両方不安になることがある。思い煩ったり、恨んだりねえたり、適当や許容ができなかったり、嫌悪を抱くこともある。

結論

神を信じている人でも、そのようなことが起きるのだ。そんな時どうしたらよいのか。そんなときにも、事ごとに祈るのである。事ごとに祈ると、嫌なことにも神の計画があり、神が最善をしておられ、見捨てずに共におられ、脱出の道がすでに用意されており、後に永遠の重い栄光が待っていることを発見する。また、患難は忍耐を生み、忍耐は練られた品性(錬達)を生み、練られた品性は希望を生み出す(ローマ5・4)。このことをまず思いに入れよう。思いはコントロールできるのだ。このことを思いに入れるなら感情はついてくる。こうして祈りによって、人の考えに勝った神の導きを知り、心と思いが守られる。

事ごとに祈るなら、肉欲や世や悪魔の誘惑から心と思いが守られる。人知では測り知れない神の平安とは、人が知らず知らずに巻き込まれる誘惑から、神が守ってくださることも意味する。人知を超えたことが祈りによってなされるのだ。

研究資料

(長田)

祈りの力

信仰者にとって、祈ることは命である。御子の贖いにより罪赦され、神の子とされた私たちは、神に向かって「アバ父よ」と呼ぶように招かれている(ローマ8・15)。祈りの中に、神の愛、力、主権を知り、御心を知られつつ歩むのが、私たちの信仰生活である。

祈りは、大きな結果をもたらす。信仰による祈りは山をも動かす(マタイ21・21)、願い求めるところの答えを見る(マタイ7・7、8)。同時に、自らを探られ、砕かれるべき所が砕かれ、御心に委ねる信仰へと成長させられることも、祈りの大きな答えである(ヤコブ3・2、3)。

どんな問題があっても、とにかくそれを祈りの中で神の前に持っていくならば、そこに感謝と賛美、平安と喜び、勝利と力が与えられる。

悲しみに暮れていたハンナが祈ったとき、憂いは取り去られた(サムエル上1・18)。死の宣告を受けたヒゼキヤが涙を流して祈ったとき、彼の命は長くされた(列王下20・5)。故郷エルサレムの現状を聞いて悲嘆しつつ祈ったネヘミヤは、故郷に帰る道が開かれ、城壁再建の難業を成し遂げることができた(ネヘミヤ1、2章)。また、十字架前夜、苦しみの中で祈られた主イエスは、十字架に向かって歩み出す力を御父より与えられた(マタイ26・39)。

テキスト

4 主にあっていつも喜びなさい ピリピのクリスチャンたちは、福音宣教の戦いの中で、多くの苦しみ直面していた(1・29、30)。しかし、パウロは、「いつも喜びなさい」と命じている。喜びは、苦難の中で勝利をもって進むための最大の秘訣である。それは、主にあって、すなわち、主を信じる信仰によって初めて可能となる。

繰り返して言うが、喜びなさい 喜びとは、何度でも繰り返されて教えられるべきことである。この手紙全体においても、同じ命令が繰り返されている。(2・18、3・1)

寛容を、みんなの人に示しなさい 寛容であることが困難な相手に対しても。

主は近い すべてのことを「存じ」の主が、私たちの近くにいて下さる。同時に、すべてのわざに報いなる「主の日」が近いことを覚えて、なお一層寛容であることに励むべきである。

6 何事も思い煩ってはならない 思い煩いとは心配事によって心がいくつにも分かれ、思い乱れること。思い煩いによって、私たちの信仰の歩みは力をそがれてしまう。従って、「ただ」と、私たちが集中すべきわざが何であるかを教えらる必要がある。

事ごとに、△祈り△と△願い△をささげ 思い煩いが心を支配しないために、祈ることが命じられて

いる。祈りとは、自分で心配することをやめて、問題を神の前に持っていくことである(詩篇37・5、1ペテロ5・7)。

感謝をもって 心配事を祈るとき、不信仰によって捕らえられないための最大の秘訣は、感謝である。感謝は、信仰の最大の表現であるから。

あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい 願い求めを、遠慮なく申し上げてよい。私たちの神は、私たちの父様でいらっしやるのだから(マタイ7・7、11)。

7 人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安 思い煩いの結果は無であり破壊である。

しかし、祈りの結果は魂の平安である。それは、世が与えるものとは異なり(ヨハネ14・27)、神が与えて下さる平安なので、人知ではとうてい測り知ることができない深みを持っている。

あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあって守る 思い煩いは心を弱くさせ、破壊するが、天来の神の平安は、私たちの心を守ってくれる。それは、キリスト・イエスの贖いのみわざに基づき、復活の主の臨在によってもたらされるものである。ピリピは、ローマ帝国の守備隊駐屯都市であったので、常に町を見張り、守っている兵隊たちの姿が日常的に見られたであろう。彼らがピリピの町を24時間見張り、守り続けていたように、祈りを通して与えられる神の平安は、私たちの心と思いを常に守り続けてくれるのである。

●週題 事ごとに祈る
●聖書 ビリビ4・4-7
●暗唱聖句 何事も思い煩うてはならない。ただ、事ごとに感謝をもって祈(り)と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。
●目標 祈りの意味を発見し、実際に祈る者となる。

導入

皆さんはどんなときに祈りますか。毎日祈る人もいるし、困ったときだけ祈る人もいるかもしれませんね。今日は、なぜ私たちはお祈りをするのかを学びましょう。

一、心と思いが守られるために祈る

今日の御言葉は、まず、いつも喜ぶようになりなさいと教えています。あなたは、不安でイライラしたり、心配でクヨクヨ悩んだり、不満でフツフツ言ったりしてませんか。受け入れられないことがあってムカムカしたり、悲しみがいつまでも去らなくてメソメソしたことがありますか。例えば「明日、テストがあるからどうしよう」と、明日のこと心配したり、「先生に叱られたから明日、学校に行きたくない」などと、考えていることはありませんか。それらは、心と思いが守られていない状態です。心と思いは、神様に祈ることによって、守られます。

二、主に知られているから平安

神様に「おとうちゃん」と呼びかけ、いつでも何でも祈りなさいと、神様は勧めておられます。小さい子どもが「ねえねえ、おとうさん」と話しかけるように、神様に何でもお話ししていいのです。神様は、あなたの祈りを聞いて、一番良い答えを下されます。間違ったことを祈っても、大丈夫です。神様がちゃんと正して下さるからです。しかし、誤解してはいけないことがあります。神様があなたの願いを知らないから、祈るのではありません。神様は、あなたの願いをあなたが祈る前からご存じです。あなたが祈ったことを超えて応えて下さいます。ではなぜ祈るのでしょうか。それは、あなたが神様に知られていることを、あなたが知るためです。「神様は、私の思いも願いも全て知っておられ、いつも私といっしょにおられる」と自覚すると、安心できて、心と思いが守られるのです。

三、主の計画が最善だから平安

しかも、神様は私たちが幸せにする計画を持っておられます。それは私たちが考えるより、ずっと素晴らしい計画です。神様は、皆さん一人一人の願いを全部知り、何が必要なのかもわかって、一番良い時に一番良いことをして下さいます。神様の計画以上に良い計画はないのですから、事ごとに祈って神様に導かれているなら、私たちは一番良いことができます。また、事ごとに祈って神様に導かれるなら、神様の最善がなされますから、あれこれ思い煩わなくていいし、心と思い

が平安になって守られるのです。私たちの毎日は、すべてが思い通りに行くわけではありません。嫌なこともあります。しかし、何でも祈っていると、不思議なように、嫌だと思ふことにも神様の計画があることがわかるようになります。自分の願いが最高だと思ふのは間違いです。事ごとに祈ると、神様のなさる最善に委ねる知恵が身につく、私たちの心と思いが守られて、忍耐強い者へと成長していくのです。

結論

あなたが今、欲しいと思っているものは何でしょうか。携帯電話、ゲームのソフト、それともCDですか。欲しい物はたくさんあっても、いつも思いどおりにはいきません。とにかくまず神様に祈りましょう。神様は、私たちよりもはるかに知恵があり、あなたに何が必要かをご存じです。神様を信じてお任せするなら、安心していられますし、神様がどんなに良いものを用意しておられるのか期待することができます。また神様は、自分勝手な願いならそれもわかるようにして、本当に良いものだけを下さいます。朝起きたら祈り、食事の前に祈り、学校に行く時に祈り、遊びに行く時に祈り、事ごとに祈りましょう。心と思いが守られるためです。嫌なことをせねばならない時も祈り、どうしたら良いかわからない時も祈りましょう。恨みやねたみがおきた時も、人を赦せない時も、とにかく祈りましょう。事ごとに祈るなら、神様の御心がわかるようになります。心も思いも守られ、いつも喜んでいることができるのです。

ワーク A

導入のヒント

●導入のヒント
明日は運動会。「神様、速く走れますように」ってお祈りしたことはありませんか。また、ピアノの発表会するとき、「上手に弾けますように」って祈ったことがありますか。お祈りは、神様とお話することです。では、いつお祈りをしたらいいでしょうか。

●ワークについて

幼い頃からお祈りすることの大切さを知りましょう。毎日の生活の中で、いつお祈りしているのか聞いてみてください。4種類の絵があります。実際にできているお祈りの絵のカッコの中に、丸を記入して下さい。

ワーク B

●質問1 私たちはどんな時にお祈りしているのでしょうか。今一度思い返してみよう。絵にない場面も話し合おう。

●質問2 一言二言味わいつつ、正しい順序に並べよう。祈りは思いわずらいを取り除き、私たちの生活に主の平安を与えてくれます。

●質問3 子どもたちもきつと祈りのきかれた証があります。その経験は信仰を強くします。

●賛美歌

「ふくいん子どもさんびか72番」

●今日のお祈り 「神様、どんなことでもお祈ります。わたしの心と思いを守って下さい。」

ワーク C

●神様は、私のことをすべて知っていて、その上で最善をなして下さいとされているお方です。

●神様は、一方的にみわざをなしてくださることもありますが、多くは私たちがその問題や課題を自覚し、その上で、主を信頼して祈ってくるのを待っておられます。いつでも、どこでも、何でも祈ったらいことを教えます。

●最初の段階では、自分の要求をかなえてほしいというご利己的な思いが、支配的だと思えます。しかし、主御自身との交わりこそが幸いな時であることを話せると良いですね。

●祈りは、①かなえられる、②神様との交わり、③心と思いが守られる、の内容を含みます。

ワーク D

●質問1 ただ喜ぶのではなく、「主にあって」なので、人の力ではなく主の恵みで可能です。

●質問2 禁止事項は基本的にはありません。ふさわしくない祈りでも、祈る間に整えられていきます。なんでも包み隠さず話しましょう。感謝は神への信頼の心のあらわれです。

●質問3 求めて祈っていることが願いの本質であるとは限らないし、ふさわしいこととは限りません。神の最善と、神の時のために、神はまず平安を与えて下さいます。

●質問4 祈りの再考。神に信頼する祈りは、隠さず話すことであり、委ねることです。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 私たちはどんなときに祈るでしょうか。
2 心配事、悲しいこと、不満なことがあったとき、その心配な気持ちを落ち着けるために、どうしたら良いでしょうか。
3 肉欲や悪魔の誘惑を受けたとき、どうしたらよいでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 あなたが思い煩うのは、どんなときですか。
2 あなたは、いつも喜んで、寛容で、思い煩わずに、感謝できる人になりたいと思いますか。
3 聖書は、そのようなときに、何をなさいますか。言っていますか。

●話し合ってみよう

1 私たちの生活で、どんなときに祈りたいと思うでしょうか(食前、テスト前など)。
2 私たちが神の前に祈れないのは、どんなときでしょうか。
3 祈って平安が与えられた経験などを話し合ってみましょう。



聖書 イザヤ7・10・14
週題 その名はインマヌエル

序論

今週から4週にわたって、主の降誕の学びをする。単に出来事を語るだけでなく、主イエスを心に迎える決心ができるように導きたい。初回はイザヤの預言である。6章で預言者としての召命を受けたイザヤは、直後の7章、9章、11章において、神が「救い主」を遣わされると預言する。

一、預言の背景

アハズが南王国の王になったのは、紀元前七三五年前後だと推測される。この頃、北王国の王のベカと、その北にあったスリヤの国王のレチンが同盟を結んで南王国を攻撃しようとしていた。この知らせを聞いたアハズ王は、八風に動かされる林の木のように動揺し、エルサレムが敵に包囲されても大丈夫なように、水の供給源の視察に出かけた。王の居場所を主から示されたイザヤは、自分の息子を連れて出掛け、「スリヤの頭がレチン王であり、北王国の頭がレマリヤの子ベカ王であっても、南王国の頭は主自身であることを知れ」と強く訴えかける。さらに主を信じないならば、立つことはできない」と、信仰に立つてのみ、この危機は乗り越えられることを論じた。しかし、アハズ王は、イザヤの言葉を受け入れようとはしなかった。そこでイザヤは、不信仰な王が信じられるように、八主に一つのしるしを求めよと助

言した。しかし、王は断った。王は、強大な帝国アッシリヤと同盟を結んで、自国を守ってもらおうと考えていたからだ。そのとき、イザヤが主に預言したのが14節の有名な聖句である。

二、神からのしるし

この文脈から考えるなら、14節には二通りの解釈が可能である（アーチャー『聖書の難解箇所事典』266頁以下）。まず、その時の危機から南王国を救ってくれる八男の子が生まれることと解釈できる。立派な將軍や王でなく、何の力もない赤ん坊が、国家を救うのである。その男の子とはだれか。アハズ王の後継者となった善王ヒゼキヤとも考えられるが、文脈からは、8・3に登場するイザヤの第二子マヘル・シャル・ハシ・バズ（「分捕物は素早く、獲物はさつ」との意味）と考えられる。確かに、この子がまだ幼かった七三二年に、レチンとベカは滅ぼされることとなる。

しかし14節はそれ以上のことを預言している。イザヤの第二子はおとめ（すなわち、結婚前の女性）から生まれたのではない。また、神が共におられたからこそ、南王国は救われたのではあるが（8・10）、この男の子がインマヌエルとなえられたわけではない。さらに、人間を罪から解放できるのは、主イエスのみである。14節の御言葉は、イザヤの時代から約七〇〇年後、イエス・キリストの誕生によって成就したのである。

三、しるしの実現

現代の科学では、卵子に人工的に刺激を与えて細胞分裂を開始させ、受精した時と同じように生

命を誕生させることができる。ましてや聖霊が臨

まれたのなら、処女が妊娠することは、決して不可能な話ではない（ルカ1・35）。処女降誕よりもっと驚くべき奇跡は、天地を創造された神が、私たちと同じ肉体をもつ人間となってこの地上に誕生されたことである。なぜ神はこのようなみわざをおこされたのか。主イエスは、八神われらと共にいます（マタイ28・20）と示すために人となって地上に誕生された。そしてその生涯を通して、「私が来たのは罪人を招いて悔い改めさせるため、律法を成就するため、かえって仕えるため」などと教えられたのだ。八父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである（ヨハネ1・18）。主イエスの生涯を見るなら、神がどういってお方か、はっきりとわかる。

神がどのような方か、主イエスが教えてくださなければならないにもわからなかった。特に律法を守らなければ救われないとの考えが主流だった時代に、神が罪人を愛しておられ、罪人を救う方であることをだれが知っていたであろう。また、主の贖いの恵みを信仰によって受け取るだけで救われることなど、だれも考えられなかった。神は、人を嫌って遠く離れておられる方ではなく、ひとり子を与えるほどに愛しておられる方である。

結論

毎年クリスマスをお祝いするのは、現代においても、八神われらと共にいます（マタイ28・20）を体験するためである。神はあなたから遠く離れておられない。信仰によってあなたの内に住まれるのである。

研究資料

(長田)

神われらと共に

メシヤについての多くの預言が見出されるイザヤ書（7・14、9・6、7、11・1、2、42・1、4、53章、61・1等）の中でも、最初の「インマヌエル」預言は、マタイ1・23でも引用され、有名である。この預言が、当時の文脈では、その時代の子どもの誕生についてのものであったとしても、究極的な預言の成就是、もちろん、キリストの誕生にある。このお方こそは、「インマヌエル」（神われらと共にいます）と呼ばれるにふさわしい唯一のお方である。

主イエスは、永遠の初めから神と共にあり、神としての本質をお持ちのお方（ヨハネ1・1）、神が人となって下さったお方である（ヨハネ1・14）。このお方を見ることによって、私たちは、神自身を見ることが出来る（ヨハネ1・18、14・9）。また、その十字架の死により、罪人が神のもとに行くための道となつて下さり（ヨハネ14・6、ヘブル10・19）、よみがえって今も生き、信じる者と共に歩んで下さる（マタイ28・20）。私たちは、このお方によって、「神われらと共にいます」ということを、現実として生きていくことができる。

共にいます神を信じることは、気分や感情の問題ではないし、ましてや、言葉だけのことであってもならない。現実の困難や難しい局面に遭遇し

たときに、どこまでも、共にいますこのお方に信頼することができるだろうか。アハズ王の姿は、臨在信仰を口にする私たちに對しても、その信仰の内実を問いつけている。

テキスト

1・9 テキストの範囲外であるが、インマヌエル預言の大切な背景として、十分理解しておきたい。時代は、イスラエル民族が、北のイスラエル王国と、南のユダ王国に分裂していた時代の、紀元前七三四年頃。ユダ王国は、アハズ王即位の直後で、スリヤとイスラエルの連合軍が攻め上ってきたことにより、国中が動揺していた。その時、神はイザヤを通して、アハズに語られた。「氣をつけて、静かにし、恐れてはならない（4節）、もしあなたがたが信じないならば、立つことはできない（9節）」。

11 一つのしるしを求めよ スリヤとイスラエルがユダを打ち破るといふことは起こらないとの、主の御言葉（7節）に対するしるし。

12 わたしはそれを求めて、主を試みることをいたしません 申命記6・16を引用しており、いかにも敬虔な者の言葉のようであるが、主自身「しるしを求めよ」と語っておられるのに、それを断わるアハズのこの言葉の背後には、主への不信仰が隠されている。彼はこの時、主に信頼することよりも、アッシリヤの王により頼むことを、既に決意していたのであろう。列王下16・5によれば、彼はアッシリヤの王に贈り物を送り、

危機からの救助を願っている。

13 人を煩わすことを小さい事とし、またわが神をも煩わそうとするのか 預言者を通して語られた神の言葉を拒むことは、預言者だけでなく、神をも煩わすことである。

14 主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる アハズが求めようとしていないので、主自身「しるしを求めよ」としるしを与えられる。

見よ、おとめがみこもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる 15・17節と8・3を比較すると、「おとめ」とは、イザヤの妻であり、「男の子」とは、彼らの間に生まれたマヘル・シャル・ハシ・バズであると考えられる。実際、この子が物心つく2、3歳を迎える前に、スリヤの王レチンとイスラエルの王ベカは滅ぼされる。しかし、「インマヌエル」と呼ばれるにふさわしいお方、メシヤの誕生こそは、全人類の救いのために、陰府のように深い所、天のように高い所に与えられた、究極的な「しるし」である。なお、「おとめ」と訳されているヘブル語「アルマー」は、新改訳聖書では「処女」と訳される。ルターはこの言葉についてこう記している。「アルマーが結婚した女に用いられている例を示してくれた人には、百グルテン（3グルテンで牛1頭の値段）あげよう」（いのちのことば社『新聖書注解旧約3』535頁）。

- 週題 その名はインマヌエル
- 聖書 イザヤ7・10、14
- 暗唱聖句 その名はインマヌエルとなえらる。
- 目標 神様は私たちを愛され、共にいて下さる事実を発見する。

導入

クリスマスまで4週間になりました。アドベントの期間、飾り付けやプレゼントの準備だけでなく、イエス様をお迎えする心の準備が大切です。神である方が人となって、私たちの所にまで来て下さった意味を、かみしめしましょう。

(起) ストーリーを語る

これは、今から約二千七百年ほど前の出来事です。その頃イスラエルの国は、北と南に分かれて争っていました。南王国では、北王国とスリヤ王国の同盟軍に攻撃されるという噂を聞いて、王様も民もとても恐れていました。そこで、南王国のアハズ王は、敵に囲まれても困らないようにエルサレムの貯水源を調べに行きました。

そこに預言者のイザヤが、神様の言葉を伝えるためにやってきました。イザヤは、「たとえスリヤや北王国が戦いを挑んできたとしても恐れることはない。南王国の本当の王は神様であるからだ」と、預言したのです。これは、南王国はダビデ王様の血統で、神様の祝福が約束されているから神

様をしっかりと信じていれば敵から守られ、危機は必ず乗り越えられるという意味です。しかし、このときすでにアハズ王は、目に見えない神様よりも、目に見える強国アスリヤに頼ろうと決めていたのです。

そこで、神様はさらにもう一度イザヤに預言を与え、神様が救って下さるしるしを求めるように伝えました。しかし、アハズ王は本心を隠して、「そんな恐れ多いことはできません」と言い、神様の言うことをきかなかったのです。このような王様の態度にもかかわらず、神様はなおも救いを約束する預言を与えられたのです。

イザヤは、「見よ、おとめがみこをもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる」と預言しました。この預言は、それから約七百年後に、イエス様がお生まれになるというクリスマスの預言です。

結婚してないおとめがみこをもって男の子を産むという奇跡は、おとめマリヤからイエス様がお生まれになって実現します。

また、その男の子の名前がインマヌエルと呼ばれるというのは、神様が私たちと共にいられるということを表しています。当時は神様ということ、とても遠い方のように思われていました。しかしイエス様は、人の子として私たちの世界にまで降って来られ、共にいられる神様です。天地万物を創造された偉大な神様が、私たちと同じ体をもつ人間になって、この地上にお生まれになることでこの預言は実現するのです。

ちと共にいて下さるために誕生して下さったことを、本当にありがとうございます。

ワーク A

● 暗唱聖句 (12月2日～12月23日)

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。(ヨハネ3・16)

● 導入のヒント

クリスマスにケーキを食べるのはなぜか、考えたことがありますか。それは、イエス様のお誕生をお祝いするためです。でもなぜイエス様のお誕生日をお祝いするのでしょうか。

● ワークについて

今日から4週間でもみの木を作ります。色を塗りましょう。三角形の上半分はのりをつける部分です。翌週の分を次々と上に貼って下さい。幹は教会で用意して下さい。

ワーク B

● 質問1 イエス様誕生の預言「インマヌエル」を覚えよう。「名」はその人を表します。

● 質問2 「インマヌエル」の意味を知りましょう。神様がこんな小さなわたしとずっと一緒にいて下さるとはなんと素晴らしいことでしょうか。

● 質問3 友だちと一緒に勉強の時、一人である時等、子どもたちもイエス様が一緒にいて下さることを体験しています。分かち合いましょう。

● 賛美歌 「主イエス様いつも私とインマヌエル」(フレイスワールド8番)

● 今日のお祈り 「神様、イエス様はいつも私た

ワーク C

● クリスマスの最初のメッセージとして、インマヌエルの神様を学びます。

● 「困ったときの神頼み」が普通の心でしょう。自分中心で自分勝手な時が多いものです。

● しかし、嬉しい時も、悲しい時も、怒っている時も、笑っている時も、寝ている時も、いつしにいてくださる、という約束を、この名前から確認させます。

ワーク D

● 質問1 信仰に立って危機を乗り越えることが求められながら、目の不安に神様の約束が信じられない状態です。信じることをできるよう、神様ははつきりとわかる確かな証拠としてしるしを求めさせましたが、王は信じようとしませんでした。

● 質問2 「インマヌエル・神は我らと共に」は神様自身が与えられるしるしです。アハズ王だけに留まらず、彼のように頑なな者のためのしるしでもあります。主イエスの十字架の贖いのゆえに、私たちははばかることなく神様に近づくことができます。

● 質問3 自分にとって、神様が共にいられるということはどういうことが、考えましよう。

(承) 学ぶべき真理

なぜ神は、人となってこの地上に来られたのでしょうか。それは、神様が遠くはなれたお方ではなく、私たちと共にいられる方であることを示すためです。そして、その生涯と語られた言葉から、神様が罪人の私たちを愛して下さっていること、罪から救うためにひとり子を与えて下さったことがわかりました。神様は遠く離れたところから人が罪を犯すのを眺め、罪を犯したら罰を与えるという恐ろしい方ではないのです。

(転) 生活への適用

ごちそうの写真が一杯のっているパンフレットをただだけ見ても、その味は分かりません。しかし、一口食べれば、どんな味なのか分かります。そのように、私たちが神様の愛を知り、罪人を赦す方であることがわかったのは、イエス様のほうから来て下さって、本当の神様を見せて下さったからです。神様は、とても現実的な方です。イエス様を信じるなら、皆さんにも神様が共にいられることがわかるようになります。

結論

毎年クリスマスをお祝いするのは、今も神様が私たちと共にいてくださることを体験するためです。神様は遠くにおいて、罪を犯したら罰を与える恐ろしい方ではありません。神様はいつもそばにいて罪を犯さないように助けて下さる方であり、犠牲を払って罪を赦して下さる方なのです。あなたも、このことを体験し、本当のクリスマスをお祝いしましょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 救い主の誕生をイザヤが預言したとき、南王国ユダはどんな状況だったでしょうか。

2 救い主は、どのような理由で、だれのために生まれる必要があったのでしょうか。

3 救い主誕生の預言を聞いた人々は、どのような思いを持ったと想像できますか。

● 自分に当てはめてみよう

1 もしもあなたがアハズ王であつたら、イザヤの預言をどのように受けとめるでしょうか。

2 神様が助けてくださるという約束がありながら、目の前の出来事はまるっきりそれと反対のように見えるとき、それでも神様の約束を信じることができるでしょうか。

3 あなたは、救い主を必要としていますか。もし必要なら、それはなぜですか。必要でないとしたら、それはなぜですか。

● 話し合ってみよう

1 私たちが試験にあつたとき、何に一番頼るでしょうか。しかしそれは、本当に頼りになるものでしょうか。

2 救い主誕生の預言が、実際にイエス様の誕生によって実現したのは、七百年後でした。私たちへの神様の約束も、時間がかかるかも知れませんが、必ず実現すると信じられますか。

3 あなたは、「神われらと共にいます」という約束を、どのように受けとめていますか。

聖書 マタイ・18・25
週 題 ヨセフへの告知

序論

ルカ福音書がマリヤの側から降誕物語を描いているのと対照的に、マタイはヨセフの立場からそれを述べている。彼は冒頭の系図において、ヨセフの子として誕生したイエスが、ダビデ王の子孫であることを示し、彼が旧約聖書に預言されていたメシヤであることを証拠立てる。実際には、主イエスはヨセフとの「血のつながり」はないのだが、法的にはヨセフの子であった。そうなるために、ヨセフはマリヤと同様、大きな信仰の決断をしなければならなかった。

一、正しい人ヨセフ

ヨセフはマリヤと婚約していた。「ユダヤの婚約は法律上の夫婦となることであった。この婚約の期間は一年ほどで、これを解消するには離婚手続きが必要であった」(『新聖書注解』)。ところがこの期間中に、ヨセフはマリヤが妊娠していることに気づいた。マリヤはこの次第をヨセフに話さなかったようである。話しても信じてもらえないと思ったのだろうか。もしこの妊娠が公になるなら、マリヤは律法に従って、石打の刑に処せられなければならない(申命記22・22)。そうならないため、ヨセフは人ひそかに離縁しようと決心した。離縁したら、妊娠させた男と結婚できない、妊娠がとがめられることもないからであろう。ヨセフ

研究資料

(足立)

マタイはヨセフの立場から、イエス誕生の出来事を語っている。そしてシンプルにマリヤが聖霊の働きによって妊娠したことを告げている。ヨセフは離婚を考えたが、天使の訪問によって主の導きを得た。ここでも処女降誕が強調されている。しかも旧約の預言の成就として。

テキスト

18 明らかにマタイは、イエス・キリストの誕生の次第を伝えようとしている。しかしヨセフやマリヤのことを読者に伝えていない。同様に処女の概念を詳細に語ろうともししていない。婚約して(ムネステューオー、ルカ1・27、2・5)と訳される言葉は、普通、結婚前の一年間の堅い約束を指し示す。その間女性は自分自身の家族のところにどまっているが、確立された結びつきは強く、実際結婚の一部とみなされていた。婚約中の女性が姙娠した場合、処罰された(申命記22・23、24)。マリヤは、まだ一緒にいない前に、妊娠した。しかしその懐妊は、聖霊によってであった。

19 マリヤの夫ヨセフは、正しい(ディカイオス)人であった。これはおそらく、律法を遵守することに注意深いと言ふ意味であろう。この状況を網羅する章節は、性的な関係を持った婚約中の女性に関するところに見られる(申命記22・23、27)。正しい人ヨセフは、結婚を完了させることは不可

は正しい人であり、思いやりのある人であったことがわかる。しかし、ヨセフは身重のマリヤが心配であり、マリヤに何が起ったのかと、△このことを思いめぐらしていた△ことも確かである。マリヤが心きよらかな女性であったことはよく言及されるが、このヨセフが正しい人であったことも忘れられてはならない。

二、御告げを受けたヨセフ

そのとき、主の使いが夢に現れた。マリヤの場合と異なり、夢で、御使いは彼にどう行動すべきかを教えたのである。それは、マリヤの妊娠は聖霊によるものだから、心配しないで彼女と結婚せよという驚くべき言葉だった。さらに御使いは、生まれるのは男の子で、その名をイエス(主は救い)という意味と名づけよと言ふ。誕生前に性別やその生涯の目的まで知られるという神のみわざを、ヨセフは経験した。

マタイは、この直後に、先週学んだイザヤの預言を挿入する。この時ヨセフがこの預言を思い出したかどうかは定かではないが、文脈的には、この信じられない出来事がすでに預言されていたことを示す意図があったことは確かであろう。

ヨセフは、夢による御使いの告知によって神の御心を知り、知ったならそれとお行いする人であった。マリヤや、バプテスマのヨハネの父ザカリヤは(ルカ1・18)、御使いが直接語っても、その直後は信じなかったのに、ヨセフは夢でも神から出たことか否かを悟り、それにすぐ従った。彼は霊性の鋭い、信仰深い人であったことがわかる。

能と考えたが、厳格であることを望まなかった。おそらく、ヨセフが神の前に正しいといわれるのは、あわれみの要素も含まれていたのだろう(正しい人は情け深い。マタイ9・13、12・7、23・23、詩篇37・21)。彼は、公にスキャンダルになることを避ける道を選んだ。公けになる(ティグマティゾー)は、公開する、公で恥をかかせる、という意味。しかしヨセフは自分の義憤を満足させる道を選ばなかった。ひそかに離縁するとは、マリヤのこれからを彼なりに配慮しての選択だったのであろう。ヨセフは申命記24・1を意識していたと思われる。

20 思いめぐらしていた(エンスメオマイ)という動詞の時は不定過去なので、明確な結論に達するまでを伝えている。主の使はメッセンジャーを意味する。もちろん主なる神から遣わされた天使。夢に(参照 2・12、13、19、22、27・19)という方法は、新約ではマタイ以外にはでてこない。ダビデの子(参照1・1)とは、イエスの王としての家系を強調していると思われる。心配しないでは、何かをすることにひるむな、という意味。迎えるとは、自分の妻として自分の家にという意味。その理由は、マリヤの受胎は、聖霊によるものであるから。

21 マリヤが産む子は男の子で、ヨセフは、その名をイエスと名づけるように指示される。彼は(アウトス)が強調されている。(彼こそ)おのれの民をそのもろもろの罪から救うものとなる(参照詩篇130・8)。もろもろの罪(ハマルティアの複数形)

三、御言葉に従ったヨセフ

△ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに△行動した。まずマリヤと結婚し、一緒に住むようにした。しかし、△子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった△。つまり性的な関係を結ばなかった。そして、子どもの名前も、御使いが命じたとおりにイエスと名づけた。マリヤが△わたしは主のはしめです。お言葉とおりの身になりますように△と言ったのと同様に、ヨセフはすべて御使いが語った通りにしたのである。もしヨセフがマリヤと結婚しなかったなら、生まれた子は、法的にダビデの子孫と言ふことはできない(ただし、ルカ3・23以下がマリヤの系図であるなら、彼女もダビデの子孫である)。このように、ヨセフの従順によって、救い主がダビデの子孫として生まれるという預言と、処女から生まれるという預言が矛盾なく成就したのである。

結論

ヨセフとマリヤという夫婦が御言葉に従う決断をしたことによって、神の御子イエスは人間としてこの地上に誕生することができた。現代にも、主の御言葉に従うことが困難なことは、往々にしてある。しかし、主の計画が実現するためには、信仰深く、正義を愛し、思いやり深く、御言葉の意味を悟り、そのとおり従順に行なう人がどうしても必要である。あなたは、ヨセフのように用いられることができるだろうか。神の尊い救いの業を地上に実現するには、ヨセフのような信仰者が必要なのである。

は、的外れを意味する。強調点は、イエスがもたらす救い(参照20・28、26・28)にある。

22 マタイは預言の成就を特に大切にしている。2・15、17、23、4・14、8・17、12・17、13・35、21・4、26・56、27・9。注目すべき事は、預言者によって語られた点ではなく、預言者を通して主が語られたという点にある。マタイは靈感された預言を非常に重んじている。

23 イザヤ書7・14からの引用である。インマヌエルとはヘブル語の意味の字訳(音訳)であり、神われらと共にいますとなる。内容はイエスによって、失われていた臨在が回復すること(マタイ28・20、参照18・20)。

24 ヨセフは目覚めて、御使いが彼に語ったとおりにした。マリヤを妻に迎えたとは、ヨセフがマリヤを妻として公に受け入れたという意味である。

25 ヨセフとマリヤは結婚したが、イエスが誕生するまでは、性的関係を持たなかった。知る(ギノスコ)という動詞は、知る、知るようになる、を意味し、様々な文脈で幅広く知ること用いられる言葉である。ここでは性的関係の婉曲語法である(ルカ1・34)。この節は、赤子誕生まで性的交渉はなかったということを明確にしている。旧約聖書は一貫して、性的交渉は結婚生活の大切な一部として許可し、認めている(創世記1・28、9・1、箴言5・18、1コリント7・3-5)。その子をイエスと名づけたとは、ヨセフが子どもを法律上受け入れたとの意。

礼拝メッセージ例

● 週 題 ヨセフへの告知

● 聖 書 マタイ・18・25

● 暗唱聖句

ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。 マタイ・24

● 目 標 神様は、御心を知り、そのとおり行なう人を用いて、みわざをなさることを発見する。

導入

マタイによる福音書の始めには、長い長い系図が書いてあります。それによって、ヨセフの子であるイエス様は、ダビデ王の子孫であったことがわかります。今日は、イエス様のお父さんのヨセフさんが、どんな信仰をもっていて神様に用いられたのかを学びます。

(起) ストーリーを語る

イエス様のお父さんになるヨセフさんは、大工をしていました。そして、マリヤさんと結婚の約束をしていました。ユダヤの国では、婚約期間は1年ほどもあり、それは結婚したのと同じことだと考えられていました。ですから、もしこの約束を取り消すとしたら、離婚手続きをしなければならぬほど正式なものでしたのです。

ところがある日、ヨセフさんはマリヤさんのお腹にもう赤ちゃんがいることに気づきました。ヨセフさんは、どんなに驚いたことでしょう。当時の律法では、マリヤさんのように結婚した相手以

外の子どもをつくらしたりすると、石打の刑で殺さ

なければなりません。ですからヨセフさんは、マリヤさんが殺されたり、恥ずかしい思いをしないように、だれにも知られないうちに婚約を取り消そうと決心しました。そうすれば、マリヤさんは、お腹の赤ん坊の父親と結婚して、赤ちゃんなを無事に産むことができるからです。ヨセフさんは心のやさしい、思いやり深い人でした。

そんな中、ヨセフさんは赤ん坊を宿したマリヤさんのことを心配しながら、マリヤさんに「一体何が起きたのだらうと、思いめぐらしながら眠りにつきました。すると主の使いが夢に現れて、ヨセフさんがこれからマリヤさんをどうしたらよいのかを教えてくれたのです。御使いは、「マリヤさんに赤ん坊ができたのは、神様の聖霊によるものです。ですから心配しないでマリヤさんと結婚しなさい。生まれるのは男の子です。名前をイエスとつけなさい。彼は自分の民を罪から救う者となるのです」と言うのです。神様は生まれるのは男の子だと言われ、その名前まで告げられました。しかもその子どもが大きくなって、人を救う者になるということまで教えてくださったのです。

目を覚ましたヨセフさんは、御使いの言葉通りにマリヤさんを妻として迎え、子どもが生まれるまでマリヤさんを守りました。そして生まれた子どもにイエスという名前を付け、すべて御使いに教えられた通りにしたのでした。

(承) 学ぶべき真理

ヨセフさんは、神様の御心を知ったならそのと

おり行なう人でした。ヨセフさんは夢であつても、

神様の語っておられることかどうかを理解し、すぐに従いました。このようにヨセフさんが素直に神様に従ったことで、救い主がダビデの子孫として生まれるという預言と、処女から生まれるという預言が、本当のことになりました。神様は、神様の御心を知り、そのとおり行なう人を用いて、神のみわざをなされるのです。

(転) 生活への適用

あなたは、学校で出された宿題をきちんとしていますか。また、家族に頼まれた用事をすくにしますか。「あとでやるから」と言いながら、とうとうほっておいたことはありませんか。そんな人は、神様の御心が示されたとき、すぐ従えるでしょうか。神様が私たち一人一人にしてほしいと願い、計画しておられることがあります。子どもに対しても神様の御心があります。「あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ」とか「父と母とを敬え」などは子どもに対する神様の御心です。あなたはヨセフさんのようにすぐに従えますか。

結論

ヨセフさんとマリヤさんが御言葉に従う決断をしたので、イエス様は人間としてこの地上に生まれることができました。神様の計画が実現するために、神様は御言葉の意味を知る信仰の深い人、それをすぐに行なう従順な人を用いられます。あなたも、ヨセフさんのように、御心を知ったらすぐ従う人になり、祝福を地にもたらしましょう。

ワーク A

● 導入のヒント

アドベント2週目になりました。今日はヨセフさんのお話です。みんなは寝ている時、夢を見ることはありますか。ヨセフさんはある夜、夢を見ました。その夢の中に、神様からの御使いが出てきたのです。

● ワークについて

先週に続いてみみの木を作りましょう。先週休んだお友だちは今日からでも大丈夫です。色を塗りましょう。完成したら先週の絵の上ののりで貼りつけましょう。

ワーク B

● 質問1 今日のお話を思い出し、ヨセフの信仰を学びましょう。

● 質問2 ヨセフの気持ちになつて考えてみましょう。人間の考え、周囲のときどき、全てを越えて「神への信頼」を選んだヨセフ。敬服します。

● 質問3 イエス様を信じていることで友だちに笑われたり、礼拝を守るので、遊ぶ約束からはずされたり。これも、ヨセフの信仰と同じです。

● 賛美歌

「みことばきいて」

● 今日のお祈り 「神様、ヨセフさんのように神様を信じて、神様の御言葉に従っていただける人にして下さい。」

ワーク C

● 2問目は3番目が正解ですが、この絵はヨセフが神様の御言葉に従ったために成就した主の生涯を表しています。①家畜小屋の飼料葉桶に誕生されて、②十字架にかかれ、③再臨されて信じる者を迎えてくださること(これは未来のこと)の絵です。これらは神様の最善の出来事です。

● ヨセフがこの神の御心に従うために、多くの苦悩を味わったでしょう。また御心をすべて理解すること、到底、不可能だったでしょう。それにもかかわらず、神様のなさる最善を信じて御言葉に従っていったのです。自分が心の中(本心)で持っている「従ってもよいという場合の条件」を考えて、ヨセフと対比させましょう。

● そして、今、自分に示されている具体的なことを思い出させて、書き込むようにします。

ワーク D

● 質問1 先走ってマリヤを裁かず、傷つけないようにと、マリヤを大切にしたらこそそのヨセフの離縁の決意でした。

● 質問2 天使が言ったことの確認です。

● 質問3 天使が言った通り、信仰によって恐れから解放され、すぐにマリヤを迎えました。出産まで関係を持たなかったのは、聖霊による懐妊を信じたことのあらわれです。

● 質問4 ヨセフが愛するマリヤを大切にしたのは、主を愛し、主を第一としたからです。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 ヨセフは、聖霊によって身重になったマリヤをひそかに離縁しようとした。それはなぜだったでしょうか。

2 マリヤと離縁しようとしていたヨセフは、彼女を迎えました。ヨセフの心境の変化は、なぜおこったのでしょうか。

3 マリヤとヨセフは、どちらも御使いの言葉に従いました。でも、最初から簡単に従うことができたでしょうか。

● 自分にあてはめてみよう

1 あなたが、マリヤやヨセフの立場だったら、どんな行動をとったと思いますか。

2 マリヤやヨセフの立場になつてみて、マリヤの悩みとヨセフの悩みを自分の言葉で表現してみよう。

3 あなたに、神様が御言葉を語られるとしたら、あなたはマリヤやヨセフのように、そのみことばを受け入れることができますか。もしできないとしたらそれはなぜですか。

● 話し合ってみよう

1 マリヤとヨセフが、イエス様の両親となるようにに神様が選ばれた理由は何だと思えますか。

2 なぜ神であるイエス様が、人となって、生まれてくださったのでしょうか。

3 神様は御言葉に従順な人を用いられます。あなたは神様に用いられたと思いますか。

ワーク解説

聖書講解

マタイ2・1-12

博士の訪問

序論

今週の箇所でもマタイは、主イエスの誕生が旧約聖書の預言の成就であることを強調する。イエスこそ、ユダヤ人の王のみならず全世界の王であることが、八東からきた博士たちVが主を礼拝した出来事によって示されているのだ。

一、博士たちの態度

博士Vとは、イスラエルの東方にあったバビロンあたりで星占いをしていた人々だと推測されている。紀元前12年にハレー彗星が現れた時、紀元前7年に木星と土星が接近して強い光を放った時、あるいは奇跡的な星か、詳細はわからないが、そのような特異な現象を見て、彼らは何か特別なことがおこるうとして感じただろう。そして色々調べて、バビロンに捕囚になっていたユダヤ人が残した聖書から、メシヤ降誕の記事を発見したのである。この博士Vという語は「魔術師」とも訳される(使徒13・6)。彼らに異教的な雰囲気を感じるが、文脈からは彼らがまじめにユダヤ人の王Vに会いたいと願っていたことがわかる。たとい異教徒で異邦人で、聖書を詳しく知らないにしても、求める心があるからこそ、彼らは主に導かれて千キロの旅をなし、ヘロデ王の宮殿にたどり着いたのである。

研究資料

(足立)

マタイは、東方の博士たちの訪問、聖家族のエジプトへの避難、ヘロデによるベツレヘムの子どもの虐殺を記しているが、その中で罪深い人間の敵意にもかかわらず、神はご自分のみこころを成就されるという真理を、私たちに伝えている。

テキスト

1 ユダヤのベツレヘムとの記述により、マタイはゼブルンのベツレヘム(ヨシヤ19・15)と区別している。そしてイエス誕生時が、ヘロデ王の代であったことを明記している(参照ルカ1・5)。このヘロデはヘロデ大王のこと。彼はユダヤ人ではなく、その父はイドマヤ人、母はアラビヤ人であった。しかしローマの元老院が、紀元前40年に彼をユダヤ人の王に任じた。彼は非良心的な暴君であったが、ユダヤ人の支持を得ようと、エルサレムの神殿の建設や、サマリヤの再建に取り組んだ。博士たち(マゴス)とは、知恵を授かった人々のことではなく、星の学徒たちのことである。彼らの出身地はどこかわからない。

2 博士たちは、ユダヤ人の王を探していた(マタイ27・11、29、37)。お生まれになったかたはどこにおられますかと、すでに生まれた王を意味している。彼らは、星を見たと言明している。この現象に関して確信に至るものはない。そのかたを拝みにきましたとは、臣従の礼を意図したのかもしれないが、その意図するところは最大級のも

二、ヘロデ王の態度

しかし、当時のユダヤの王ヘロデは、このことを聞いて不安を感じたV。彼は純粋なユダヤ人ではなかったで、自分の地位が奪い取られると恐れたのである。すぐに八祭司長たちと民の律法学者たちVとを召集して、旧約聖書を調べさせた。するとミカ5・2に、イスラエルの牧者Vとなる人物がベツレヘムから出ることが預言されていることがわかった。王は博士たちにこのことを知らせた上、八見つかつたらわたしに知らせしてくれ。わたしも拝みに行くからVと、真つ赤なうそをつく。すでにこの時、ヘロデは生まれた赤ん坊を殺すつもりでいたのである。

ヘロデ王の態度は、博士たちと対照的だ。彼の周囲には、聖書をよく知っている人がたくさんいたし、彼が願うことをするなら、すぐにでもユダヤ人の王Vを礼拝できたはずだ。祭司長や律法学者も、聖書をよく知っていたはずなのに、御子に会いに行こうとしなかった。博士たちは異邦人で聖書をよく知らなかったのに、遠くから御子に会いにきたが、ユダヤ人で聖書をよく知っていた王や律法学者は、近くにいながらそうしなかった。

三、主を礼拝する人々

博士たちは、教えられたとおりに出発した。星も彼らを先導した。謙遜に主を求める人々に、主は明確な道筋を示される。そして彼らは、出産時の家畜小屋から、多少とも落ち着いた八家Vに移っていたヨセフ夫婦と幼な子イエスとに出会い、礼拝したのである。さらに八宝の箱をあけて、贈り物をさげたV。礼拝は、喜んで自分の宝を

ささげることに結びつく。幼な子のいのちを奪おうとしていたヘロデ王とは正反対である。

初代教会時代から、黄金は王に、乳香は神に、没薬は死につく者にささげられると解釈されている(「新聖書注解」)。主イエスが王・預言者・祭司であることを象徴するものとも考えられる。いずれにせよ神の御子イエスが、将来、自分の命をささげられることを暗示する贈り物である。博士たちがこのことを知っていたかどうかはわからないが、御子を礼拝しようとしたことは、異邦人でありながら、神のご計画の中にあつたと言える。

このところから教えられるのは、異邦人に生まれ、異教徒であっても、真剣に救い主を求めるなら、神は不思議な方法で救い主にまで導いて下さるということである。求めない者は救われない。クリスチャンホームに生まれたからといって、自ら救い主を求めなければ、救われないのである。

また、神は不思議な方法で、私たちの人生を意義あるものにしてくださる。博士の礼拝とその贈り物は、後の人類にイエスが救い主であることを証しする。異邦人がそのために用いられたのだ。

結論

聖書知識を持っていたヘロデも律法学者も、自己中心のゆえに、救い主を迎えなかった。私たちも、クリスマスのお話を何度聞いても、それで主イエスにお会いできるわけではない。大切なのは自分中心な生き方を捨て、救い主を求めることである。そうすると、神が不思議な方法で導き、不思議な方法で有意義な人生にしてくださる。

の。キリストに対する礼拝は、マタイにとって重要なものであり、彼は10回も言及している(マタイ2・2、8、11、8・2、9・18、14・33、15・25、20・20、28・9、17)。

3 ヘロデ王が博士たちの発言をどのように耳にしたかは記されていないが、この情報はヘロデをひどく動揺させた。彼はエドム人で、ローマ政府によって王とされた。正統なダビデ王家の世継ぎが出現していたことを知ったヘロデは、ライバル出現に一種の精神的混乱に陥つたのである。

エルサレムの人々もみな、同様であったとは、ヘロデの残虐性を知る民衆が、彼が猜疑心に狂い残忍な行動に出て、社会に混乱を起すことを恐れたことを意味する。ヘロデの晩年は、その王位を脅かすものと思えば、近親者すら処刑した。

4 聞いた(エヒュンサネト)という動詞は、未完了時制であるので、ヘロデが繰り返し問うたことを意味する。彼のあせりが感じられる。

5 しるしています(ゲグラフタイ)という動詞は、完了時制の受動態であって、その記録の永遠性と権威を示している。預言者を通して書かれたということとは、究極的な起源が神にあることを示している。

6 ミカ5・2からの引用。救い主のベツレヘム出現は当時のユダヤ人の常識だった(ヨハネ7・41、42)。

7 ヘロデは公に知られることを好まずに、ひそかに事を運ぼうとして、星の時間を突き止めた。幼な子の年齢を知る目安になるのは明らか。

8 詳しく(アクリボウス)とは、厳密に、入念

に、という意味。幼な子(バイディオン)とは、「みどりこ」(プレフォス)とは違う語(ルカ2・12、16)。マタイ2・16に記されている2歳以下の「男の子」もバイディオンなので、この時のイエスはかなり成長しており、自分の足で歩いていたと考えられる。(baeeではなく、little child)。

私も拝みに行くからとは、博士たちを欺く言葉以外の何ものでもない。

9 博士たちがもし占星術の専門家であるならば、申命記4・19が禁じている日、月、星の天の万象を拜んでいることになる。しかし彼らは異邦人であり、律法に関しては全くの無知である。彼らの行動を全面的に肯定するわけにはいかないが、ただ神がご自分のあわれみの故に、彼らをまことの王のもとに導こうとして、御心を啓示されたことを受けとめたい。

10 非常な喜びにあふれたとは、直訳では、偉大な喜びとともに大いに喜んだ、となる。

11 博士たちは、幼な子(みどりこではない)イエスを礼拝した(参照詩篇72・10以下、イザヤ60・1以下)。ここには、父ヨセフへの言及はない。黄金・乳香・没薬などの贈り物という記述から、博士たちが3人であったとはいえない。また贈り物は、王権、神性、苦難(死)の象徴として意味づけられるが、むしろ高価なものがさげられたということが大切。

12 夢という表現は、神聖な啓示を意味する(1・20、2・12、13、19、22、27・19)。

● 週 題 博士の訪問

● 聖 書 マタイ2:1-12

● 暗唱聖句 ユダヤ人の王としてお生(ま)れ
 になったかたは、どこにあられま
 すか。 マタイ2:2

● 目 標 真剣に求めるものに、神様は必ず
 ご自身を現され、価値ある生涯に
 変えられることを発見する。

導入

イエス様は、聖書の預言の通りに誕生されました。しかし、それを祝いにかけてきたのは、羊飼いと東方の博士たちだけです。博士たちは異邦人で、聖書を知らない人だったのに、救い主のもとに導かれます。今日は、どういった人が神様に導かれ、救い主を発見していくのかを学びます。

(起) ストーリーを語る

「博士」と呼ばれている人たちが、イスラエルの東にあったバビロンあたりで、天体観測をしていました。そのころ、天体に異常な現象がおきたようです。ハレー彗星が現れた時か、木星と土星が接近して強い光を放った時か、あるいは奇跡的な星か、はつきりはわからないのですが、彼らは、この現象を見て、何か特別なことが起ころうとしていると感じたのでしよう。数えきれないほどの文献を一生懸命調べて、とうとう聖書から救い主が生まれるという記事を発見したようです。

この博士たちは、まじめに「ユダヤ人の王」に

会いたいと願っていたのです。そこで彼らは、星を頼りに千キロもの長旅をしながら、やっとヘロデ王の宮殿までたどり着きました。徒歩とラクダによる旅は、決して楽ではなかったはずですが、

すると、当時のユダヤの王ヘロデは、この立派な博士たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、その方を拝みにきました」という言葉を聞いて、びっくりし、不安を感じました。というのも、ヘロデは自分の王座を奪い取られるのを恐れたからです。彼はすぐに祭司長たちと民の律法学者たちを呼び集めて、聖書を調べさせました。すると、イスラエルを治める人物がベツレヘムから出ると預言されていることがわかりました。ヘロデ王は博士たちにそのことを伝えて、「見つかったら私も拝みに行くから教えて欲しい」と、心にもない嘘をつきます。本心では、その赤ん坊を見つけて殺すつもりでした。博士たちが出発すると、東方で見た星が彼らを導いてくれました。真心から神様を求める人なら、この国の人も、神様が不思議にイエス様のところまで導いてくださるのです。

そして彼らはマリヤとヨセフと幼な子のイエス様とに会うことができました。そこで、宝物の箱をあけて、黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげて、イエス様を心から礼拝しました。そして、夢でヘロデのところに帰るなどの御告げをつけたので、ヘロデに報告せず、他の道から自分の国に帰っていきました。

(承) 学ぶべき真理

ヘロデ王の周囲には、聖書をよく知っている祭司長や律法学者がたくさんいました。彼らはすぐにでもイエス様に会えたはずなのに、イエス様に会いに行こうとしませんでした。彼らはそれぞれ自分以外の王様はいらない、自分以外の宗教家はいらないと思っていたのです。でも博士たちは、異邦人なのに救い主に出会いました。人が、自分から真剣に救いを求めるなら、ユダヤ人でなくても、どんな人でも、神様は不思議な方法で救い主にまで導いて下さるのです。

東方の博士たちは、み告けを受けて他の道を通って帰りました。イエス様に出会って信じた人たちは、今度は不思議な方法ではなく、神様の御言葉を聞いて、それに導かれるようになるのです。

(転) 生活への適用

たとえあなたがクリスチャンホームに生まれたとしても、それで救われるわけではなく、聖書をどれだけ知っていたとしても、それで救われるわけはありません。真剣に救い主を求める人と、しかたなしに教会に来ている人と、どちらが神様に導かれると思いますか。

結論

どんな人でも真剣に神様とその救いを求めるなら、神様はどのような不思議な方法を用いても救い主イエス様のところに導いて下さいます。そして、イエス様を信じて礼拝する人々の人生は、神様の御言葉に導かれ、神と人に喜ばれる道を歩むように変えられるのです。

ワーク A

● 導入のヒント

お出かけした時、迷子になったことのあるお友だちはいますか。迷子になった時は泣いてしまっしょうか。先生は、地図を見たり、人に聞いたりして、行きたい所に向かいます。今日は、星に道を教えてもらった人たちのお話です。

● ワークについて

いよいよ来週はクリスマスです。もみの木の完成も近づいています。色を塗って、先週の絵の上に貼りつけましょう。

ワーク B

● 質問1 博士たちは心からイエス様に会いたいと思って旅に出ました。不思議な導き手は「星」でした。星をも用いられる神様をほめましょう。

● 質問2 博士たちのイエス様に対する大きな愛に頭が下がります。尊い贈り物をおささげる程のイエス様であることを深く知りましょう。

● 質問3 救い主としてイエス様に会い、また毎日の生活を守って下さる方として会っています。

● 賛美歌

「こどもさんびか21番」

● 今日のお祈り 「神様、博士たちのようにイエス様のことをいつも考えますように。また、イエス様の喜ばれる道を歩かせて下さい。」

ワーク C

● 博士は異邦人でしたが、人間として、霊的に純粋で射た感覚を持っていました。真剣に「生きる」ことの意味と内容を求め、それを知るためにはどんな犠牲も惜しみませんでした。

● 一方、ヘロデ王は、この世のまった中で、自分の権力、地位にしがみついていた。

● 私たちには、ヘロデ王のような財も権力もないので、他人事のように思われるでしょうが、本質は同じであることを、3問目で探ろうとしています。

● 博士の真剣な求めを、子どもたちにも植え付けるために、具体的なひとつの行動を挙げて、決心させると良いでしょう。

ワーク D

● 質問1 新共同訳では占星術の学者という訳です。聖書の預言をよく知らない人が、心を動かされて、星を頼りに長旅をすることはよほどのことでしょう。主の招きと導きを色々考えて下さい。

● 質問2 自分に代わる王の存在でした。律法学者が、預言に基づいてメシヤの生まれる場所を発見しながら行かなかったのは、大問題です。

● 質問3 宝の箱を開けて、惜しげなくささげた無垢の信仰は真の礼拝者の姿です。

● 質問4 クリスマスだけでなく、本当の礼拝の姿勢と信仰があらためて問われます。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 東方の博士たちを救い主のもとに導いたものは何だったでしょうか。

2 東方の博士たちは、真つ直ぐに救い主のもとに行くことができたでしょうか。それとも別のところに行ってしまったでしょうか。

3 東方の博士たち、ヘロデ王、祭司長たちや律法学者たちは、それぞれどのように救い主に対応したでしょうか。

● 自分に当てはめてみよう

1 あなたが聖書知識をもっていることや、イエス様を頭で知っていること、救い主を心に迎えることは同じことでしょうか。

2 東方の博士たちは、遠い道のりを、多くの犠牲を払って救い主のもとに行きました。あなたが救い主であるイエス様のもとに来るまでに、困難なことがありましたか。

3 東方の博士たちは、様々なものをささげて、イエス様を礼拝しました。あなたは何をイエス様にささげていますか。

● 話し合ってみよう

1 東方の博士たちが違う道から帰っていったのはなぜでしょうか。

2 ヘロデ王がイエス様を殺そうとしたのはなぜだったのでしょうか。

3 現代、人々はイエス様をどのように扱っているでしょうか。

聖書 ヨハネ3・16
週 題 クリスマスの贈り物

序論

クリスマスは、神が人類に最大の贈り物をしてくださった日である。それを感謝する気持ちで、この日に世界中の人がクリスマス・プレゼントをする習慣を生み出したと言える。今年のクリスマス礼拝は、主イエスが神からの贈り物だという意味を、聖書で最も有名な聖句を通して考える。

一、人格をもつ贈り物

普通の贈り物は、「物」である。しかし、人神はそのひとり子を賜わった。物ではなく、人格をもつ「方」を贈ってくださったのだ。これら二つは、根本的に違っている。「物」は、いつかはなくなってしまうし、また他の物と取り替えが可能だ。ケーキは食べればまた買えるし、テレビゲームや人形も壊れたらまた買える。一方「方」はそうではない。例えば、母親は世界で一人しかいない。もし死んでしまったなら、代わりはない。継母ができるかもしれないが全く同じ母親ではない。「方」は、かけがえないものであり、取り換えがきかないのである。

さらに「方」とは、人格的な交わりができる。つまり、人格をもつ者どうしは意志を疎通でき、悲しみや喜びを共有し、一致することができる。神は、私たち人間と心を通わすことができる「方」を贈って下さった。私たちはこの方と会話するこ

とができ、困った事が起れば、この方に相談することができる。いつかはなくなる「物」と、必要な助けを与えてくださる「方」とどちらが大切だろうか。神はかけがいのない方を、私たちと人格的に交わらせるために贈ってくださったのだ。

二、信じて受け取る贈り物

自分と一緒にいる人が自分の親であるということとは、親が「私はあなたの親ですよ」と言う言葉といつも一緒にいてくれる愛を信じるよりほかない。血液型や遺伝子を調べても、最終的には信じる事が大切になる。人神を信じることは、神の御子イエスの語られる言葉と愛を信じて、御子を受け入れることである。主イエスは、神がどのような方かを示すために地上に誕生された。彼の言葉によって私たちは神を知り、信仰に至る。

また、もしだれかが、自分のひとり子を他人に与えるなら、それは余程その人を愛しているからにほかならない。御子イエスの降誕は、神がそれほどまでに私たち人類を愛しておられることを表している。神は、共にいて私たちを愛して下さる方である。御子の誕生によって、私たちは神の御言葉とその愛を信じる事ができる。

この贈り物は、お金で買うことはできない。親をお金で買うことができないのと同じだ。ただ信じて受け取るのみで、人間に払える代価はない。御子の価値は絶大だ。彼は、天地を造り、保ち、所有し、罪なく、全知全能で、罪人の贖いの代価となってくださった。私たちは、御子に引き換えられる物を全く持つてはいない。これは、律法を

守った、よい行ないをしたという程度の代価で支払えるものではない。ただ、神の払われた代価を感謝して受け取るのみである。

三、永遠の命を与える贈り物

クリスマスは、主イエスが贈り届けられた日である。主イエスは、どんなに罪深い人のところにも、苦しみや悲しみの中にいる人のところにも、おいでくださり、その罪、苦しみ、悲しみを一緒に味わってくださる。いや、それだけではない。それらを全部自分の身に背負ってくださり、十字架についてくださったのである。だから私たちは罪に対する刑罰を受ける必要はない。苦しみや悲しみを自分一人で味わわなくてもよい。

永遠の命とは、苦しみや悲しみを癒して下さる主と共にいることである。目に見える物に左右される地上の命とは、質的に全く違った命である。常に御子イエスと言葉をかわし、父なる神と交わりをもつ生活なのだ。人神の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわれたイエス・キリストとを知ること(17・3)なのである。

結論

宅配便さんが贈り物を届けに来たとき、受け取らないのはどんな場合だろう。贈り主を知らない場合か、贈り物が何か危険な物であるときだろう。贈り主は父なる神、贈られてきたのは御子イエスである。そして、信仰という印鑑を押すなら、この最高の贈り物を受け取ることができる。あなたもこの最高の贈り物を、今日、受け取ろう。

研究資料

(足立)

ヨハネ3・16は、全聖書中、最もよく知られているテキストである。ここには神の愛が、御子によるみわざを通して罪人に提示されている。この愛なくしてキリスト教は成り立たない。この愛は愛された者(私たち)に賞賛すべき点があるから生じたのではない。神は罪深い人間を愛されたのである。私たちは「神は愛である」(ヨハネ4・8、16)と知らされているが、そのことによって、愛は神の本質的な性質であることを確信するのである。根本的に神は愛される性質をお持ちのゆえに、罪人さえも愛されるのである。

テキスト

16 ヨハネは本福音書において初めて、愛したアガパオー」と言う動詞を使っている(ヨハネ福音書では、36回使用)。この愛は、愛される側の状態に関係ない。例外なしに自発的、自己発生的なものである。

そして神は、世を愛されたのである。世(コスモス)と言う言葉は、ヨハネ福音書に78回出てくる。そのうちの二握りの節は中立的であるが、大多数の場合、決定的に否定的な意味で用いられている。世とか、この世(例8・23、9・39、11・9、18・36)は、宇宙万地方有のことではなく、その創造者に敵対している被造の秩序のことである(例1・10、7・7、14・17、22、27、30、15・

18、19、16・8、21、33、17・6、9、14)。

したがってヨハネが、私たちに、神はこの世を愛して下さったというとき、それは世が全く逆の(愛されるべきでない)存在であり、その愛が神自身(自身の御性質を証明している)である。神の愛は、世が偉大だからではなく、徹底的に悪いからこそ、賞賛されるべきものである。

そしてこの神の愛は、そのひとり子を賜わったという事実根ざしている。これは、神が贈りものとして御子を提供されたことを強調している。ひとり子(モノゲネース)はイエスに言及すること、新約聖書に5回出てくる(ヨハネ1・14、18、3・16、18、1ヨハネ4・9)。神がひとり子を提供されたことは、予備(スベア)がなかったことを意味する。まさしく天国は空になったのである。父なる神は、唯一無類の御子を世にプレゼントして下さったのである。すなわち神は、神の最善そのものを、神に敵対する世に授けたわけである。しかもそれは、ただ単に地上に運ばれたのではなく、呪いの木に釘つけるために送られたのであった(参照3・13、15)。神の愛はいまいな感傷的な同情ではなく、犠牲を伴う愛であった。神はご自分にとって、最も貴重なお方を与え尽くされた。

続けてヨハネは、神の愛の目的を記している。それは御子信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。ここには、消極的な面と、積極的な面が表されている。新約聖書は、一貫して人間の罪に対する神の怒りと裁きを主張し

ている。私たち人間が滅びないようにと願われる神の意図の背後には、人間が神の怒りの対象であり(ローマ1・18)、罪の支払う報酬は死である(ローマ6・23)と言う前提がある。クリスチャンはクリスチャンとして生まれてこなかった。人は生まれながらにして、神の怒りを受ける存在である(エペソ2・3)。しかしあわれみ豊かな神は、その人間に永遠のいのちに至る道を開いてくださった(ローマ6・23、エペソ2・4、5)。その道とは、御子信じるという恵みによる救いである。

御子信じることは、御子を信頼することであり、受け入れることである(参照ヨハネ1・12)。キリストへの信仰は、彼を完全に信頼し、彼が主張することや、彼が告白することを、感謝を持って認めることを意味する。そして信仰者は、御子の死と復活によってのみ、滅びから救われ、永遠のいのちを持つことができる。

ヨハネ3・16は、14、15節と17節との間にはさまれている。これは、父なる神による御子の派遣が、受肉と十字架の死に結び付けられていることを示している。そして神の究極的な目的は、御子信じる世の人々の救いにある。しかしこれを拒む者は、滅びる。第三の選択は、私たち人間に与えられていない。



●週題 クリスマスの贈り物

●聖書 ヨハネ3・16

●暗唱聖句 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。ヨハネ3・16

●目標 イエス様という、罪を赦す無限の代価を受け取ると、永遠の命を持つてゐることを発見する。

導入

クリスマスおめでとございます。今日は、待ちに待ったクリスマス礼拝ですね。すでに皆さんも、プレゼントをしたり、もらったりしたかもしれません。この習慣は、クリスマスに神様から人類に最大のプレゼントが贈られたことから、世界中に広がったのです。では、神様のプレゼントって、いったい何だったのでしょうか。

一、ひとり子を与えるほど愛された

皆さんは、今年のクリスマスプレゼントは何が欲しいと思っていますか。おもちゃですか。テレビゲームですか。動物好きな人は、ハムスターのような生き物をもらうかもしれません。プレゼントはたいがい品物です。しかし神様のプレゼントは、品物ではありません。お店にも売っていませんし、お金では買えません。本当に大切なものって、お金では買えないんです。

神様にとって、なにより大切なものは、神様のひとり子のイエス様です。神様はそのひとり子のイエス様を人類にプレゼントされたのです。皆さんは、もう二度と手に入らない大切な宝物を、だれかにあげることができませんか。もし、あげるとしたら、その人を本当に大切に思っているに違いありません。神様が大切なひとり子のイエス様をこの世に与えられたのは、神様がそれほどまでに私たちが愛しておられるということなのです。

二、責任者でなければならぬ

ではなぜ、神様のプレゼントは、ひとり子でなければならなかったのでしょうか。イエス様は、天地を造られた方であり、天地を所有しておられる方であり、天地を保っておられる方です。神様はこのイエス様を、アブラハムがイサクをモリヤの山で捧げようとした時、イサクの代わりに羊を贈られたように、人類に贈られたのです。

イエス様は、人類の罪を十字架で身代わりに負うため、神の小羊として神様から贈られました。人類の罪の身代わりとなるのは、人類を造り、保ち、所有している責任者だけです。たとえば、あなたがだれかとケンカしてケガをさせてしまったとしましょう。赦してもらうには、あやまるだけでなく、そのケガの治療費を払わないといけません。しかし、何万円もかかりますから、自分では払えません。そうしたら、だれが払わないといけません。隣のおじさんや学校の先生ではだめです。そう、お父さんやお母さんが払わないといけません。あなたの保護者、あなたの責任者でなければならぬ。

者でないと弁償はできません。同じように、人類の保護者、責任者であるイエス様しか、人類の罪の身代わりにならないのです。

三、絶大な価値でなければならぬ

そしてこの代価には絶大な価値があります。天地を造られた方、天地を所有しておられる方、天地を保っておられる方が、罪の身代わりとして十字架につき、代価を払われました。その価値は無限です。無限の代価ですから、イエス様に支払えない罪の弁償はないのです。どんな罪を犯した人でも決して滅びないように、神様はそのひとり子をプレゼントしてくださいました。

また同時に、イエス様に支払えない人数はありません。全ての人がひとりも滅びないように、無限の代価が支払われたのです。

結論

ある日、知らない人からプレゼントが届いて、中からコチコチという音がしていらどうしますか。受け取って爆発したのでは、大変ですね。贈り主がだれかも、贈ってきた物が何かもわからないなら受け取れません。しかし、神様のプレゼントは、送り主は父なる神、贈られてきたのはひとり子のイエス様です。送り主も贈られてきたものもわかっています。あとは、あなたが受け取ればいいのです。信仰とは、神様から贈られてくるものを受け取ることです。神様がくださるものは必ず一番よいものだと思える人は、それを受け取れます。イエス様という、罪を赦す無限の代価を受け取って、永遠の命をいただきます。

ワーク A

●導入のヒント

クリスマスにはサンタさんからプレゼントをもらいますか。人からプレゼントをもらうことはうれしいよね。プレゼントなんかいらないって言うお友だちはいますか。みんな「ありがとう」って受け取るよね。じゃあ、神様が皆にプレゼントをくれるとしたらどうするかな。

●ワークについて

神様からのプレゼントのなかみは何でしょう。神様が私たちに送ってくださったイエス様の絵を自由に書いて下さい。子どもたちの考えるイエス様は、どのような姿でしょうか。星にも色をつけて、ツリーを完成させて下さい。

ワーク B

●質問1 21世紀最初のクリスマスです。こんなに長い間、祝われてきたのに、まるで初めてのよう嬉しいのは、やはり、イエス様は神様からの最高の贈り物だからですね。

●質問2 命を与えても惜しくない「ひとり子」。自分の言葉で考え、書きましょう。

●質問4 イエス様を信じる人はみな頂けます。

●賛美歌 「小さいベツレヘム」

(日本ホーリネス教団子どもさんびか33番)

●今日のお祈り 「神様、クリスマスの最高のプレゼント、イエス様をありがとうございます。永遠の命を心から感謝します。」

ワーク C

●初めての横書きタイプです。これは、見ておわりのとおり、「ゆっバック」の宛名書き用紙をモデルにしています。

●今年のクリスマス礼拝の日「12月23日」が配達指定日です。

●あて先は6人の子みんなです。

●自分の名前と信仰の印鑑を押して、プレゼントである「イエス様」を受け取れることを表明する、ということになります。

ワーク D

●質問1 御子イエス・キリストを賜われるほど、世（人）を罪と滅びから救いたいのが神様の愛です。

●質問2 御子の御言葉を信じて十字架の救いを受け入れましょう。

●質問3 罪の身代わりの十字架により、私たちは義とされ、神様と共にあるものとされました。

●質問4 救い主を本当に信じて受け入れることなしにクリスマスの喜びを祝うことはできません。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 イエス様は神様からのプレゼントです。しかし、このプレゼントの価値は、お金で計ることができるでしょうか。

2 どうしたら、この神様からのプレゼントを受け取ることができるでしょうか。

3 神様が私たちにプレゼントを下さるのであれば、神様は私たちをどのように思っておられるのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 あなたは、神様からのプレゼントであるイエス様を、物として扱っていますか、それとも人格的な方として関わっていますか。

2 あなたが、他の人からプレゼントを受け取らないのは、どんな場合ですか。逆に受け取るべきはどんな場合ですか。

3 あなたは神様からイエス・キリストという方をプレゼントとして受け取っていますか。それとも受け取っていませんか。

4 御言葉に「この世を愛してくださった」と書かれています。この世という言葉の代わりに、自分の名前を入れてみましょう。

5 「ひとりも滅びないで」とも書かれています。滅びるとはどういうことでしょうか。

6 私たちの罪の贖いのために代価が必要であるなら、私たちは、その代価を払うことができるでしょうか。

聖書
マルコ2・15-12
週題
罪を赦された人

序論

今週から6週間、マルコ福音書から「イエスに出会った人々」を学ぶ。この人々は、それぞれ違った問題をもちながら、主イエスと出会うことによって、その問題が解決されていった。彼らが主イエスと出会う姿から子どもたちに主を紹介し、子どもたちが主と出会う助けをしたい。最初は、中風を癒された人から、彼と彼の四人の友の信仰と、主イエスのみわざを見ていこう。

一、信仰を見られる主イエス

マルコはすでに1章で、主が多くの人々の病を癒されたことを記している。そのうわさを聞き、たくさんの病人が主のもとに集まってきた。この日も、そのような人々で、主のおられた家は立錫の余地もないほどであった。イザヤは、メシヤがおいでになる時、罪人が解放されるだけでなく、目や耳や体の不自由な者が癒されることを預言している（35:5、61:1等）。主は、罪も病も、どちらの問題も解決される方なのだ。

そこに、4人の人々が中國の人を床に乗せて運んできた。しかし玄関から入れないので、簡単な構造だった屋根に穴をあけ、床ごと中國の人を吊り下ろしたのである。こんなむちゃなことをしたのは、この病人と彼を運んできた人々が、主に癒す力があることを信じ、こんなむちゃをしても追

研究資料

(足立)

ここまでマルコは私たちにイエスを紹介し、イエスの伝道の実例を提供し、イエスの教えの効果を示してきた（1・21〜22、27）。そして悪霊を追い払う力あるみわざ（1・23〜28、34）と、癒しのみわざ（1・29〜34、40〜45）を伝えている。そしてここ2章で私たちは、さらにイエスの奇跡を伴う伝道や教えを一瞥することができる。しかし2・1〜3・6を事実に基づく一つの構成として考えることが大切である。というのは一連の出来事はイエスと様々な批判者との間にある論争を含んでいるからである。マルコ1章における出来事は、イエスの評判が大きくなってきたことを示している（1・28、32〜34、37〜39、45）。2・1〜3・6の内容は、イエスが敵対者たちに直面していることを提示している。そしてその頂点は、イエス殺害計画に至る（3・6）。2・1〜12でも、律法学者たちの批判に答えるかたちで、癒しと罪の赦しという大きな問題が取り扱われている。

デキスト

1 イエスはガリラヤ伝道の基点としてカペナウムに滞在していたようである。家におられるとは居住地のことで、おそらくシモン・ペテロとアンデシの家であつたであらう（イ・29）。

2 たいていのパレスチナの家は、一つから四つの部屋と中庭一つで構成されていた。多くの民衆

い返さずに癒してくださいと、主の人格を信じていたからである。主は△彼らの信仰を見て▽、この中風の人に、△子よ、あなたの罪は赦された▽と宣言された。彼らの信仰が癒しよりも罪の赦しにふさわしかったからである。信仰とは、△神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さること▽（ヘブル11・6）を信じることである。彼らは、イエスが救い主（メシヤ）であり、報いてくださる方であると信じていた。

二、心の中を見られる主イエス

ところがその場に幾人かの律法学者がいた。彼らは主の言葉を聞いて、心の中で、△この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか▽と考えていた。主は、それをちゃんと見抜いておられた。主が、△なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか▽と言われたとき、彼らは主が人の心の中を見られる方、つまり神であると悟るべきだった。そうすれば、△あなたの罪はゆるされた▽と仰せられたわけも理解できただろう。心の中を見られる主だから、中風のひと4人の友の信仰を見て、罪の赦しを受けるにふさわしいからこそ、それを宣言されたのだ。それなのに、おそらく律法学者たちは、罪の赦しは目に見えないから、□先だけでいくらでも言えるが、病の癒しは目に見えるから、□先だけではすまない」と邪推したのである。

二、罪を赦す主イエス

主は、そのような愚かな律法学者の目が開かれ

がイエスの噂を聞きつけて、その家はいっぱいになっていった。イエスが彼らに語っていたのは御言（トン・ロゴン）であった。このことは、多分14と15で表現されているメッセージを意味する。すなわち「神の国の福音」である。

3 この病は、その男が歩行不可能という麻痺状態だった。それ以上の説明はされていない。

4 当時のパレスチナの家には外に階段がついていて、容易に屋上に上ることができた。洗濯物を干したり、道具をしまったりする屋上は、祈りや瞑想の場としても用いられた。藁や粘土で作られた屋根に穴をあけることは、そう難しいことではなかった。

5 彼らの信仰への言及は重要である。マルコはしばしば、奇跡と信仰を結び付けている（5・34、9・23、10・52）。彼らとは、中風の人を連れてきた4人の友人たちのことであろうが、中風の人自身も入っている可能性を否定できない。ここでの信仰とは、イエスのもとに行つたことを意味する。子よ、あなたの罪はゆるされたは、人間の本質の問題に対する答えとイエス自身の中心的働きを宣言した内容である。罪（ハマルティアイ）は複数形なので、「あなたのものもの罪」である。神の前に問われているのは、人の病ではなく罪である。そして罪の問題に完全な赦しを与えられるのは、イエスご自身なのである。

6 律法学者（グラマンテュース）とは、コダヤ教の律法を専門に研究し、その解釈を民衆に教える教師のこと。マルコ福音書には、22回出てくる。

るように、△あなたの罪はゆるされた、と言つのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言つのと、どちらがたやすいか▽と尋ねられた。全能の神である主イエスである。中風の人を癒すのはたやすいことだった。しかしあえて△あなたの罪は赦された▽と宣言されたのは、神の第一の御旨は、人々の罪を赦すことだからである。病の癒しは、それを証しするための二次的なみわざなのだ。そこで、△人の子は地上で罪を赦す権威をもっていること▽を、律法学者に悟らせるために、主は目に見えぬしるしを提示された。△あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ▽と仰せられると、中風の人はずぐ元氣になり、みんなの前から出ていった。

癒しは、主が全能者だから当然できる。でも罪の赦しのためには、神である方が人になられ、十字架で罪を贖うという犠牲が必要だった。罪の赦しは簡単ではない。神の甚大な犠牲のゆえになされるのである。主は、その犠牲を払われたからこそ、罪を赦す権威をもっておられるのだ。

結論

人の心をこ存じの主は、彼らの信仰を見てゐたあなたの罪は赦された✓と宣言され、信仰のない人々に、主が罪を赦す権威を持っている事を悟らせるために病を癒された。神様の第一の御旨は、信仰によって罪が赦されることである。そのために神は人となられ、十字架にまでつかれたのだ。主イエスこそ、罪を赦す権威を持つ方である。あなたもこの方を信じて、罪を赦されてほしい。

7 神をけがすとは、神に対する不敬虔で野卑かつ不遜な発言を指す。そしてその処罰は、旧約時代においては死であつた（レビ24・16）。この場面はイエスの苦難における同じ告発に道を備えている（マルコ14・60〜64）。律法学者が心の中で言った理屈は確かに正しい。イエスもこれを否定はしない。しかし彼らは、イエスの中に神の支配が引き起こされていることを認識できていない。イエスは神のために行動する権威を持っている。

8 自分の心ですぐ見ぬいてとは、イエス自身が持っておられる超自然的な知識であろう。

9 皮肉にも律法学者たちは、肉体の癒しよりも罪の赦しを宣言するほうが容易であると考えていたようである。なぜならば罪の赦しは実証できないが、肉体の癒しは実証できるからである。しかしながらイエスにとっては、罪の赦しも肉体の癒しも同様に神のみわざである。

10 ここで最初の人の子という表現が用いられる（マルコ福音書では14回）。これはマルコで最も多く登場するキリスト論的称号である。福音書では、常にイエスの自己称号として用いられている。旧約聖書においては普通、単に人、人間の存在を意味する（詩篇8・4、144・3、145・12）。エゼキエル書では預言者を指す（2・1、3、6、8等）。マルコにおける「人の子」の章節はイエスの權威に關して分ける事が可能である。地上の伝道（2・10、28）。苦難、死、復活（8・31、9・9、31、10・33、34、45、14・21〔2回〕、41）。栄光の再臨（8・38、13・26、14・62）。

●週題 罪を赦された人
●聖書 マルコ2:1-12
●暗唱聖句 子よ、あなたの罪はゆるされた。
マルコ2:5
●目標 イエス様が罪を赦す権威を持たれていることを発見する。

導入

先週はクリスマス礼拝で、今日は今年最後の礼拝になります。そして今週からは、イエス様に出会った人たちの学びです。イエス様に出会うと、その人物がどのように変えられていくかを知り、私たちも同じ信仰の体験をしましょう。

(起) ストーリーを語る

イエス様は町や村を巡りながら、多くの人々の病気を治しておられたので、カペナウムの町に帰ってこられたときは、もうすでにだれも知らない人がないほど評判になっていました。イエス様がある家でお話をなさっているのを知った人々は、どんどんその家に集まって来ました。そして、すきまもないくらいに人で一杯になって、とうとう入口にまで人があふれてしまいました。
そこに4人の人が、寝床の4すみを持って、中風で寝たきりの病人を連れてきたのです。しかし家には人が一杯だったので、入口からは入れません。このまま帰ったのでは、せっかくここまで運んできたことが、無駄になってしまいます。なんとかならないものかと見回していると、よい考え

がわいてきました。入口が無理なら屋根に上り、そこから寝床ごと吊り降ろそうというのです。当時の家は、簡単な造りで屋根は平らでした。その屋根も木や草と泥で簡単に作られていたの、穴をあけるのに時間はかかりません。しかし、家の中にいた人たちは、驚いたことでしょう。突然屋根の上からバキバキ音がしたかと思うと、土とほりりが落ちてきて、ポツカリ大きな穴があき、病人が吊り降ろされてくるのです。

この騒ぎの中で、イエス様は、中風の人とその4人の友の信仰を見ておられました。イエス様なら必ず治して下さると彼らは信じて行動したので、そこでイエス様は中風の人に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われました。彼らの信仰が、罪の赦しにふさわしかったからです。

その場に座っていた何人かの律法学者たちは、イエス様のこの言葉を聞くと、「この人はなぜあんなことを言うのか。神様をけがしている。神様のほかに、だれが罪をゆるすことができるか」と心の中でつぶやきました。口先だけで罪が赦されたというのはたやすいが、病は目に見えるから癒せないのだからと邪推したのです。しかしイエス様は彼らの思いをすぐ見抜かれました。そこで中風の人に、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われました。すると彼はすぐに起き上がり、床を取り上げてみんなの前を出て行きました。イエス様は、「ご自分に罪を赦す権威があることを律法学者にもわからせるために、目の前で中風の人を癒され、それによって罪の赦しが事実であることを示されたのです。イエス様は、

十字架にかかることによって人類の罪の身代わりとなるために地上にいられたのですから、罪を赦す権威をお持ちなのです。

(承) 学ぶべき真理

イエス様は、人の信仰を見抜かれ、人の心の中で思ったことも見抜かれます。中風の人とその4人の友は、イエス様が病を癒す力をお持ちだと信じていました。また、屋根をはいで病人を降ろしても受け入れて下さるイエス様のご人格を信じていました。この信仰が、罪の赦しにふさわしい信仰です。信仰とは、神のいますことと、信じる者に報いてくださることを信じることだからです。イエス様が人類に一番してあげたいことは、罪の赦しです。病の癒しは、もちろんできますが、罪の赦しは、ご自分が十字架につくことによって初めてできることで、簡単ではないのです。

(転) 生活への適用

中風の人とその友の信仰は、癒しよりも貴いものをもたらしました。ではあなたなら、病気の友だちがいたら、その人に何をしてあげますか。

結論

イエス様は、何とかして人を支配する罪や病から人類を解放したいのです。イエス様は十字架にかかって人類の罪の身代わりになられるから、罪を赦す権威をお持ちです。このイエス様の力とそ

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 カペナウムの家におられたイエス様のもとに集まった多くの人は、どのような人々だったでしょうか。
- 2 4人の人が中風の人をイエス様のもとに運んできましたが、大勢の人々に囲まれているイエス様のもとに近寄ることができませんでした。このとき、4人の人はどうしましたか。
- 3 4人の人と中風の方は、イエス様が病気を癒してくださると信じていたでしょうか。
- 自分に当てはめてみよう
- 1 あなた自身の中には、病気や苦しいこと、悲しいことがあったとき、イエス様のもとに行って祈ろうという気持ちがありますか。
- 2 あなたは、この4人の人たちや中風の人のように、自分の罪と病いを、イエス様は赦し、癒してくださると信じているでしょうか。
- 3 あなたのまわりに、病気の人や、罪の呵責に悩んでいる人がいたら、その人々のためにイエス様に祈ったことがありますか。
- 話し合ってみよう
- 1 罪を赦す権威と、病気を癒す権威はだれがもっているのでしょうか。
- 2 私たちの罪が赦されるために、イエス様は何をしてくださったでしょうか。
- 3 イエス様が、4人の人に運ばれてきた中風の人を癒された理由は何だったでしょうか。

ワーク A

●暗唱聖句 (12月30日〜2月3日)
恐れることはない。ただ信じなさい。

(マルコ5・36)

●導入のヒント

みんなが病気になる時、心配してくれる友だちはいいますか。また、病気の友だちに、何をしてあげますか。何ができるでしょうか。

●ワークについて

今日の聖書の場面を描きました。その絵に関する質問をしてみましょう。例えば、「イエス様はどこにいますか」「4人の人に連れられている中風の人はどこにいますか」などのように。また、色を塗ってから質問をしても良いでしょう。

ワーク B

- 質問1 中風の人がどのようにして運ばれて来たのか、友人の信仰と愛を思いめぐらします。
- 質問2 奇抜な考えですが「屋根をはぐ」ことはイスラエルの建物ではできません。しかしそれは、「信仰」がなくてはできません。
- 質問3 主イエス様は先ず「罪を赦す」ことをされました。「病気の癒し」よりも尊いことだからです。罪の赦しは神様だけの権威です。
- 賛美歌 「イエスさまのすくい」
- 今日のお祈り 「罪を赦す力があるイエス様

ワーク C

は、私の罪も赦して下さいることを感謝します。私にもあの友だちのような信仰をもたせて下さい。」

●「罪を赦す」と口で言うのは容易ですが、実際に赦す権威がなくては意味がありません。

●同じ罪人である人間や、ものを言えない偶像の地蔵や仏像は、罪を赦す権威も力もありません。

●神様であるイエス様、罪のないイエス様だけが、赦しの権威を持つておられます。イエス様は、十字架で自ら死ぬことによって、罪の赦しを実現して下さいました。

ワーク D

- 質問1 立錫の余地もない状況でもくじけず、何としても主イエスに癒されたいと真実に求める信仰。屋根をはぐことが可能な家の構造とはいえず、そこまでする思いについて考えて下さい。
- 質問2 心を見透かされたにもかかわらず、主イエスを肯定しないかたくなな心です。
- 質問3 主が罪を赦す権威を持たれるのは、十字架による贖い主だからです。十字架の救いの事実確認を。
- 質問4 穴を空けるほどの信仰をもって、自分や家族や友人の救いを求めているでしょうか。

聖書 マルコ5・1～20
週 題 主のあわれみとみわざ

序論

悪霊は、決して想像上の産物ではない。「人間や社会に影響力のある『使たち』を連れた人格的な悪魔の存在は、疑いの余地がない」(『ウエスレアン神学事典』)。しかし、どんな悪霊も主イエスの権威に従う。今日は、主が悪霊を追い出されたことから、主のあわれみと主のみわざを学ぶ。

一、主のあわれみ

主イエスは、カペナウムからガリラヤ湖を渡ってゲラサ人の地に着かれた。そこで、悪霊につかれた人から悪霊を追い出すこと、ただこの一つだけなされた。この人を、現在言うところの「精神病者」と同一視してはならない。彼は悪霊に支配されていたゆえに、自分で自分をコントロールできないでいた。それは、どんな人も入鎖をもつていても、彼を押えつけることができなかった。ほどであった。彼は他人を傷つけるだけでなく、自分のからだを傷つけていた。そして、他の人々と一緒に住むことができず、横穴式になっていた当時の墓場で雨露をしのいでいた。この時の彼は、だれも救い出すことができない絶望的な状態にあった。並行箇所のマタイ8・28には八ふたりの者ゝとあるので、夫婦そろって、そういう悲惨な状態にあったのかもしれない。

主イエスは、あわれみ深い方である。悪霊につ

かれた人は異邦人であるにもかかわらず、また自分から求めたのではないにもかかわらず、主は自ら出向かれた。主は、彼のためにわざをこの地に來られたのだ。主は、求める者に應えてくださるだけでなく、自分ではどうすることもできない状態に絶望している者に自ら出向き、その問題を解決してくださる、あわれみ深い方なのだ。

二、主のみわざ

この人は、主が來られたとき、遠くから走り寄り、高いと高き神の子イエスよと叫んだ。ここから、彼が精神的な病ではなかったことがはっきりわかる。直前の4章41節では、弟子たちが入った、この方はだれだろうといふかっていたのに、悪霊は主がどういう方を知っていた。

主はこの人に、入がれた霊よ、この人から出て行けと命じられた。主は、悪霊の名前を確かめられた後、悪霊が望むので、その近くにいた豚の群にはいりこむのをお許しになった。すると豚は、なだれを打ってガリラヤ湖に駆け下り、おぼれ死んでしまった。主にとっては、一人の人が悪霊から解放されることのほうが、二千匹の豚よりもずっと価値のあることであった。しかし、豚飼いたちははじめその地方の人々は、全く逆に考え、この地方から出て行ていただきたいと主に頼んだのである。

主は、自分ではどうすることもできない人々を救い出される。この人は、軍隊ほど大勢の悪霊に強く支配され、自分でもどうすることもできず、人々も手の施しようがなかった。しかし主は、人

を支配する罪と死、病や悪霊からも解放して下さる。主はどんな支配からも解放なさる方だ。

三、人々に知らせる

悪霊につかれていた人は、全く新しくなっている自分に気がついた。そして、自分をこのようにしてくださった方のお供をしたいと願いだした。彼の願いは無理からぬことであろう。しかし、主はあえてそれをお許しにならず、あなた家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさいと命じられた。彼がすぐに主に従っていることから、彼が、悪霊の支配から脱して、主イエスの支配のもとに移されたことが明確にわかる。彼が経験したことは、まさに大きなことだった。しかし、彼の使命は弟子になつて主とともに旅をすることではなかった。「主はあわれみ深く、大きなわざをしてくださった」と証しすることが、あわれみを受け、みわざを体験した者の使命なのである。

結論

メシヤは罪を赦し、病を癒し、さらに入捕われ人に放免を告げられる方である(イザヤ61・1)。現代にも、何かに支配されて自分でも他の人でもどうすることもできない場合がある。それは絶望的な状況である。しかし主はあわれみ深い。絶望的な状態にある者に、自ら近付いて下さる。そして、人を支配する罪、病、悪霊、情と欲、肉の思い、そして死からも解放してくださる。私たちもそのことを体験し、証したい。

研究資料

(足立)

この出来事は、4・35～5・43に描かれる4つの奇跡の第2番目に位置し、主題としては直前の第1の奇跡と関係がある。4・35～41において、イエスは荒れ狂う嵐の海で立ち往生する弟子を奇跡的に救い、権威を持って波を静めた。5・1～20では、豚の群れを海に追いやることで、けがれた霊たちを追い払った。二つの出来事とも、イエスのすさまじい力を際立たせている。特にゲラサの地でのみわざは、一人の魂が救われるために悪霊と対決される神の子イエスの姿を表している。

テキスト

1 海の向こう岸とは、東岸を意味する。ここはデカポリスの町(20節)で、ギリシャ文化の影響が強く、異邦人が住む異教世界である。また、ユダヤ人が不浄の動物と考えた豚の群(11節)が飼われていた(参照レビ11・7～8)。

2 イエスが到着するとすぐに、けがれた霊につかれた人が登場している。この男は遠方からイエスを見ていたのであろう(6節)。イエスが出航したのが夕方(4・35)であったことを考えると、この時はさらに暗くなっていたと思われる。

3～5 彼は墓場をすみかとしていた。パレスチナでは、人々は自然の洞窟や石灰岩を切り取った墓に埋葬された。これらの場所は、そこに住むことを願う者に良き避難所となった。けがれた霊は人間よりはるかに強い力を持っており、この男に

自暴自虐の日々を送らせていた。これらの節は、悪霊による人格破壊と社会からの追放、そして彼が受けた残酷な取り扱いを強調している。

6 走り寄って拝しとあるが、これは礼拝ではない。この男がイエスの前にひざまずいた描写であり、一つの敬意の行為であった。悪霊は、イエスが自分に直面でき、自分よりもはるかに優れた方であることを自覚している。

7～8 悪霊は大声で叫び、イエスに呼びかけている。悪霊は自分がだれの前に出ているかを自覚していた。あなたはわたしとなんの係わりがあるのですとは、私たちはどんな共通点を持っているのか、という意味である。いと高き神の子とは、悪霊がイエスの神性を見抜いていることを示している。しかし悪霊がイエスの称号を語っても、彼の信仰を告白したのではない(参照1・24)。

9 イエスは悪霊の名を尋ねている。レギオンという名の意味は明確ではないが、おそらく古代ローマの軍隊(6千人以上)を意味し、この男が数多くの悪霊に取り付かれていたことを示しているのである。イエスが名を尋ねたのは、悪霊とは別に、この男にアイデンティティーを確立させようとしたのかもしれない。

10 悪霊たちの申し立ては、特別な場所での広範囲に及び彼らの結びつきを示している。この時点で、彼らは自分たちの敗北を認め、新しいすみか

を得るためにもがいている(12節)。

11～13 豚の群がデカポリスにいたことは、驚くことではない。ここは異邦人の地。豚たちがなだれを打って駆け下ったことは、豚たちの中に悪霊が入ったことを意味する。その結果、この男の代わりに豚二千頭が死んだ。イエスは豚二千頭よりも、一人の人間を大切にされた。

14～15 この出来事によって、人々は奇跡を目撃した。しかし彼らはだれも自分たちの目を信じていることができなかった。すなわち、以前鎖を用いても抑えることができなかった男が、正気になっていることを、イエスにある真の人間回復の提示。

16～17 この出来事を目撃した者たちがその男と豚のことを報告した時、人々はイエスにこの地方から退去するよう願った。彼らの中に、物質的損失に伴う恐れが生じたからであろう。

18～19 イエスは舟(2節)に乗って湖の東岸を離れようとした。そのとき、イエスに癒された男が、同伴を申し出た。お供をしたいとは、一緒にいたいという意味である。イエスに救われた者が常に主と共にいたいと願うのは、ごく自然なことであろう。しかしイエスは彼に、自分の家に帰り、彼を見捨てた家族に主のあわれみのみわざを伝達するように命じた。

20 本福音書で、イエスは癒しや悪霊追い出しの後沈黙を守ることを要求されている(例1・44、5・43、7・36、8・26)。しかしここでは宣教を許された。この異教の地では間違ったメシヤ熱が起こることはない判断されたのであろう。

●週題 主のあわれみとみわざ

●聖書 マルコ5・1～20

●暗唱箇所 主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、それを知らせなさい。 マルコ5・19

●目標 主のあわれみとそのみわざがどんなに大きいかを発見する。

導入

明けましておめでとうございます。この一年も御言葉を一緒に学びましょう。今日は、主の大きなあわれみと大きなみわざを学びます。

(起) ストーリーを語る

イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖のカペナウムから舟で、向こう岸のゲラサ人の地に向かわれました。彼らが到着して、イエス様が舟から上がられるとすぐに、悪霊につかれた男の人が出てきました。この人は悪霊のせいで、自分で自分のことをコントロールできなくなっていました。そして洞穴でできていた当時の墓に住んで、昼も夜も絶え間なく墓場のまわりや山の上で叫んだり、自分のからだを石で打って血を流したりするのです。鎖につないでもそれを引きちぎり、また足かせをはめても、砕いてしまうような人でした。

この人のところに、イエス様の方からわざわざ出向いて来られたのです。彼は、イエス様がまだ遠くにおられるのを見つけて走りより、ひざまずいて大声で叫びました。「いと高き神の子イエスよ、

わたしを苦しめないでください。彼がこう叫んだのは、イエス様がこの人に向かって、「けがれた霊よ。この人から出て行け」と言われたからです。

そして、イエス様が彼に名前を尋ねられると、「レギオンと言います」と答えました。これは軍隊のように大勢の群れになっているという意味です。そして悪霊は、自分たちをこの土地から追い出さないでほしいと願い、そこにいた二千匹の豚の中に送ってほしいと言いました。イエス様がそれを許されたので悪霊が豚に入ると、その豚たちは突然崖から湖に向かって駆け降り、おぼれ死んでしまいました。そして、悪霊が出て行ってしまった男の人は、正気にもどりました。

豚飼いたちはこれに驚き、町や村に走って行って人々に知らせました。それで、人々が様子を見てやって来ると、以前には悪霊につかれて手に負えなかったあの男の人が、服をちゃんと着て正気になって座っていました。人々は、これまでどんなに縛っても暴れ回っていた男であることがわかり、恐れを感じました。出来事の一部始終を見ていた人たちが、悪霊につかれていた人の身の上に起こったことと、豚が海に落ちてみんな死んでしまったことなど全部を話すと、人々は、イエス様にこの地から出て行ってほしいと頼んだのです。

正気に返った人は、心の底からイエス様に感謝して、イエス様のお供をしたいと申し出ました。しかしイエス様はそれを許さず、彼の家族のもとに帰って、神様がどんなに大きなことをして下さったか、どんなにあわれんで下さったかを知らせるように言われました。

(承) 学ぶべき真理

この出来事の中に、主の大きなあわれみとみわざが表れているでしょう。それはまずイエス様が自分から近づいて助けて下さったことです。求めてくる者を救うだけでなく、自分からは求めることができない絶望的な状況の人には、イエス様の方から近づいて下さるのです。私たちにも、自分ではどうすることもできない問題があります。回りの人も手出しができず、問題が解決しないばかりかどんどん悪くなっていくのです。イエス様は、そんな絶望的な状況の人に、自ら近づいて問題を解決してくださる、あわれみ深い方です。

またそれは、自分ではできない大きなみわざです。軍隊ほど多くの悪霊が支配してしようと、また罪や死や病が支配してしようと、イエス様はどのような支配から解放放つてくださる、大きなみわざをなさる方なのです。

(転) 生活への適用

あなたには、人が手出しできないような問題はありませんか。自分でも解決できず、どうすることもできない問題はありませんか。そんな問題も、イエス様には解決ができます。

結論

イエス様は、自分から救いを求めてこれないような絶望的な状況にある人も、ご自分の方から近づいて救い出して下さいます。また、どんなに強く人を支配しているものからも解放して下さる偉大な方なのです。

ワーク A

●導入のヒント

同じクラスに、いつも一人ぼっちでいるお友だちはいませんか。いるとしたら、あなたはそのお友だちと仲良くしてあげることが出来ますか。仲良くなるためには、どうしたら良いですか。そのお友だちに声をかけてあげることが出来ますか。

●ワークについて

絵本を作ります。まずみんなで絵に色をつけましょう。その後、ワークに書いてある作り方を見て、完成して下さい。

ワーク B

●質問1 悪霊につかれた人を心から愛し、出向いて下さった主、全知の主を深く知りましょう。

●質問2 癒されたその人の気持ちを考えましょう。どんなに嬉しかったことでしょう。主は、それを身近な人に証しするよう勧められました。私たち主のみわざを伝える者となりましょう。

●質問3 私たちの生活の中でイエス様がして下さったことを思い起します。必ずあるはずです。

●賛美歌 「すばらしい主」

(ふくいん子どもさんびか3番)

●今日のお祈り 「イエス様がいつもすばらしいことをして下さいることを感謝します。そのことを他の人にお伝えできるよう、助けて下さい。」

ワーク C

●この場面で、イエス様がなされた具体的なみわざは、悪霊を追い出したことです。しかし、悪霊の存在やその性質についてではなく、この悪霊の追い出しのみわざの中に現れている「主のあわれみ」を学ぶことが、中心になります。

●悪霊に取りつかれて、他の人はもちろん、自分でもどうしようもなかった、その状態が、「もうだめだ」という言葉で示されています。「もうだめだ」と思ったことはないですか。話しかけ、「そんな時こそイエス様が近づいて、助けて下さるんだ」と、「主のあわれみとみわざ」があることを示しましょう。

ワーク D

●質問1 霊に支配され、自分では何もできないこの人を救うため、主は霊を追い出されました。求めることさえできない孤独な者を顧みて下さる主のあわれみを感じたのではないのでしょうか。

●質問2 霊が移った豚が死んだ姿を見て、危うかった自分が救われたことを実感したと思われま。救い出された人の気持ちを自由に考えて下さい。

●質問3 主の深い愛のわざを体験し、感激した人は、主に仕えたいと願います。主は、その人の体験が最も生かされる仕え方を示されました。

●質問4 たとい小さなことでも、主がして下さいることを発見しましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 ゲラサ人の地でけがれた霊につかれた人は、自分を自制することができないで、どんなことをしていたでしょうか。

2 このけがれた霊につかれた人は、イエス様をどのような方だと思っていたのでしょうか。

3 イエスさまは、このけがれた霊にとりつかれている人を癒されました。どのような方法で癒されたのでしょうか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなた自身、このゲラサ人のように、自分を制することができなくて、切れてしまったことはありませんでしたか。

2 あなたは、自分自身を傷つけること、たとえば、自殺を考えたり、自分なんて駄目な人間だと考えたりしたことはありませんか。

3 自分の力ではどうすることもできない事柄で悩んだりしたことはありませんか。それをイエス様にゆだねていますか。

●話し合ってみよう

1 けがれた霊につかれた人の姿から、悪魔が人間をどんな状態にするかを話してみよう。

2 一人の人が救われるために、豚2千匹が死んでしまったことを、あなたはどのように思いますか。

3 ゲラサの人々は、豚2千匹と、一人の人を救ったイエス様と、どちらが大切だと思ったでしょうか。あなたは、どちらが大切ですか。

聖書 マルコ5・21、24、35、43
週 題 ただ信じていなさい(会堂司ヤイロ)

序論

主イエスは、罪を赦し、病を癒し、悪霊を追い出される方だった。さらに今日の箇所、最も絶望的な死からも人を救い出されている。

一、手を置かないと癒せない

ヤイロという名の会堂司(会堂を管理する人)がいた。彼には、重い病気で死にかかっている娘がいた。彼は、主が多くの病人を癒されたことを聞いて、自分の娘も癒していただけると信じ、へおいでになって、手をおいてやってくださいと、主の前にひれ伏して願った。先々週に学んだ中風の者と彼を運んできた4人の人と同じく、彼には主に対する信仰があった。

マタイ8章には、ローマの百卒長の信仰が描かれている。彼にも病気のしもべがいたが、彼は主に来てもらおうとはせず、へお言葉を下さいと言っただけだった。ヤイロの信仰は、この百卒長ほどではなかった。彼は主が手を置いて祈ってくだされば癒されると思っていたが、どこにいてもただお言葉だけで癒す権威があるとは思っていなかったのである。

主の働き方を限定してはならない。「私の計画がこうだから、この計画どおり祝して下さい」「私の方法はこうだから、この方法で祝して下さい」と願うのは、主をしもべ扱いすることだ。

主の計画、主の方法を聞いて、「お言葉どおりこの身になりますように」と願うのが信仰である。

二、死には勝てない

主は、彼の願いに答えて一緒に出かけられた。しかしその途上で、思いがけず長血をわずらっている女によって主の足が止まってしまった。この女については来週学ぶことになるが、その結果、彼はへあなたの娘はなくなりましたという知らせを聞くことになる。そのときヤイロの希望は、音をたてて崩れた。それは、主がへ恐れることはない。ただ信じなさいと言われたことからわかる。ヤイロは、たとえ救い主でも、死んでしまった者に対しては何もできないと思っていた。

ヤイロの家にいた人々はさらにもっと不信仰だった。主がへ子供は死んだのではない。眠っているだけであると言えられ、彼らはへイエスをあざ笑った。確かに彼らは、呼吸のとまっている娘を見ていた。それをへ眠っているだけと言った主イエスを非常識だと思っても不思議ではない。しかし主は、人が支配されて自分ではどうすることもできない状態から救い出してください。罪、病、悪霊から救ってくださいとは既に学んだ。そして主は、死からも救い出してください。肉体の死からも、永遠の死からも救い出してくださいのだ。

三、ただ信じている

主は、ヤイロと彼の妻、また3人の供の者(ペテロ、ヤコブ、ヨハネ)、合計4人だけを連れて死んだ娘のおかたっている部屋にはいられた。へタリ

タ・クミとは当時の人々の日常語だったアラム語で、へ少女よ、さあ、起きなさいという意味である。これは、ペテロの耳にいつまでも残る権威ある言葉だった。だから、あえて原語で書き記したと推測される。へすると、少女はすぐに起き上がった、歩き出した。それを目撃していた人々は、へたちまち非常な驚きに打たれた。主は、死をも支配される方だと知ったのだ。

結論

主は、今日学んだヤイロの娘のみならず、ナインのやもめの息子(ルカ7章)とラザロ(ヨハネ11章)を蘇生させ、また主自身も復活された。これらの記事を通して、主はご自身が死をも支配されていることを明らかにしておられる。救い主は、人間の力ではどうしようもない支配された状態から、どの時点からでも、救い出して下さる。すべての人は、気付いているか否かは別にして、罪、病、悪霊、死に支配されている。しかし、ただ主イエスを信じるなら、どんな時点からでも、主はその支配から解放して下さいなのだ。

研究資料

(足立)

テキスト

21 イエスはガラサ人(異邦人)の地からガリラヤ(自分の町)に戻られた。例のごとく、大勢の群衆がイエスを取り囲んでいた。おそらくイエスは、御言葉を語っていたのであろう。

22 会堂司とは、ユダヤ人の宗教的集會場である会堂の管理責任者のこと(ルカ8・41、使徒18・8、17)。会堂の維持管理だけではなく、聖書朗読の箇所を選定し、礼拝の司会、聖書朗読者、説教者の指名なども行なった。一つの会堂に、複数の会堂管理者が置かれることもあった(使徒13・15)。イエスとヤイロとは、過去に出会っていた可能性がある(参照1・21、3・1)。ヤイロがその礼拝に同席していたことは十分考えられる。説教の内容に責任を持つ管理者として、イエスのメッセージを聴いていたと思われる。そして3・6にあるイエス殺害の陰謀という不穏な動きの中でも、ヤイロはイエスに近づいてきた。しかもイエスの足元に跪いてまで、ひれ伏し(ピブト)という言葉は、イエスのゲッセマネの祈りで使われている(マタイ26・39、マルコ14・35)。

23 社会的な尊敬を受け、平和な日々を過ごしていたであろうヤイロの家庭に、一つの危機が訪れた。愛する娘(12歳)が死にかけている。親としての愛情も、医者の力によっても、死に向かう娘にはなす術がない。彼は、最後の頼みの綱としてイエスのところに来たのであろう。ヤイロは自分

をイエスに投げ出している。

24 イエスはヤイロと共に娘のもとに出かけた。35 娘のところに向けて出発したが、途中、思いがけない出来事が起こった(25、34節)。12年間長血を患っていた一人の女性が、イエスによって癒され救われた。これは時間的に言うなら1、2分の出来事ではない。やはり数十分はかかったであろう。ヤイロとしては気が気ではない。一瞬一秒を争う娘の病の時だから、彼はイエスを速やかに連れて行きたかった。ところが思わぬ女性の出現があつて時間が経つ中で、娘の死が告げられた。ヤイロの家から来た人々の言葉は、ヤイロが描いていた書き真をすたすたに引き裂いたであろう。また、彼らの言葉には、死に対してはイエスでも無力だという主張がうかがわれる。

36 聞き流してとは、小耳にはさむと言う意味。イエスがヤイロに言われた言葉には、深い意味がある。ヤイロは娘が生きている限りにおいてはイエスへの信仰を持っていた。これは人間的な可能性があると前提。しかし娘は死んだ。つまり、人間的な可能性は絶たれた。イエスは全く望み得ない状況下でさえも、神を信頼し続けることを彼に語っておられる(参照ローマ4・18)。しかも愛の命令形で。

37 ペテロとヤコブとヨハネ(参照9・2、14・33)。奇跡において、プライバシーを大切にされるイエス(7・33、8・23)。

38、39 取り乱している人たちをこ覧になったイエスは、家の中に入り、最大級の奇跡への備えを

される。イエスの語った内容は、「ご自分が生と死との権限を掌握しておられることを示している。イエスが死者を復活させた記録は、ここを含めて福音書に3箇所出てくる(ナインのやもめの息子はルカ7・11、ラザロはヨハネ11章)。

40 娘は死んだと確信して嘆き悲しむ者たちは、イエスの言葉に対して冷笑的な笑いを表した。イエスは彼らを外に出し、娘の両親と3人の弟子だけを連れて、少女のところに向かわれた。信仰的な理解なしで、奇跡だけを見せるようなことをイエスはなさらない。娘が息を吹き返せば、みわざがなされたことは明白になる。

41 イエスが子どもの手を取ったことは、彼女が少女に接触したことを示している。この行為は、25、34の女性の癒しと共通するものがある。イエスはアラム語で、「タリタ、クミ」と言われた。

42 少女は、イエスの御言葉の権威によって生き返った。そして、すぐに起き上がった、歩き出したのである。イエスこそ人間の死と命を支配されるお方である。またこの出来事は、イエス自身の復活の予表とも言える。少女が12歳であったとの記録によって、彼女が自分の足で歩くのに十分な年齢であったことを知るだけでなく、12年の苦しみを経験した女性(5・25)の癒しを思い起こすことにもなる。

43 この場合、秘密にしておくことは不可能である。ただし、方法や状況を明らかにしないように命令された。いたずらにメシヤ熱が高まらないようにとの配慮であろう。

- 週題 たた信じていなさい
- 聖書 マルコ5:21-24、35-43
- 暗唱聖句 恐れることはない。ただ信じなさい。マルコ5:36
- 目標 イエスは、死からも救う救い主であることを発見し信じ続ける。

導入

先週は、悪霊を追い出す権威を持たれるイエス様のことを話しました。今日は、死んだ人を生か返らせるイエス様のお話です。

(起) ストーリーを語る

カリヤ湖の岸辺にイエス様がおられることを聞いて、多くの人々が集まって来ました。そこに、会堂を管理する仕事をしているヤイロという人が、顔色を変えてやって来ました。そして、イエス様の足元に平伏してお願いし始めました。それは、ヤイロに12才になる娘がいて、大変重い病気で今にも死にそうになっていたからです。彼は、イエス様が家まで来て下さり、娘の上に手を置いて下さるなら、きっと癒されるに違いないと思っていたのです。ヤイロは、イエス様のことをある程度信じていたようです。しかし彼の信仰は、彼の家までイエス様が来られ、娘に手を置かれなければ癒せないというものでした。イエス様は御言葉だけで治すこともできたのですが、ヤイロの求めに従って、彼と一緒に出かけられました。群衆もソロソロついて行きました。

途中、病気の女の人にイエス様が引き止められたのでヤイロはあせったことでしょう。その時、

ヤイロの家の人が来て、彼の娘が死んでしまったことを伝えました。万事休す。ヤイロの家の人は、もう手遅れなのでイエス様にきていただく必要はなくなったと言ったのです。ところが、イエス様はこの言葉が全く聞こえないかのよう、「恐れることはない。ただ信じなさい」と語って、イエス様を信じ続けるように言われました。そして、弟子のペテロ、ヤコブとヨハネだけをお供に連れて、ヤイロの家に向かわれました。

ヤイロの家に着くと、娘の死んだことを知った人々が、大声で泣いたり叫んだりしていました。そこでイエス様は、「どうして泣き騒いでいるのか。子どもは死んだのではない。眠っているだけである」と言われたのです。集まっていた人々はこの言葉を聞いて、「娘はもう死んでしまっているのに、眠っているだけだとは、なんと変なことを言うのだらう」と思い、あざわらいました。でもイエス様は、そこにいた人々を家の外に出してしまわれ、子どもと両親と3人の弟子だけを連れて、娘のいる部屋に入って行かれました。

娘はベッドの上に静かに横たわっています。イエス様は死んだ子どもの手を取って、「タリタ、クミ」(少女よ、起きなさい)と言われました。すると、少女はすぐに起き上がり、歩き出しました。その場にいた人々は、びっくり仰天してしまいました。彼らに向かってイエス様は、「今見た出来事を決して他の人に知らせてはいけません」ときびしく口止めされてから、生き返った娘に何か食事を

与えるようにと言われました。

(承) 学ぶべき真理

人の死はイエス様にとって、眠っていることと同じでした。イエス様は死人さえ生き返らせる力をもっておられる神様です。今日のように医学が発達しても、人間は死んだ人を生か返らせることはできません。しかしイエス様は、人の死をも支配される方です。イエス様は、罪から救う方、病から救う方、悪霊から救う方であり、また死からも救う方なのです。

(転) 生活への適用

あなたはヤイロのように、死んだら終わりだとあきらめていませんか。自分の罪は取りかえしがつかないとか、この病気には勝てないとあきらめていませんか。あきらめる必要はありません。

結論

イエス様は、その御言葉で、罪を赦し、悪霊を追い出し、病気を癒し、死人さえ生き返らせる方です。「ただ信じ続ける」なら、もう遅いとあきらめることはありません。イエス様は、人を支配するそれら全てから、どんな時点からでも救うことができるようになります。

ワーク A

●導入のヒント

みんなは、病気になった時どうしていますか。ある人は、寝て治すかもしれません。また、ある人は病院に行くでしょうね。しかし、死んでしまったらどんな方法を使っても、治すことはできません。きょうは、イエス様は病気を治すだけでなく、私たちには考えることのできないような力を持っておられることを、学びましょう。

●ワークについて

今日のお話を聞いて、イエス様が死から救ったのはどの人か、絵の中から選んで下さい。

ワーク B

●質問1 会堂司ヤイロが主に願ったことについて、お話を思い返しつつ確認しましょう。

●質問2 本日の中心聖句を書きます。今も、どんな失望の時でも、主はこう言っておられます。

●質問3 主イエス様の言葉「タリタ・クミ」は深い愛の言葉です。信じる私たちにも同じようにこの言葉がかけてあることを知りましょう。

●質問4 イエス様への思いを書きましょう。

●賛美歌 「イエスさまにたよるほくらに」

(ふくいん子どもさんびか12番)

●今日のお祈り 「神様、イエス様はどんなところからでもお救い下さることを感謝します。わたしも心からイエス様を信じます。」

ワーク C

●「死を恐れる必要がない」ことを中心にワークが作られています。

●3問目は、娘の死を恐れなくていい理由を尋ねます。5つの選択肢は、わかりやすいと思います。が、「不老長寿の薬」などは説明してあげて下さい。「だれにでもあることだから」という選択肢は、一般的な日本人(相対的に物事を見る傾向が強く、絶対的な神を知らない)が持っている感覚ではないでしょうか。子どもたちには死への恐れがない(自覚できていない)場合が多いものです(罪ということへの自覚も大変に乏しい時代ですから)。死への恐れが自覚されていけば、イエス様のことを明確に伝えられるでしょう。

ワーク D

●質問1 ヤイロは、主により頼みながらも、癒しの方法を勝手に決めていました。しかし主は、ご自身のやり方でみわざをなされます。

●質問2 待たされて悪化する状況を見て、ヤイロは自分のことしか考えられず、周囲の人たちや主にさえも恨みをもったのではないのでしょうか。絶望の中でも主の言葉だけに信頼し、「ただ信じる」ことは、決して簡単ではありません。

●質問3 周囲の状況や時間の経過の中で、揺らぎやすい自分の弱さを覚えながら、「ただ信じる」ことを自分のこととして考えましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 ヤイロという人が、イエス様のところにお願いに来ましたが、それはどんなことでしたか。
- 2 イエス様は、ヤイロの娘が死んだことを聞いても眠っていると言われたのはなぜでしょう。
- 3 イエス様がヤイロの娘は眠っているだけだと言われたとき、人々の反応はどうでしたか。

●自分に当てはめてみよう

- 1 あなたは、イエス様のなされるわざを、自分の願いの枠に入れて、自分の考えたとおりにしてもらうとしたことはありますか。
- 2 あなたが、このときペテロたちと一緒に、イエス様がヤイロの娘を生かされる出来事を見たとしたら、どう思うでしょうか。
- 3 死という絶望状態からヤイロの娘は救い出されましたが、ここでイエス様は何を教えようとしたのでしょうか。

●話し合ってみよう
1 ヤイロの娘を、イエス様は生き返らせなさいました。このことから、イエス様はどのような方だとわかりますか。

2 ヤイロがイエス様をお願いしてから、かなりの時間がたち、その間にヤイロの娘は死にました。私たちも、イエス様にお祈りしてもなかなか答えられず、むしろ悪くなるような状況を経験したことがありますか。それでもなおイエス様を信じていくことができるでしょうか。

聖書 マルコ5・25～34
題 汚れたままで近づく

序論

今までの3人の人物（中風の人、悪霊につかれた人、ヤイロの娘）から、主は、罪の支配、病の支配、悪霊の支配、死の支配から解放してくださる救い主であることがわかった。今週学ぶ「長血の女」も病から解放されるが、彼女の場合は、自分のようなけがれた者が主に近付いてはいけないという、卑下があった点に注目したい。

一、信仰と不信仰

この女性は、八十二年間も長血をわすらうていた。おそらく婦人病の一種で、子宮からの出血が続いていたのであろう。このような病を持つ者を律法は「汚れた者」と規定していた（レビ15・25～27）。その病を治そうと、彼女は医者にかかってひどいめにあい、財産を使い果たしたが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くなる一方であった。

その頃、主イエスのことを聞いた彼女は、この方なら自分の病気を癒してくださるに違いないと信じて、後ろから主の衣にさわった。正面切ってお願ひするのは、「汚れた者」とみなされている自分にはできないと考えたのだ。

ここに、彼女の信仰と不信仰の両面が表れている。へみ衣にでもさわれば、なおしていただけるという、主イエスの力への信頼は、すばらしい面

だ。しかしそれを隠れてするのはおかしい。聖書には「神に求める者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはず」（ヘブル11・6）とある。神は求める者に報いてくださる。たとい「汚れた者」でも遠慮せず、そのまま主の前に出るからこそ、聖書の教える信仰である。神の癒しの力だけでなく、けがれた者もありのままで受け入れて下さるという人格を信じるのが信仰なのである。

二、主イエスの応答

彼女の病はすぐに癒され、主イエスも自分の内から力が出て行ったことに気づかれた。そこで主は、まわりを取り巻いている群衆に向かって、「へみ衣の着物にさわったのはだれか」と、お尋ねになった。群衆が主に押し迫っていたので、多くの者が主の衣にさわっていたが、主は信仰をもってさわった者をこ存じであった。しかし、あえて告白することをお求めになったのである。

このとき、ヤイロは気がではなかつたろう。一刻も早く娘の所に行ってもらいたいのに、主は立ち止まって群衆に語りかけ、返事する人待っておられる。主は、ヤイロの娘を大切に思っ出て向いてくださると同時に、この長血の女も大切にされていたのである。

三、信仰の告白

彼女は、自分がだちどころに癒されたことを知り、また、主が自分を捜しておられることを知って、へみ衣のきながら進み出て、みまえにひた伏して、すべてありのままを申し上げた。こ

れこそ、主が求められていたことである。ありのままを告白した彼女に、主はへみ衣よ。あなたの信仰があなただを救ったのですと仰せられた。へみ衣よという語には、「神の娘。すなわち、神に受け入れられ、神の特別な保護の中で喜んでゐる者」（セイヤー『新約聖書ギリシャ語辞典』）という意味が含まれていることに留意したい。主は彼女に、へみ衣よと、大きな励ましの言葉をかけてくださった。彼女は、自分神の子ともであり、娘であることを確認する。神に見捨てられ、嫌われ、遠ざけられているのではない。癒され、見い出され、告白を聞かれ、励まされ、子として扱われているのだ。主はけがれた者をけがれたまま受け入れてから、けがれを取り除いて下さる方である。けがれがなくなつてからしか近付いてはいけない方ではない。ここで彼女は、ご自身を求める者に報いて下さる神を、明確に信じていることができたのである。

結論

主イエスと出会うことによって、この女性の信仰は本物へと変えられていった。彼女は、癒されることを求めるだけでなく、主を信頼して、ありのままの姿で御前に出ることがどれほど重要であるかを悟つたのである。信仰とは神の力を信じるだけではない。信じる者に報いて下さる神の人格を信じていることである。私たちに、罪があり、けがれがあるが、そのまま御前に出よう。主は、そのまま受け入れ、造り変えてくださる。

研究資料

(足立)

テキスト

25 12年間とはあまりにも長い時間である。長血とは、一つの婦人病と言つことの他は、どういふ種類の病気かはわからない。しかし彼女が置かれていた状況は、全く厳しいものであった。この病は社会からけがれたものと見なされていた（レビ15・25～33）。町に出入りすることは禁止。理由のない出血ということで、彼女は当時のイスラエル社会の外に置かれた人であった。

26 彼女は経済的にも苦勞していた。多くの医者にかかつて、さんさん苦しめられたとは、直訳すると、多くの医者によって多く苦しめられたとなる。当時は、現代のような医療技術が発達してはたけではないので、医者と言つても根拠のない迷信的な診断を下す者もいたようである。結局、医療費と言う名目で、彼女の経済は底をついていた。しかも多大な財産の投入にもかかわらず、その出血は止まらず、かえって悪くなる一方であった。間違いなく将来に対する希望が何ら持てない状態。精神的にもほろぼろに追い込まれていたであらう。

27 この女性は既にイエスのみわざや、弱者に関わる愛の行爲を伝え聞いていたであらう。そのイエスのことを耳にして、彼女は群衆の中にまぎれ込み、うしろからイエスに近づいて、背後からその衣にそつとさわった。彼女はヤイロ（5・21～24）のように正面から出なかった。重い病に犯さ

れた人間として、多くの群衆の目にさらされることを避けたかったのであろう。そう考えるなら、この行動は彼女にできる精一杯のイエスへの接触だった。

28 イエスの着物にさわれば、彼の力にあずかれると言つ考え方は、古代の思想を反映させている（参照3・10、6・56、使徒19・11～12）。非常に皮相的だが、彼女の信仰理解ととらえたい。

29 マルコが用いている動詞の時制は重要。かわき（エグゼランセ）と感じた（エグノー）と訳されている動詞の時制は不定過去形であり、一つの完結した行爲を表す。なおった（イアタイ）と訳される動詞の時制は完了形であり、行爲がもたらした効果を表現している。

30 この出来事は彼女の病気の癒しで終わっていない。彼女はすでに（29節）癒しを経験したが、イエスもまたすぐ自分のうちから力が出て行ったことに気づいている。イエスはご自分を求めてくる魂のうめきに対して極めて敏感である。背後の群衆に対して、わたしの着物にさわったのはだれかと言ひイエスの問いかけは、どんな小さな信仰の行爲も見逃さない神の子イエスのご性質を表していると言えるであらう。

31 弟子たちの反応もまた、ごく自然で、普通の人間としての感じ方であらう。彼らの感覚としては、多くの群衆の一人と接触したからと言って、それはどこにもあること。しかも彼らは今、会堂司やイロの娘の命を案じ、一刻を争って突き進んでいた時。当然弟子たちは少女のことで頭がい

っぱいであった。これまた人間の自然な対応である。彼らはイエスにさわった一人の女性の存在に気付くことができない。これが人間の限界。

32 イエスにとって大切なのは、ご自分を求めてくる一人の魂。イエスは群衆の中に一人の存在を認めることができる方である。そして深く関わろうとされる。見まわしておられた（ペリエレペト）と言つ動詞の時制は未完了であるから、イエス自らがご自分の目でこの一人の女性をお認めになろうとして、ずっと捜しておられた行爲を表現している。緊急時であらうとも、一人の魂の切なるうめきに対して、確実に関わろうとされるイエスの愛の生き方。

33 この女性は、ただ一人でイエスの前に進み出た。今まで彼女は、多くの群衆の中に埋没し、キリストの前から立ち去ろうとしていた。しかし彼女はイエスの真剣な眼差しに導きを強く感じて、大いなる一歩を踏み出した。イエスが求めておられるのは、一対一の人格的な愛の関係である。ここに、神の前に生かされる人間の尊厳がある。そしてイエスへの真実な告白が大切。

34 イエスの言葉は、彼女に対する人格的な愛の宣言。あなたの信仰とは、彼女が持ったイエスへの信頼を示している。イエスは彼女の中にはっきりと信仰を認めておられる。救った（セソウケン）と言つ動詞は完了時制であるから、動作は完了して結果が残っていることを示している。つまり彼女の救いは永遠に有効である。そしてイエスは彼女を信仰者として社会復帰させる。

●週題 汚れたままで近づく
●聖書 マルコ5・25～34
●暗唱箇所 娘よ。あなたの信仰があなたを救ったのです。 マルコ5・34
●目標 神様は、けがれた者をありのまま受け入れて下さることを発見し、神様に近づく者となる。

導入

イエス様は、罪を赦し、病を癒し、悪霊を追い出し、死の支配からも解放して下さいます。しかし、イエス様にはそのような力があるけれども、わたしにはそんなことをしてもらえない資格がない」と考えている人がいました。

(起) ストーリーを語る

今日のお話は、イエス様が、先週学んだヤイロの家に向かう途中に起こった出来事です。イエス様は、ヤイロの家に向かって急いでいました。大勢の群衆もついてきています。ワイワイ、ザワザワとした人ごみの中に、一人の女の人が紛れ込んでいました。彼女は、体から血が流れ出て止まらないという病気に、12年間も苦しんでいました。たくさんのお医者さんにみてもらったのですが、お金だけだまし取られ、全くよくなりません。持っているものを売り尽くしてしまっ、それでも悪くなってしまうばかりだったのです。

そんなときに彼女は、イエス様が病を癒されるという話を聞いて、やって来たのです。彼女は、

「そんな偉い救い主に、わたしのようないけがれた病気の者がふれてはいけませんが、イエス様の着ておられる服のすそにでもさわったら、きっと癒していただける」と思い、後ろからそっとイエス様の服のすそにさわったのです。するとたちまち、血の元がかわき、病気がすっかり治ったことを身体に感じました。

すぐにイエス様は、「自分の中から力が出ていったことに気がつかれて、後ろを振り向いて、「わたしの着物にさわったのはだれか」と、おっしゃったのです。回りには数えきれないほどの人が押し寄せていました。弟子たちは、「こんなに大勢の人だから、たくさんの方がイエス様の周りにいるのに、だれがさわったかなんてわかりません」と答えたのですが、イエス様はお見回して、さわって癒された人がだれかを捜しておられました。実は、イエス様は神様ですから、だれがさわったかご存じだったのですが、彼女が自分から告白するのを待っておられたのです。

その女の人は自分の身体に起こった奇跡を知って、イエス様が捜しておられるのは自分のことだとわかりました。そこで、恐る恐る進み出て、イエス様の前にひれ伏して、真実をありのまま話しました。イエス様はその話を聞かれて、「娘よ。あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって達者でいなさい」と声をかけて下さいました。

(承) 学ぶべき真理

イエス様は、この女の人も神様の娘だから、あ

りのままで、神様に受け入れられていることを教えられたのです。そして、神様なら「できる」というその力を信じるだけでなく、自分のことを子として扱われる神様なら「してくださる」というその人格への信仰が、神様の力を引き出して救われることを教えられたのです。

(転) 生活への適用

この女の人は自分がけがれた者で、神様に近づく資格がないと思っていました。しかしそれはさかさまです。けがれているから近づいてきよくしてもらうのです。あなたは、病気が治ってから、お医者さんのところへ行きますか。病気のまま行って、病気を治してもらいますか。では、けがれた人は、けがれを取り除いてからイエス様のところに行くのでしょうか。いいえ、けがれたままで行って、イエス様にきよくしてもらい、イエス様と一緒に歩む人になるのです。あなたも、ありのまま神様の前に出て、正直に告白する時、神様にきよくしていただけるのです。あなたは、神様の前に正直に罪を告白していますか。

結論

「神様はできる力があるけれど、僕には何もしてくれない」と思っている人いませんか。神様を信じる人は、みんな神様の子どもです。神様は、あなたをありのまま受け入れておられます。神様の力だけでなく、神様なら「してくださる」と信じるなら、神様の祝福を受け取れます。ありのまま神様の前に進み出て、ありのまま告白するその信仰が、あなたを救うのです。

ワーク A

●参考図書 絵本『そのまのきみがすき』

●導入のヒント

イエス様は、今までにたくさんの方の病気を治してきました。その人たちは、お金持ちでもなければ、頭が良い人でもありませんでした。イエス様はどのような人にもよくして下さいます。

●ワークについて

皆さんは、自分のことをどのように思っているでしょうか。ワークに示したことで当てはまることがあれば、その所に印をいれましょう。(教師と子どもたちで、お互いの良い所や悪い所を話し合ってみるのも良いかもしれません。)

ワーク B

●質問1 お話を思い返しつつ、主イエス様への女性の信仰を学びます。「み衣にでもさわれば」との謙虚な信仰に心打たれます。

●質問2 全知全能の主が、なぜ、あえて名乗らせようとされたのでしょうか。癒しの公表①と大胆な信仰告白②が目的でした。主の愛です。

●質問3 ありのままの姿で、「信じる人」を主は救い恵んで下さいます。イエス様は神様です。

●賛美歌 「主がわたしの手を」

(新聖歌474番)

●今日のお祈り 「神様、どんな時でもありのままの私を愛して下さいます。感謝します。信じていきますから、これからも守って下さい。」

ワーク C

●顔を書き入れる質問がよくあります。ただ、目鼻口を書けば良いのではなく、そのときのそれぞれの人物の気持ちを考えて、表情で表現させようとするものです。今日の第3問は、自分の信仰の状態を表情で書かせようとしています。これで生徒の信仰を推し量ることが出来ます。また、イエス様の表情からは、イエス様が自分を見て下さると思われているか、そっぽを向いていると感じているか、あるいは、あきれて目を回しているか、を予想させます。これらから、信仰の自己像とその自己像に対するイエス様の評価をどのように予感しているかを知ることが出来ます。察知できたら、会話が進むでしょう。

ワーク D

●質問1 12年の長さを、生活感をもって考えて下さい。辛い苦しい期間が続き、さらに病気が悪化していくことに焦燥感を持つ人は、主にさえも信頼しきれないのです。

●質問2 癒された喜びと戸惑い。主に信仰を承認されなければ、癒されたことが恐れをおこし、それ以後、不安になったかもしれません。

●質問3 主に近づこうと躊躇させるさまざまの不安や不信を、一緒に考えて下さい。ありのままの自分を受け入れて下さる主を、共に仰ぐことが出来ますように。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 長血をわずらっていた女は、イエス様に出会うまでは何に頼って生きていたでしょうか。
2 自分の病を癒すために、財産を使い果たしてしまったこの女は、どのような気持ちだったのでしょうか。

3 この女は、イエス様の正面からではなく、イエス様の後ろから近づきました。なぜそうしたのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 イエス様のもとに近づいた、後ろめたいと思ったことはありますか。あるとしたらそれはなぜですか。

2 あなたは、人々の前でイエス様に頼っていることを告白できないでいませんか。

3 イエス様は、あなたの祈りを受け入れてくれていると思いますか。思いませんか。それはなぜですか。

●話し合ってみよう

1 なぜイエス様は、自分の衣にさわった人がわかっていて、「わたしの衣にさわったのはだれですか」と言われたのでしょうか。

2 この女は、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われたとき、どんな気持ちでイエス様に名乗り出たのでしょうか。

3 「あなたの信仰があなたを救った」というイエス様の言葉は、どういう意味でしょうか。

聖書 マルコ9・14・29
 題 神の恵みをとどめる不信仰

序論

今週登場する父親は、主イエスに対する信仰を十分もっていたのではない。しかし主は、彼の不信仰を戒められた後、求めに応じて、彼の息子を癒された。この箇所では不信仰だったのは、彼だけではなく、登場する人々全員である。不信仰な時代を主は嘆かれたが、どうすれば不信仰な時代に神のみわざがなされるのかも教えて下さった。

一、指一本貸さない不信仰

ペテロたちが山頂で主の変貌された姿を目撃していた頃、山麓では悲惨な出来事が起きていた。悪霊につかれて苦しんでいる子どもから悪霊を追い出せないで、律法学者と弟子たちが論争していたのである。群衆は彼らの周りを取り囲む傍観者であり、父親も騒動に巻き込まれていた。かわいそうなのは、けがれた霊によるけいれんで、何度も苦しんでいるのに、ほったらかされている子どもである。主はその状態を見て、△ああ、なんとこの場合の不信仰とは、悪霊を追い出すという当然の神のみわざが、人の信仰がないためになされないでいたことだ。弟子たちは癒せないため論争していた。律法学者も自分は何もできないのに議論だけ吹き掛けていた。群衆も取り囲んで見物しながら指一本貸さずにいた。父親も幼い頃から

研究資料

(足立)

テキスト

14 彼らとは、イエスとペテロ、ヨハネ、ヤコブのこと。その彼らが、山麓に残された弟子たちとどこに来看て見ると、律法学者たちが弟子たちと論争していた。しばしば、山上の栄光と山麓の悲慘として対比される。

15 山上の変貌(9・2・8)を経験されたイエスの姿には、モーセのような(出エジプト34・29・35)顔の輝きがあり、群衆はそのイエスに驚いたのかもしれないと主張する人もいる。これは不可能な解釈ではないが、福音書記者たちはだれもこのような主張をしていない。群衆が驚いたのはおそらく予期せぬイエスの到着にであらう。

16 ここでイエスが言ったあなたがたとは、律法学者たちのことなのか、残されていた弟子たちのことなのか、断定するのは難しい。おそらく律法学者たちがこの場の議論を有利に進めていたであろうから、弟子の劣勢を受けとめたイエスが、律法学者たちに語りかけたのであろう。

17・18 子どもの病癒は、話せないこと、悪霊による肉体的苦痛があることだった。父親はこの息子をイエスのところに連れてきた。イエスが不在だったので、弟子たちに癒しを頼んだができなかった。弟子たちはイエスに選ばれ(3・14・15)既に悪霊を追い出す権威を授かり(6・7)実践を経てきた(6・12・13)。それにもかかわらず、彼らは失敗した。お弟子たちとは、直訳すると、

その子を放置していた。皆、不信仰だった。

肉体の病を解決できるようになった現代でも、多くの子どもが精神的な傷を負っている。親からの虐待やネグレクト(放置)によって苦しんでいるのだ。知識人は色々論議はしても、指一本貸さない。民衆はワイドショーとして楽しんでるだけだ。教会も、弟子たちのように議論と騒動に巻き込まれ、指一本貸さないでいるのではないか。

二、自分の問題にしない不信仰

群衆の中の一人として父親が登場し、主に事情を説明した後、人々がその子を連れてきた。そこで父親は、△できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください△と願った。あきらめ半分だったのであらう。主は必ずこの子の問題を解決してくださるという信仰を、彼はもっていない。

主は彼の不信仰を指摘し、△できますれば、と言ったのか。信ずる者には、どんな事でもできる△と戒められた。しかし、それは叱責というより彼の信仰を引き上げるための呼び水だった。そこで彼はすぐ、△信じます。不信仰なわたしを、お助けください△と叫んだのである。ここでやっと父親は、不信仰な「わたし」に気付いた。子どもの問題が解決しないのは、自分が問題なのだ。自分が主を信じず、問題に取り組まずにきたことがこまで息子を苦しめてきたのだと気付いた。現代も、神のみわざをとどめているのは、自分の問題として取り組まない「わたし」の責任でもある。

三、不信仰な時代のとりなしの祈り

主がけがれた霊をお叱りになると、霊はすぐに

あなたの弟子たちとなる。

19 8・12、38では、時代(ゲネア)という言葉はイエスに敵対する不信仰者へ適用されている。弟子たちの失敗の原因は、明らかに不信仰。過去の成功体験が、新たな障害の解決にはならない。その都度、主のみ力を信頼して、祈り取り組むことが大切である。イエスは全ての権威がご自分にあることを示すため(参照9・7)、その子を連れてくるように命じる。信仰と言うテーマは、あらゆる場面で言及されている(参照マルコ2・5、4・40、5・34、36、10・52、11・22・23)。

20・22 a この部分はマルコが詳細に記しているところだが、マタイ(17・14・21)やルカ(9・37・43 a)は省略している。イエスの臨在を悪霊が感じると、激しい反動が生じる(参照1・23・26、34、3・11・12、5・6・13)。イエスは父親に子どもの病気の期間を尋ねた。この問いかけに、子どもとその関係者が持つ人生の苦悩を押し量るイエスのあわれみの心が感じられる。

22 b 弟子たちがけがれた霊を追い出せなかったことにより、父親の信仰は揺さぶられているように思われる。彼は神のみ力に限定と限界を設けていた。実際24節で、父親は自分の不信仰を告白している。ここで注目すべきことは、父親が、わたしどもをあわれんで、と言っている事。子どもの痛みと一体になってきた父親の苦悩が伺われる。

23 ここまでの不信仰者は弟子たちと考えられるが、ここでイエスは、癒しを必要とする子を持つ父親に焦点をあてている。主のみわざを期待する

その子から出ていった。その後、弟子たちはひそかに△わたくしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか△と尋ねた。6章7節を見ると、主は弟子たちにけがれた霊を制する権威を与えておられる。彼らも実際に多くの悪霊を追い出して、それなりの自負があった。しかし今回はなぜ追い出せなかったのか。彼らは不思議に思ったのだ。

主は、△祈りによらなければ、どうしても追い出すことはできない△とお答えになった。マタイ17・21には、△祈と断食とによらなければ△と記されている。断食したこと引き換えに癒してくださるのではない。人は神と引き換えるものなど何ひとつもってはいない。神は何でも持っておられるからである。

結論

ここで大切なことは、自分の事としてとりなししているかどうかである。「神様、あの人に△してあげて下さい」と祈っても、自分是指一本貸さないのでは、神を「しもべ」扱いしている。自分は手を貸さないが、神様に「しておいて」と言っているのだ。しかし断食して祈ると、他人事ではなくなる。自分の事として真剣にとりなし、神に示された事は全てしようとするのが断食の祈りだ。

なら、信仰(信頼)が必要とされる。

24 父親は、不信仰なわたし(直訳は、わたしの不信仰)と言って自分の問題を自覚した。信仰と不信仰との間は紙一重。弟子はここが問われる。

25 イエスは群衆が集まってくるのを見て、けがれた霊への即座の解決を宣告された。多くの癒しの場合、秘密が求められていた(参照1・25、34、44、3・11・12、5・43)が、この場面に關してはその言及はない。

26・27 イエスの御言葉の権威により、みわざが行われた。悪霊の反動は、追い出しが成功した証拠のようなものとみなされる。するとその少年は、死人のようになった。この事もまた、けがれた霊が出て行った証拠である。ここでこの少年が死んだのかどうかはわからない。起されるとは、字義的には、生き返らせ(エグイロー)となる。この言葉は、死者の中からイエスが復活する際の神の行為を述べるのに使われている(例マルコ14・28、使徒3・15、4・10、5・30)。

28 弟子たちは内密に導きを求めた(参照4・10・12、33・34、7・17、13・3)。彼らはなぜ自分たちが悪霊を追い出せなかったのか知れたかった。既に権威が与えられていたのに(6・7)。29 ここまでは信仰の必要性が強調されていた。ここでは祈りの概念が注入されている。この二つは密接に結びついている。特に祈りの生涯は信仰に至る道となる。どんな種類の人間の手段でもなく、神にのみ依存する必要性が強調されている。

●週題 神の恵みをとどめる不信仰

●聖書 マルコ9・14、29

●暗唱聖句 信する者には、どんな事でもできる。マルコ9・23

●目標 自分の不信仰が神様の恵みをとどめることを発見し、人の問題でも自分のこととして祈る者となる。

導入

あなたの回りに、神様なら正されることで、ほったらかされている問題はありますか。ここに、不信仰な人々に取り囲まれて、悪霊の支配から解放されないかわいそうな男の子がいました。

(起) ストーリーを語る

イエス様が、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと、高い山から下りて来ると、他の弟子たちが、大勢の人たちに取り囲まれて、律法学者たちと論じ合っていました。イエス様が来られたことに気づいた人たちがあいさつをしにやってくると、イエス様は「何を論じ合っているのか」と尋ねられました。そこでその中の一人が答えました。「先生、私の息子は口をきけなくする悪霊につかれています。そのせいで、引きつけを起こして倒れ、泡を吹いたり、歯をくいしばって体を力チンコチンにさせたりします。それで、ここまで連れてきてお弟子さんたちに悪霊を追い出して下さるように願ったのですが、できませんでした」と言っています。イエス様は、人々の不信仰をたいへん嘆かれました。

した。悪霊がしかしていることなら、間違いない。信仰のある人には聖めることができるのに、それができません。悪霊に苦しめられている人がいても、律法学者は論争するだけで指一本貸さず、群衆は見せ物のように見物して指一本貸さず、父親も長くその子をほっておきました。みんな不信仰なのです。弟子たちも悪霊を追い出せず、論争に巻き込まれて不信仰でした。その結果、この男の子は、ここでもほったらかされているのです。イエス様はその子どもを連れてこさせました。すると悪霊はその子をおきつけさせたので、その子は倒れて、泡を吹いてころけまわりました。イエス様が父親に、「いつからこのようになったのか」と尋ねられると、この父親は、「幼い時からです。悪霊は息子を何度も火や水の中に投げ込みました。ただ、もしできましたら、私たちをあわれんで助けて下さい」と答えたのです。イエス様はその言葉を聞いて、「もしできれば、と言いつのか。信する者には、どんなことでもできる」と言われました。父親はすぐに「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」と叫んだのです。それからイエス様は、けがれた霊を叱りつけ、「その子から出て行って、二度と入って来な」と命じられました。すると霊は叫び声をあげて、その子を激しく引きつけさせてから出ていきました。そして、死んだようになっていたその子は、イエス様に手を取られると、起き上がったのです。

その後、弟子たちは、こっそりとイエス様に、「どうして自分たちには悪霊を追い出せなかったのですか」と尋ねました。というのも弟子たちは

これまでに、悪霊を追い出すことができていたのです。イエス様はその質問に対して「このたぐいは、祈りによらなければ、どうしても追い出すことはできない」と言われました。

(承) 学ぶべき真理

悪霊に苦しめられている人がそこにいるのに、なぜほっておけるのでしょうか。不信仰とは、当然神様が正される事、きよめられることをほっておいて、人ごととして関わらないことです。しかし、この父親は、イエス様に「もしできればと言いつのか」と叱責された時、「不信仰なわたしをお助け下さい」と叫びました。父親は自分の問題に気が付いたのです。神様の恵みをとどめているのは、人ごとにして、自分の問題にしかかった自分自身です。「わたし」を助けて下さいと、自分の問題として取り組むなら、神様の恵みを受け取れるのです。弟子たちも祈ったはずですが、その祈りはまだ人ごとでした。断食して祈るなら人ごとではすみません。自分のこととして祈る祈りによって、不信仰な人々にも神様の恵みが届けられるのです。

結論

あなたの回りに、神様が必ず正される、きよめられるはずなのにほったらかされている問題がありませんか。それは、あなたが自分のこととして祈って取り組むべき問題です。あなたの不信仰によって神様の恵みをとどめるはなりません。かえって自分のこととして祈る祈りによって、不信仰な世に、神様の恵みをもたらしましょう。

ワーク A

導入のヒント

今までに、自分ではどうしようもなくって、泣いてしまったことはありませんか。迷子になったときなどは、そうですね。神様は難しいこと、解決できないことすべてを解決して下さいます。

ワークについて

今まで、イエス様が聖書の中で行われた不思議な力や働きについて見てきました。その事を思いだしながら、「イエス様はいつも私と共にいて下さる」ことを覚えましょう。

ワーク B

●質問1 今日のストーリーをゆっくり追っていく、主イエス様の愛と人々の不信仰を知りましょう。主が悲しまれるのは不信仰です。

●質問2 イエス様に対する信仰を確かめます。イエス様は「なんでもできる」方です。子どもたちとイエス様に対する思いを話し合います。

●質問3 今日の暗唱聖句をしっかりと心に刻みます。「信じる者」に主のみわざは現れます。

●賛美歌 「かみはうちゅうのつくりぬし」

(ごともさんびか7番)

●今日のお祈り 「神様、イエス様は何でもできる方です。まわりのことを自分のこととして祈っていきますから、私たちを祝福して下さい。」

ワーク C

●自分の生活の問題を具体的に書かせるために、時間をとって、困っている問題はないか、それを信仰をもってどう行なうか、を考えます。小さなことでもいいのです。大人の律法的な価値判断、良い子を目指せ思考、変化・成長を急ぐ思いなど、われわれ大人が縛られている多くの律法的な感覚があります。これらを退けて、主が愛と忍耐を持って育んでおられる、その立場から指導できるように、祈り備えましょう。

ワーク D

●質問1 子どもの癒しが求められているにもかかわらず、論争になっています。主の弟子としての自負や、それまで癒したことがあるの思い上がりがあったのでしょうか。律法学者は現実離れした律法論をふりかざし、群衆も興味本位で見えていました。神様に目を向けられない人々の思いを考えましょう。

●質問2 「もしできれば」と、主のわざさえ本気で信じられませんか。子どものことで疲れ果てたのか、弟子の失敗や、論争しかない律法学者などを見て、不信を持つようになったのか。色々と疑い惑いを持たせる要因を考えてみましょう。

●質問3 すぐに論争に走ってしまうような真剣さのないとりなしが問題でした。

●質問4 情性やあきらめなど、不信仰の要因を発見し、真剣な祈りをささげましょう。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 高い山からイエス様と3人の弟子たちが戻ってきたときに、律法学者たちは他の主の弟子たちと論じ合っていました。何を論じ合っていたのでしょうか。

2 最初、口をきけなくする霊につかれていた子どもの父親は、イエス様が癒してくれるという信仰をもっていたのでしょうか。

3 なぜ弟子たちはこのむすこから霊を追い出すことができなかったのでしょうか。

自分に当てはめてみよう

1 あなたは、自分以外の人の問題を自分のことのように祈っていますか。それとも他人事として祈っていますか。

2 あなたは、神様に祈るときに、神様に対して何かすれば祈りに答えてくださると思っていいますか。そうではありませんか。

3 神様がしてくださることを期待して祈ったことがありますか。

話し合ってみよう

1 悪い霊につかれた男の子が登場していますが、今日では、どんな問題が肉体的や精神的な病として子どもの世界にあるのでしょうか。

2 律法学者たちは、論じているだけで具体的な助けを男の子にしませんでした。私たちも、友人の悩みを他人事のように考えていませんか。

3 どうすれば、真剣に取り組めるでしょうか。

聖書 マルコ10・17・31
週題 信仰のスタート(金持ちの青年)

序論

遡ること5回、主イエスに出会った人々から、抱えている問題が主によって解決される様を学んだ。今日登場する人は、金持ちで、健康で、一見何の問題もないと思われる人物である。しかし彼にも、自分では気づかない致命的な問題があった。残念ながら、彼はその問題を解決できず、顔を曇らせて主のもとから去っていった。せっかく主と出会っても、問題が解決しないのはなぜか。

一、行ないでは救われない

ひとりの人が走り寄って主の前にひざまずき、
「よき師よ」と尋ねてきた。彼が主を尊敬していたことは、間違いない。しかし主は、あえて人神ひとりのほかによい者はいない」と答えられた。つまり言外に、「良き師というからには、わたしを神として礼拝していますか。違つてでしょう」とおっしゃられたのであろう。

「永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」と尋ねる彼に、主は十戒の後半6つの戒めを示された。彼は他の福音書では「金持ちの青年」「役人」と記されていて、身分ある教養人であったようだ。彼は、これら対人関係についての戒めを、△小さい時から守っております」と答えた。こんなに真面目だから、当然のこと、永遠の生命を得られるはずだと思っていたのだ。しかし、

彼はそれでも確信がなかったから、わざわざ主のもとに來たのだらう。「あと、何をしたら永遠の生命が得られるのか」という質問は、かつてニコデモも主に尋ねたことだ。自分に何かを付け足したり、何かを行なうことによって、永遠の生命を得ることはできない。ただ神の恵みにより、キリスト・イエスの贖いにより、信仰によって救われるのである。

二、何物も神としてはならない

主が、十戒の前半4つの対人関係についての戒めを彼に言われなかったのは理由がある。それは彼が、「主のほか、何物も神とするな」という最初の戒めを、守っていなかったからである。そのことを気づかせるために、主は△持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい」と命じられた。彼はそれができなかった。それによって、自分が資産を神としていることに気づかされる。彼は、神ではなく、資産により頼んでいたのだ。△たぐさんの資産△こそが彼の頼りであり、資産のない生活は考えられないのである。

現代でも、多くの人が神以上に大切にしているものを持っている。子どもたちでも、学校の成績、趣味、スポーツ、ゲーム、マンガなどを自分の神にしているのではなからうか。それを捨てて神を第一とすることが信仰のスタートである。

三、何物も引き換えることができない

当時は、金持ちは神に祝福された者だと思われていた。しかし本当は、そうでない。△らくだが針の穴を通るほうが、もっとやさしい△という表

現には幾つかの解釈があるが、いずれにせよ、不可能を表していることに間違いはない。主イエスは、金持ちが救われるのは不可能だと言われる。自分の家族にせよ持ち物にせよ、大切なものを犠牲にすることは困難である。しかし、一番大切なものは神であり、神を第一にすることにによって、全ては添えて与えられるのだ。主に従うゆえに、それらのものを捨てるなら、その百倍を受け取ることができ、この地上の生命のみならず、永遠の生命を受け取ることができる。

気づけなければならぬのは、それらを捨てたらそのことと引き換えに永遠の生命がいただけるという考え方である。それでは、善行と引き換えるのと同じだ。天に宝を積むようになるとは「スタートを切る」ことである。富を神とすることを捨てるのが、神様を信じる第一歩となり、そこから主イエスに従っていく生涯が始まる。その結果、天に宝を積むことができるのだ。

結論

「永遠の生命を受けるために、何をしたらよいのか」の答えは、「何をしても、行ないでは無理」である。信仰のスタートを切れないこの金持ちの青年を、主は慈しんで忠告される。「あなたは富を神としているから、信仰のスタートが切れないのだ」と。また、「だれが救われることができるのか」の答えは、△人にはできないが、神にはできる△である。人は人を救うことはできない。しかし、主イエスを信じる信仰によって、神に救っていただけるのである。

研究資料

(足立)

テキスト

17 ひとりの人であるが、マタイによればこの人は青年である(19・22)。青年とは、若さという可能性を秘めていることの象徴。またルカによればこの人は役人である(18・18)。どういった役人かは判断しかねるが、社会的立場を与えられていることは間違いない。またこの人は財産家であった(22節)。親から譲り受けたのか、自力で手にしたかはわからない。永遠の生命を受けると言う彼の発想は、多くのユダヤ人が、律法を行なうことによって救われると考えていた時代にあつて、珍しいものである。永遠の生命と言う表現は、ヨハネ福音書では広く使用されているが、マルコで使われているのはこのこと、10・30だけである(マタイでは19・29、25・46、ルカでは10・25、18・18、30)。強調は生命の分量よりも質にある。

18 ユダヤ人の発想では、神は卓越した善なる方(歴代上16・34、歴代下5・13、エズラ3・11、詩篇118・1、145・9等)。イエスはこの人の視点を神ご自身に向けようとしている。

19 イエスが引用しているのは、十戒の後半部、つまり対人関係に関する律法である(出エジプト20・12～17、申命記5・16～21)。イエスはこの人に、隣人との関わりを問われたのであろう。

20 この人は、ユダヤの宗教的教育は十分受けていた。しかしそれは形式的なものだったのであろう。律法にはいろいろな機能があるが、まず私た

ち罪人を断罪する(ローマ7・7～14)。彼の認識はあまりにも皮相的なもの。

21 イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われたとあるが、ここを直訳すると、しかしイエスは彼をじつと観察になり、彼を愛されて、そして彼に言われたとなる。原文では、彼という言葉が3回繰り返されている。イエスは彼を見つめて、愛そのものを注いで、彼を導こうとされた。イエスの語られた言葉は、あくまで彼を永遠の生命に招くためのものである。イエスは彼の障害物を除去しようとした。帰って、売り払って、施しなさい、従ってきなさい、という四つの動詞は全て命令形であるが、本質はイエスの愛から出たもの。そして彼がイエスに従うための最大の障害物は、財産であった。主の召しは、金持ちではなく、イエスの弟子になることである。しかしながら弟子になるとは、代価が要り、犠牲が伴い、そして服従が含まれる。そしてこれらの言葉は、十字架を負うことを求めている(マルコ8・34)。

22 この青年の場合は、莫大な財産を捨てることが求められたのである。イエスは他の箇所でも彼に従う選択ができない人々について述べている(マタイ8・18～22、ルカ9・57～62)。この青年はマルコ福音書において、イエスの弟子に招かれながら拒絶した唯一の事例である。

23 イエスが語ったことは富に対するユダヤ人の態度と対比されねばならない。ユダヤ人の支配的な見方は、富は神の好意のしるしであり、敬虔に対する報いということであった(ヨブ1・10、42・10、詩篇128・1～2、イザヤ3・10)。しかし、イ

エスの教えでは視点が全く異なっている。

24 富める者が神の国に入ることが難しいと言つイエスの教えに弟子たちも驚く。当時ユダヤ社会では、施しと断食と祈りというものが、宗教者としての3大柱とされていた。おそらく先の青年もこう生きてきて、神から祝福されたと思われていたであろう。弟子たちにすれば、富める青年こそ神の国に一番近い代表者と言う思いがあった。

25 らくだ(パレスチナで最大の動物とされていた)が針の穴を通る可能性のほうに、金持ちが神の国にはいるよりも大きいとイエスは言う。

26 弟子たちの疑問はさらに増している。

27 この節はおそらくこの段落を理解するための鍵となる。永遠の生命を受け継ぐこと、神の国に入ることは、そして救われた存在となることは、どんな人間にも不可能であるが、神にとってはそうではない。神は善であり、全ての人の救いを望んでおられる。だから全ての人は全面的に神に依り頼まなければならない。そういう神への絶対的な信頼が、誠実な弟子としての生涯を可能にする。

28 この富める青年とは対照的に、弟子たちは何もかも捨ててイエスに従ってきた(1・18、20、2・14)。

29 イエスの弟子となるには、彼のために、福音のために、大切なものを捨てる覚悟がいる。

30 イエスに従う者には、迫害も起こってくる。しかし犠牲をはるかに超えた報いもある。

31 得意げに胸を張る弟子たちへの警告。

●週題 信仰のスタート（金持ちの青年）
●聖書 マルコ10・17～31
●暗唱聖句 持っているものをみな売り払って、
貧しい人々に施しなさい。 マルコ10・21
●目標 捧げられないものがあるなら、そ
れは神様を信じていない証拠であ
ることを発見する。

序論

イエス様のところには、病気で苦しんでいる人
や、悪霊に取りつかれた人たちがたくさん助けを
求めてやってきました。しかし、今日の登場人物
は、貧乏でも病気でありません。では、何を求
めてイエス様のところにやって来たのでしょうか。

（起）ストーリーを語る

ひとりの青年がイエス様のもとに走りよってき
てひざまずき、「先生、永遠の生命を受けるために、
何をしたらよいでしょうか」と言いました。彼が
欲しいのは、永遠の命でした。彼はイエス様のこ
とを大変尊敬していたのですが、まだ、真の神様
だということは、知らなかったようです。すると
イエス様は、彼の質問に答えるために、まず彼の
よく知っているモーセの十戒の中の5～10戒を守
っているかどうかを尋ねられたのです。

「殺してはいけない、姦淫してはいけない、盗
んではいけない、嘘をついてはいけない、だまし
取ってはいけない、お父さんとお母さんを敬いな
い。」

い。これできていますか、と尋ねられると、彼
は、「先生、それなら全部、小さい時からちゃんと
守ってきました」と答えました。彼は厳しい親に
育てられて、他人に非難されたりしないほどに律
法を守ってきたのでしよう。でも、ちゃんとでき
ていると答えても、永遠の命を受け取る確信は
なかったようです。イエス様はこの青年を慈しん
で見つめ、「あなたに足りない一つのことがありま
す。あなたの持っているものを全部売り払って、
お金に換えて、それを全て貧しい人に与えてしま
いなさい」と言われたのです。これは、彼にと
って、びっくりする言葉でした。実は、彼は大変
なお金持ちで、たくさんの財産を持っていたので
す。ところが、イエス様の答えに従えば、貧乏に
なってしまうのです。とうとう彼は、非常に暗い顔
をして、そこから去って行きました。とても全て
の財産を手放せなかったからです。

モーセの十戒の1～4戒は、神様以上に大切な
ものがあつてはならないという戒めです。彼はそ
れを守っていました。彼にとっては、神様
よりも財産の方が大切で、財産を頼りにしてい
たのです。彼が永遠の命を得るのに不安を覚えてい
たのも、この点だったのです。

イエス様は弟子たちに、「財産のある者が、神の
国に入るのにはなんと難しいことだろう。らくだが
針の穴を通るより難しい」と言われました。お金
持ちは神様に祝福されている人だと思っていた者
たちはこれを聞いて驚きました。それでは一体だ
れが救われるのだろうか、疑問に思いました。
するとイエス様は、「わたしのために、また福音の

ために、何でも手放せる人は、この世で苦しみが
あつても、それ以上の報いが地上では百倍になつ
て返ってきて、天では永遠の命を受ける」と、教
えて下さいました。

（承）学ぶべき真理

まじめに律法を守ってきたから、天国にいける
わけではありません。神様を信じている人が天国
に入るのです。しかし、神様よりも大切なものが
あつて、それを神様のために捨てるのができな
いのなら、その神様より大切なものがその人の神
様です。それでは、その人は神様を信じていない
のです。神様は全ての必要なものは添えて与えて
下さいますから、神様を第一として全てを捧げま
しょう。すると、地上では百倍になって返ってき
て、天では永遠の命がいただけるのです。

（転）生活への適用

あなたにとって一番大切なものは何でしょう。
それをイエス様のために、他の人にあげなさいと
言われたら、あなたはすぐに従いますか。

結論

だれも自分の行ないで、永遠の命を手にいれる
ことはできません。イエス様を信じている人が、
永遠の命を持つのです。もしあなたに、神様より
大切にしているものがあつたら、あなたも神様を
信じていないことになります。神様は必要なもの
を全て与え、地上では百倍にして報いる方です。
神様を信じて全てを捧げ、永遠の命を得て下さい。

ワーク A

●導入のヒント

「私、お母さんのこと大好きよ。それに、この
くまのぬいぐるみもとっても大切なの」。でもちよ
っと待って下さい。お母さんよりも、またくまの
ぬいぐるみよりも、もっと大切なものはありませ
んか。

●ワークについて

みんなが今一番大切にしているものは何でしょ
うか。ワークに書いてある5つの絵の中から選ん
で下さい。他にもあれば、みんなで話しあつて下
さいね。

ワーク B

●質問1 ストーリーを話し合いつつ、富める青
年が望んでいた「永遠の命」について考えましょ
う。「永遠の命」はイエス様を信じることです。

●質問2 青年の心をしめていたものは「お金」
で、神様よりも大切なものでした。自分の心の中
に神様より大切なものはないかを考えましょう。

●質問3 イエス様に全ての解決があります。命
も財産も。ただイエス様について行きましょう。

●賛美歌

「ふくいん子どもさんびか18番」

●今日のお祈り 「神様、イエス様を信じるだけ
で永遠の命がいただけることを感謝します。全部
をささげてついていきます。」

ワーク C

●イエス様は全ての人に、「あなたの持ち物・財
産を売り払え」と言っておられるのではないこと
に注意しましょう。表面的にはそう言っているよ
うに思えます。確かに、この「ひとりの人」には
そう言われました。しかし、われわれ全ての者へ
のメッセージは、「あなたには足りないことが一つ
あるのではないか。それは、全身全霊で主を信頼
すること、主を最優先することである」というこ
とでしょう。

ワーク D

●質問1 「よき師よ」と主イエスを尊敬しても、
神として礼拝する信仰がないことがこの人の問題
です。戒めを守り、真面目に生きてきた自信があ
つたでしょう。神様と正しい関係にないことに気
づかせる必要があります。

●質問2 施しのわざを強要されたではありません
せん。「命以外のものなら、何でも自由にできる」
と思うほど、この人がお金を万能の神としている
ことに気づかせるためでした。

●質問3 執着しているものがあると、神様に信
頼して従うことができなくなる例を考えてみま
しょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 一人の人が、イエス様のもとに走りよって来
ました。この人は何のために主のもとに来たの
でしょう。

2 この人は、小さい時から律法を守っている人
でした。けれども一つだけ欠けがあるとイエス
様に言われました。それは何でしたか。

3 この人は、結局イエス様のもとを去って行き
ました。それはなぜだったのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 あなたは、永遠の生命を得るためには、そし
て救われるためには、良いわざをしなければな
らない、品行方正でなければならないと思つて
いませんか。

2 あなたにとって、一番大切なものは何ですか。
何かを持っているから、何かができるから、
あなたは救われるのでしょうか。

●話し合ってみよう

1 ここに登場する一人の人は、とても真面目な
人だっと思ひますが、はたして真面目だけで
救われるのでしょうか。

2 この一人の人は、真面目でたくさん資産を
持っていました。でも救いの確信はなかったよ
うです。救いの確信は何によって与えられるも
のでしょうか。

3 永遠の生命は、何によって与えられるのでし
ょうか。

聖書 マタイ11・25～30
週題 柔和で謙遜な主

序論

今週から5週間、主イエスが、「わたしは」と自分を表現しておられる所から学ぶ。まず第一回は、主の柔和と謙遜を表す箇所である。

一、重荷は取り去られない

今までの学びで何度もふれたように、主イエスを受け入れたのは、当時の貧しい人や罪人であった。△知恵のある者や賢い者△は、理屈をこねまわして、主イエスの権威を認めようとはしなかった。その代表のパリサイ人は、細かいところまで律法の遵守を強要し、まさに人々に△重荷△を負わせていたのである(23・4)。

そんな中、貧しい人々は生活の糧を得るため、過酷な労働を強いられつづけていた。実際に重い荷物を背負って一日中働いていた人々もあったろう。さらに、罪の阿鼻のために重い心を抱いていた者もいたに違いない。ここで、彼らは△幼な子△と呼ばれている。単純に神に信頼している人々をさしていると言えよう。自分の重荷を認めて、正直に主のみもとに来る人こそ、恵みにあずかるのだ。主は△すべての事は父からわたしに任せられています△と祈られた。自分が父なる神と人の間に立つ仲介者であることを宣言されたのだ。その方が、△重荷を負って苦勞している者△に對して、△あなたがたを休ませてあげよう△と言われる。

主は重荷を取り除かれない。取り除けるものなら重荷ではないのだ。人生には放棄できない、負わねばならない重荷がある。例えば、親であることはいくらそれが重荷でも、放棄できない。負いきらねばならない重荷である。しかしそれは嫌なものでもない。負いきる事が使命だから達成感もある。しかし、押しつぶされそうになったり、身動きがでなくなったりもする。そこで、主イエスがして下さるのは、重荷を負いきることができるよう、休みを下さるのである。

二、休みは主のくびきを負うこと

主が与えて下さる休みは、主と共にくびきを負って学ぶことである。くびきとは、二頭の牛をつなぐ木の板であり、それに綱をつけて鋤や荷車を引かせるのである。当時、農夫は若い牛と老練な牛とをくびきでつないで作業をさせた。そうするなら、どうすれば力が有効に出せるか、一頭では動かせない重荷をどうすれば動かせるか、運搬にはどこに危険があり、どこに間違った道があるかなど、若い牛に教えることができる。

主は、△わたしのくびきを負う△ようにと言われる。人間の重荷を△わたしのくびき△として、一緒に負って下さる。もはや自分だけで重荷をしようい必要はない。主が共におられるのだ。

三、主のこころは柔和

△わたしは柔和で心のへりくだった者である△とは、主の自己紹介である。柔和とは人を差別せずに受け入れることだ。主は、取税人、奴隸、異邦人、遊女、罪人を受け入れて下さった。あなた

は、柔和でない教師から学べるだろうか。できる子は受け入れ、できない子は受け入れない教師から学べるだろうか。また急に怒りだし、受け入れる時とそうでないときがある教師から学べるだろうか。主イエスは、全ての人を受け入れて下さる方である。怒るに遅く、忍耐の限りをつくして導かれる方である。だからこそ、私たちはこの方にくびきを共にして学べるのだ。

へりくだりとは、人を差別せずに仕えることである。主は、神である方なのに人となられ、十字架にまでつかれて、人に仕えた方である。あなたは、人に仕えることのできない教師から学ぶことができるだろうか。生徒ができればバカにする教師からは学ぶことができない。どんな学力の者をも、自分が踏み台になって押し上げ、仕えるような教師からなら、だれもが学べるだろう。主は「わたしは仕えられるためではなく、かえって仕えるために来た」と言われた。全ての人に仕える主だから、私たちは学ぶことができる。

結論

なぜ重荷を負いきれなくなるのか。それは自分が柔和でないゆえ、受け入れられない人や事があるからだ。また自分がへりくだらず、仕えることができない人や事があるからだ。主イエスに学び、重荷を共に負っていただき、その負い方を教えていただくなら、重荷を負いきることができ。また、主イエスのことく柔和でへりくだった者に交えられていくとき、重荷を負いきることができるようになる。

研究資料

(足立)

マタイはここでイエスがささげた小さな祈りを読者に紹介し、弟子たちに語った御言葉を続けている。この箇所は3部分で構成されている。第一にイエスは、彼が教えた内容が学者や知識人に関心されているが受け入れられないで、幼な子が受け入れることに、感謝を表している(25・26)。第二に彼は、御父と御子との間にある特別な関係を示す(27)。そして第三に彼は、ご自分に安息と平安を求める者へ招かれた人々を招いている(28・30)。最初の二つはルカ10・21と並行関係にあるが、招きはマタイにのみ見出される。

テキスト

25 そのときとは、以下に語る内容と前述のものが同じ期間のものであったことを示している。しかし厳密には結び付けられない。イエスの祈りは神を讃美すること始まっている。いつものようにイエスは神を父と呼ぶ(本福音書において44回出てくる。また、父と言う言葉は64回使われている)。神はイエス・キリストの父なる神である。天地の主とは、はるかかなたの暴君ではなく、地上のどこにあっても全てのものが敬意を払うべきお方であることを意味する。イエスは神が啓示される手段の故に、天の父に感謝している。それは神を知る方法が、人間の優秀性や知恵によらないといつて計画にあるから(参照1コリント1・18・19、2・6・8)。この主旨は、神を知ること

人間の知識や教育に依存しないといふことなのだ。霊的な理解は人の常識とは全く別のものである。幼な子の存在は、彼らが知性的熟練や身につけた深遠な探求方法によってではなく、単純にイエスに信頼することで、神を知るに至ることを教えている。単純な信頼こそ、私たちが最も謙遜になる道である。

26 父としての神のこころが繰返されている。卑しい者が神の国を発見できることは、みこころにかかっている。もし賢者がそれを発見できるならば、卑しい者と同様の方法にあずかることが主の御心なのである。

27 この節は、イエスと天の父との関係を詳述している点で、際立っている。特にイエスを単純に子と表現しているのは、24・36と一致する。もちろんイエスを神の子とする見解は、本福音書の中心にある(2・15、3・17、4・3、6、8・29、14・33、16・16・17、17・5、21・37等)。一方神を「アバ父」と呼ぶことは、イエスのユニークな性質であると認められる。そしてこの関係は、イエス自身の自覚の中心にあったと認められる。また、父なる神は子であるイエスを仲立ちにしてご自身を表した。イエスと父なる神は全ての知識を共有しており、互いを知っている。子が父を知らせなければ、人は決して父を知ることではできない。そして御子の本質的な事柄は、人間の概観では明らかにされなかった(参照ルカ10・22)。

28 28・30節はマタイ特有の箇所である。当時、人々はユダヤ教の律法主義の重荷に疲れていた。

その彼らをイエスは恵み深く招いている。わたしのもとにきなさいとは、天の父に、あるいは天の父の源に人を近づける唯一のお方はイエスであるという考えを示している。なぜならば父を知っている唯一のお方はイエスであり、イエスが父をあらわそうと選んだ者だけが父を知ることができるからである。その招きは全ての困惑する者に拡張されている。イエスは人生の重荷に疲れ果てている者全てを招いている。真の休息を与えるのはイエスである。

29・30 イエスは彼に従い、彼に仕え、彼から学ぶよう人々を招いている。くびきを負うという表現は、運ぶこと、または犁で耕すことからの隠喩である。くびきは旧約聖書では、時に抑圧の象徴であった(イザヤ9・4、58・6、エゼキヤ27・28章)が、神に仕える良い意味でも使われていた(エゼキヤ2・20、哀歌3・27)。新約聖書ではくびきは常に比喩として使われていて、束縛か、ある種の権威への服従を意味する。律法のくびきと類似した表現がユダヤ人の間では共通のものであった。イエスは律法学者とパリサイ人が人々の背に重い重荷を置いていると非難している(23・4)。そしてイエスは、わたしのくびきを負ってと語る。くびきとは本来荷を負いやすくする物である。イエスが言わんとするのは、律法の重荷を負われ、苦しめられている者たちと共に、自分が重荷を負うということ。しかもイエスのくびきは、柔和と謙遜である。そのイエスのくびきを負い、彼から学ぶ者に真の安息が与えられる。

●週題 柔和で謙遜な主
●聖書 マタイ11：25～30
●暗唱聖句 わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしに学びなさい。
●目標 イエス様が柔和でへりくだった方であることを発見し、この方と共にくびきを負うことを学ぶ。

導入

今週から、イエス様がどんな方を学びます。今日の箇所からは、イエス様が柔和で心のへりくだった方であることがわかります。

(起) ストーリーを語る

当時の人々は、律法をちゃんと守らなければならぬと命じられており、それは重荷でした。毎日の食物を得るための労働も重荷でした。また、犯してしまった罪のために、心に大きな重荷を抱えている人もありました。そんな人々に対して、イエス様は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい」と招かれました。「重荷」とは、必要で放り出すことができないけれど、人を疲れさせてしまうものです。たとえば、大人にとっては、仕事や子育てが、子どもにとっては勉強が重荷でしょう。必要で放り出すことができず、しかし疲れさせられるものです。よく注意して下さい。イエス様は「重荷を取り除いてあげよう」とは言われていません。むしろ

重荷を負いきることができるよう、「休みを与えよう」とおっしゃっているのです。休みは、放棄できない重荷を、しっかりと負いきるために与えられるものです。しっかりと休めば、力がついて再び重荷を負うことができるようになるからです。

そこで、イエス様は勧められました。「わたしのくびきを負って、わたしに学びなさい」。

「くびき」とは、横に並んだ2頭の牛をつなぐ木の板のことです。この板に綱を付けて、荷車を引かせるなどの仕事を牛にさせます。仕事に慣れない若い牛と、仕事になった牛をつなぐと、若い牛が仕事の仕方を段々覚えていきます。そして、二頭が力を合わせれば、大きな力が出せるようになります。このように、イエス様は、私たちと一緒に、どんな重荷でも一緒にやろう、やり方を教えてあげるよと語っておられます。自分一人の力は限りがありますが、イエス様が一緒ならできないことはないのです。

そこで、イエス様は自己紹介されます。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい」。

「柔和」とは全ての人を受け入れるということです。「へりくだる」とは全ての人に仕えるということです。イエス様はデキル子だけを受け入れるイヤな先生ではありません。どんな弱い人、ひねくれた人、罪人、遊女、異邦人、取税人も受け入れて下さいます。またイエス様は、できないことをバカにするイヤな先生ではありません。どんな状態の人にも仕えて、その人をできるようにして下さいます。ですから、私たちはイエス様とくび

きをいっしょにして、イエス様に学ぶことができるのです。

(承) 学ぶべき真理

私たちには負いきらなければならない重荷があり、それを負いきるためには休みがいられます。その休みは、イエス様と一緒に重荷を負うなら与えられるのです。イエス様は柔和でへりくだった先生ですから、どんな人も受け入れ、どんな状態からも助け出して、しっかりと重荷を負えるように教えて下さいます。でこぼこ道ならこうして進む、坂道ならこのように登る、暗い道ならこれに注意する、分かれ道ならこっちに進むなど、イエス様と一緒に重荷を負うことによって学べるのです。

(転) 生活への適用

子どもにだって重荷があります。例えば学校へ行くこと、家業の手伝い、兄弟の世話などです。では、あなたにとって重荷って何でしょうか。それが重くて負いきれないと思ったことや、放りだしたいと思ったことはありませんか。

結論

重荷をしっかりと負うために、イエス様と一緒に負いましょう。「私はできそないだから、神様に見捨てられている」なんて思わないで下さい。イエス様は柔和で、全ての人を受け入れて下さいます。手遅れということはありません。イエス様はへりくだっておられ、全ての人に仕えて下さいます。そして、しっかりと重荷が負えるように、あなたと一緒に重荷を負って下さるのです。

ワーク A

●暗唱聖句 (2月10日～3月10日)

わたしは柔和で、心のへりくだった者である。

(マタイ11：29)

導入のヒント

イエス様ってどんな人ですか。そう。イエス様は神様の子ともですね。この他にイエス様について何か知っていることはありますか。優しい人ですか。それとも怖い人ですか。今日はイエス様のことをもっとよく知しましょう。

ワークについて

イエス様は私たちといつも一緒にいて下さるということをお忘れないために、イエス様の横の空白の部分に、イエス様と手をつないでいる自分の絵を書き込みましょう。

ワーク B

- 質問1 イエス様が私たちに下さる「休み」とは、重荷を取り除くことではなく、共に負って運んで下さることです。イエス様が一緒に下さるのです。
- 質問2 主の示された「くびき」について確認します。どんな重荷も「わたしの荷」とイエス様が負って下さることは、すばらしい恵みです。
- 質問3 勉強のこと、友だちのこと、家族のこと、どれもイエス様は共に負って下さいます。
- 賛美歌 「いつくしみふかき」
(こどもさんびか61番)

ワーク C

●今日のお祈り 「神様、重すぎると思いつ時でもイエス様が一緒に負って下さることを思い出させて下さい。イエス様、本当にありがとうございます」。

●メッセージ例の中で語られているように、イラストを見ながら、イエス様と手をつないで歩いてみて下さい。自分に当てはまるものがそれぞれの生徒にあるはずですから、その出来事の具体的なことも聞いて、話し合えばよいですね。イエス様がどの場面でも一緒にいて下さり、手を握って下さることを示しましょう。くびきを負うことは、このようにいつも共に歩いて下さるという意味です。

ワーク D

- 質問1 重荷とは何かを考えます。聖書時代のこと、生活の中で感じることなど。また、押し付けられたもの、負うべき責任など。この方向性から多少ずれてもいいと思います。主が下さる休みは、重荷を負えるように元気にしてくれませう。
- 質問2 柔和と謙遜は、愛にあふれた、信頼できる安らぎです。十分に説明して下さい。
- 質問3 くびきとは、新しく課せられるものではなく、主と共に負って下さる約束です。
- 質問4 一人で背負い込んでいることに気がつき、約束を信じて委ねる信仰に導いて下さい。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 イエス様の時代の人々は、様々な重荷があったようです。どんな重荷があったでしょうか。
- 2 イエス様は「わたしのくびきを負いなさい」と言われました。この場合のくびきとは何のことでしょうか。
- 3 またイエス様は、「休ませてあげよう」と言われました。この場合の休みとは何でしょうか。

●自分にあてはめてみよう
1 あなたには、現在かかっている重荷(罪の呵責、つらいこと、悲しいこと、苦しいこと等)がありますか。
2 あなたは、その重荷を一人で抱えてはいませんか。
3 イエス様は、「わたしのもとに来なさい」と言っておられますが、あなたは、イエス様のもとに行って、その重荷を降ろしていますか。

●話し合ってみよう

- 1 私たちは、自分の重荷と、他の人の重荷をすべて解決することができるでしょうか。できないとしたらそれはなぜでしょうか。
- 2 イエス様は、「あなたがたを休ませてあげよう」と言っていました。イエス様は私たちの重荷を解決して下さいます。どのようにしてでしょうか。
- 3 イエス様は、「自分で柔和と言われました。その柔和とはどんなことでしょうか。

聖書 マタイ12:1-8
週題 安息日の主

序論

安息日に仕事をしないことは、当時のユダヤ人にとって、律法の規定の中で大切なものの一つだった。主の弟子たちが安息日に畑から穂を摘んで食べたことを目撃したパリサイ人たちは、それを非難した。主はそれに対して、旧約聖書の3つの箇所を引用して応答された。そこにはまた、ご自分がどういう方を示す意図があった。

一、人の必要を優先される神

律法は、旅人が道のそばの畑から穂を摘んで食べることを許していた（申命記23:25）。空腹だった弟子たちがそうするのは、決して律法違反ではない。そのこともよく知っている律法の専門家のパリサイ人がこれを問題にしたのは、穂を摘んで実と殻とを分けることを農作業と考えたからである。これらは、安息日に禁じられている「仕事をすること」と指摘したのだ。

しかし主は、サムエル上21章の記事を引用し、ダビデの一行が八祭司たちのほか、自分も供の者たちも食べてはならぬ供えのパンを食べたことを示された。それは、レビ24・9の規定を破ることである。しかし神は、彼らを罰してはおられない。つまりこの記事は、身勝手な欲望でないかぎり、人間の必要は儀式的な規定よりも優先することを教えているのだ。けれどもパリサイ人たちは

律法の形式を守ることにだけに必死となり、聖書に書いてある記事の真意を全く理解しなかった。人間が律法のためにあるのではなく、律法が人間のためにあるのである。人の本当の必要のためには律法をしゃくし定規に当てはめてはならない。

二、神のための奉仕を優先される神

さらに主は、安息日に宮仕えをしている祭司たちについて言及しておられる。彼らは安息日に様々な仕事をしているのだ。それはレビ24・8や民数記28・9を見るとはっきりとわかる。彼らがそれをしていても律法違反にならないのは、神を礼拝するために必要な奉仕だからだ。

その直後の、あなたがたに言っておく。宮よりも大いなる者がここにいて主の言葉は非常に重要である。祭司たちが安息日に奉仕をすることが律法違反にならないとすると、宮よりも偉大な救い主に仕える者たちが、安息日に仕事をしたからといって、とがめるべきではない。ここで主は、ご自分の神性をお示しになっているが、彼らにはそれは理解できなかったであろう。律法が預言していた方が来られたのなら、この方が律法に優先することは当然である。神を第一とする奉仕のためには、律法は道を譲るのである。

三、あわれみを優先される神

最後に主は、ホセア6・6を引用されている。あわだしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない。この聖句は、かつて主が本書の著者である取税人マタイを弟子に召されたときに用いられている（9:13）。マタイには忘れられ

ない言葉であつたろう。これこそ律法の精神を表している。律法は決して人を不自由にし、重荷を負わせるためのものではない。律法に従うなら人は幸せになり、社会も安定する。神は人間をあわれみ、本当に幸福になってもらいたいと願って、律法を与えられたのである。

また律法は人を悔い改めに導く養育係である。いけにえの制度が定められたのは、「罪が赦されるには、自分の命をささえるものによる犠牲が必要だ」という真理を教えるためだった。だから、しみも傷もない一番良い家畜が罪の身代わりとなって殺された。神は、いけにえを求めておられるのではない。いけにえをする必要がないように、人間があわれみをもって互いに仕えることを望んでおられるのである。

律法の細かい点まで拘泥するなら、その違反である「罪」は無限に拡大し、さらに互いに相手の「罪」を指摘しあうなら、あわれみはどこかに消え去ってしまう。神がそんな姿を望んでおられないことは明らかだ。神は、あわれみを好む方である。律法を細分化して罪を指摘しあい、いけにえをささげ続けることを望んではおられない。

結論

人の子は安息日の主である。神は、安息日を人の必要のため造られた。安息日に主を礼拝するなら、安息が私たちに与えられる。また、安息日には、主のために過す事が最優先される。主のために礼拝をささげ、主のあわれみによって罪を赦され、互いにあわれむ者となる日にしよう。

研究資料

(足立)

イエスは既に敵対する勢力に直面していた（マタイ9・3、11、14、34、10・25、11・19）。そしてここでは安息日論争という具体的な問題が浮上している。この事件は、イエスの敵対者たちがイエス暗殺計画を実行するのに十分な憎しみをかき立てた（12・14）。

安息日に関するユダヤ人の行動規則は、かなり詳細なものであった。またユダヤ人たちは、安息日遵守を極めて重く受けとめていた。マカベア朝時代、敵が安息日に攻めてきたとき、彼らは防戦して安息日を破るよりも、男も女も、そして子どもたちまでも自分たちが虐殺されるに任せた（外典1マカバイ書2:31-38）。ユダヤ人は安息日を破るよりも苦しみを選んだ。

4つの福音書から明らかのように、イエスは、安息日を正しく用いるために、パリサイ人たちと継続した議論を持った。そして彼は、人々を本末転倒した多くの規則から解放しようとした。その日は、神を崇めるための日であり、善を施す日であった。また、人々を元気づけるための日であり、彼らの必要を満たすための日であった。しかしパリサイ人にとっては、第一に、おきてを守るための日であり、彼らはそのことで神を崇める要望を表現していた。ここでイエスはダビデの例を引き出し、正しい安息日の使い方とパリサイ人のそれとは大きな違いがあることを教えている。

テキスト

1 そのころとは一般的な表現で、直前に出てきた期間に結びつけられる場面設定を意味する（参照3・1、11・25、14・1）。マタイはどこでイエスが行動していたかを伝えたいのではない。ただその日が、休息と礼拝の日である安息日であった事実の伝達が大切。そしてここでは、11・28-30に出てきた、重荷を負わせるパリサイ人の規則の事例が導入となっている。弟子たちが麦の穂を摘んで食べたのは自分たちの空腹を満たすためであって、安息日の諸規則を破るための悪意からではない。

2 マタイはパリサイ人たちがどこから登場してきたかを記していないが、明らかに彼らはイエスと弟子たちの行動を見張る位置にいた。彼らは弟子たちにはなく、イエスに不平を言っている。弟子たちが他人の麦畑で穂を手で摘んだことが問題なのではない（申命記23・25）。その行為が安息日になされたことを問題視していた。

3-4 イエスはパリサイ人たちに、逆に質問する形で問いかけられた。あなたがたは：「読んだことがないのかとは、お互いの共通の土儀である聖書そのものに集中させるためである。イエスはダビデと彼の部下が空腹の時、彼らがした行為に言及する。ダビデとその部下は麦畑ではなく、神の家にはいった。それだけでなく、彼らは安息日に供えのパンを食べた（サムエル上21・1-6）。それらのパンはアロンとその子どもたちに属するものであり、祭司以外の者が食することは禁じら

れていた（レビ記24・5-9）。イエスはこれらのことを認めた上で、聖書はダビデの行為を断罪していないと主張している。つまり、人の切迫した事情は安息日の律法に優先すること。

5 イエスは再度聖書に訴えている。一切の労働が禁じられていた安息日に、祭司だけには例外が認められていた事実（民数記28・9-10）。このことは、安息日の律法が画一的に適用されないことを示していると言えよう。

6 宮よりも大いなる者とは、イエス自身のことである。イエスと彼の宣教において、神の新しいみわざが旧約聖書時代の神殿祭儀をしのぐものとして始まった。神殿は民の間で神の臨在の中心であったが、今やイエスの中に、また神が見出されるべき彼の新しい共同体の中にその中心がある。イエスは、メシヤであるご自分の中にこそ神の臨在が具体化していることを提示された。

7 第3の議論は、既に9・13で見られたホセア6・6へのアピールという形で繰り返される。後期預言者からの引用の関連性は、パリサイ人の律法への態度に当てはまる。ホセアの時代には、表面的にかつ偽善的に祭儀を司る者たちの態度が批判されていた。ここでイエスは、パリサイ人たちが律法の重要性を十分把握してこなかったことを断言している。彼らの解釈は、先祖の言い伝えの積み重ねであった。パリサイ人には、神のあわれみという視点が欠落していた。

8 人の子は安息日の主であるとは、イエスが安息日律法の真の解釈者であることの宣言。

●週題 安息日の主

●聖書 マタイ12:1-8

●暗唱箇所 人の子は安息日の主である。

●目標 イエス様は安息日の本来の意味を

体現しておられることを発見する。

導入

安息日は、神様を礼拝し、全ての仕事を休む日です。パリサイ人は大変厳しくこの戒めを守り、違反者に監視の目を光らせていました。しかし、本当にその戒めを守ることが、神様を喜ばせることなのでしょうか。

(起) ストーリーを語る

ある安息日のことです。イエス様は弟子たちとザワザワと揺れている麦畑の畔道を通っておられました。弟子たちはとてもお腹がすいてきて、道端に生えている麦の穂を摘んで、手の中で揉んで穀を取り、生のままで食べ始めました。これを見たパリサイ人たちは、さっそくイエス様に、「こらんなさい。あなたの弟子たちが、安息日にしてならないことをしています」と、とがめてきました。律法では、旅の途中に畑の麦を摘んで食べることは許されていました。パリサイ人たちが問題にしたのは、安息日に弟子たちが、もみ殻を取り除くという農作業をしたことで、それは律法に違反していると言っているのです。

これに対してイエス様は、旧約聖書の記事を思

い出さないとおっしゃいました。それは昔、ダビデがサウル王から逃げていたときのことです。

空腹になったダビデは、供の者たちと、神の家で祭司しか食べてはならないパンをもらって食べています。そして神様は、そのことをとがめず、許しておられるのです。これは、律法は人のためにあるのであって、人が律法のためにあるのではないことを表しています。何でもしなす定規に「違反だ」と裁いてはいけません。人のわがままではない必要は、律法より優先するのです。

もう一つイエス様は注意されました。それは、何の仕事もしない安息日にも、祭司は仕事をすることが認められているということです。神様の宮で奉仕する人が律法にしばられないのなら、神の宮よりも大切な救い主であるイエス様に従っている弟子たちも、律法にしばられないはずで、す。そして、「宮よりも大いなる者がここにいます」とおっしゃって、ご自分が律法より優れた者であることを示されたのです。

さらにもう一つ、イエス様は注意されました。それは、ホセア書の中の「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」という御言葉でした。この言葉の意味を本当に理解していたなら、弟子たちの行為をとがめたりしないというのです。神様は儀式を求めておられるのではなく、自分の命を支えている羊をささげることでした。これは神様が私たちの罪を、私たちの命を支えているイエス様の犠牲によって赦して下さることを表しています。いけにえをささげるのは、その儀

式が大切だからではなく、神様が罪を赦して下さるためにどれだけあわれんで下さったかを悟るためでした。律法の儀式や規定ではなく、その本来に意味することが大切なのです。律法が本当に意味しているのは、イエス様です。

(承) 学ぶべき真理

イエス様は安息日の主です。神様は人類に規則を作って、窮屈な生き方をさせようとしておられるわけではありません。律法は人類に平和で平安な生涯をあたえるためにあるのです。律法は人のためにあるのであって、人が律法のためにあるものではありません。そして、律法の本来の意味は、イエス様であり、イエス様に導くためのものです。イエス様は安息日の主です。安息日も律法もイエス様を表しています。イエス様によって、本当の安息が与えられることを意味しているのです。

(転) 生活への適用

あなたは、今日の礼拝に來ない人を「だめな人だ」と裁いてはいませんか。では、安息日をいいかげんにして、神様を礼拝しなくてもよいのでしょうか。裁いても、いいかげんにしてもいいかもしれません。私たちは安息日にイエス様を覚えて礼拝し、イエス様から安息をいただきましょう。

結論

律法の本当の意味はイエス様を表すことです。人々をイエス様に導くためのものです。安息日は、イエス様を覚え、イエス様によって安息を得るための日です。イエス様は安息日の主です。

ワーク A

●導入のヒント

「毎週、教会学校へ行くのは大変だな」と思っているお友だちはいませんか。反対に、「教会学校に行くのが楽しくて仕方がない」というお友だちはいませんか。楽しいと思うお友だちは、何が楽しいのでしょうか。

●ワークについて

迷路を通して教会に行きましょう。鉛筆を持って道をたどらせるのはどうでしょうか。よいドーンで競争しても面白いと思います。

ワーク B

●質問1 律法では、旅行者が畑の麦を食べても許されていたのですが、安息日だから、と責めたパリサイ人。「きまり」を優先し、「思いやり」を忘れるパリサイ人について考えます。

●質問2 主の教えは「律法よりも愛」です。では律法やルールは何のためにあるのでしょうか。話し合いましょう。それは通じるべです。

●質問3 安息日は主の日です。守りましょう。

●賛美歌 「あいの神」

(ふくいん子どもさんびか81番)

●今日のお祈り 「神様、真心から礼拝をささげる私たちにして下さい。安息日はイエス様を第一にして過ごせるよう、励まして下さい。」

ワーク C

●日曜日は、普通の人が考えているようなお休みの日ではなく、レジャーの日でもありません。また、礼拝出席は律法ではありません。出席しなければ罰が下るわけでもないのです。礼拝の中で、主の御臨在と主の恵みにあずかり、主と交わることに、主にある兄弟とも交わります。これを慕い求めて、自発的に出席することこそ、安息日の本義です。

●余裕があれば、創世記2章1-3節の安息日の起源も、聖書を聞いて話すと良いでしょう。

ワーク D

●質問1 麦の穂を摘んで食べることは許されていましたが(できれば申命記で確認して下さい)。その行為が、安息日に禁じられている農作業と見なされ、違反とされたのです。人を生かすべき律法が人を損なうのでは、意味がありません。

●質問2 安息日に礼拝を司る働きは、不可欠です。神を神として礼拝することが、何よりも重要なのです。礼拝されるべきイエス様なら、なおさら律法に縛られることはないでしょう。

●質問3 安息日のことをもう少し詳しく学びながら、礼拝を第一とする信仰生活が確立するように導いて下さい。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 安息日にイエス様の弟子たちが麦の穂を摘んで食べたことを見てパリサイ人は責めました。なぜ責めたのでしょうか。

2 イエス様は、そのことで弟子たちを責められたでしょうか。

3 パリサイ人は律法を形のうえで守ることに一生懸命になっていたようです。なぜそうしていたのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 あなたは、規則などは人のためにあると思いますか。それとも規則のために人がいると思いますか。

2 あなたは、律法あるいは規則を窮屈だと思っただけではありませんか。

3 あなたは、イエス様が、私たちを不自由にしようとしておられると思いますか、それとも自由にしようとしておられると思いますか。

●話し合ってみよう

1 イエス様は、パリサイ人が律法を形だけで守ろうとしている誤りを指摘されました。それでは、本来、神が私たちに律法を与えられた意図は何だったのでしょうか。

2 旧約時代は、神にいけにえがささげられていました。それは何のためだったのでしょうか。

3 私たちが安息日にすべきことは、どんなことでしょうか。

聖書 ヨハネ5・17・24
週題 父とひとつとなつて働く主

序論

今週の箇所の直前で、主イエスは安息日に病人を癒されている。この場合にも、ユダヤ人は主を非難した。癒しが安息日に「仕事をすることだ」と考えたからだ。しかし主は、この出来事をきっかけとして、「自分が父なる神と一つであること」を公言されたのである。

一、父と子の一致

ユダヤ人は、神に「われらの父」と呼び掛けることはあつても「わたしの父」と言つことはほとんどなかった（レオン・モリス『ヨハネ福音書』309頁）。ところが主イエスは、父わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と大胆に仰せられた。ここには、天地を創造された「わたしの父」が今も働き、人類を救おうとしておられるから、安息日であってもその子が苦しむ人々を癒すのは当然であるという意味がこめられている。それを聞いて、ユダヤ人たちはますますイエスを殺そうと計るようになった。主の言葉は父自分を神と等しいものとしてすることに他ならなかったからである。

主イエスは、神のひとり子である。そして父なる神と子なる主イエスは、完全に一致しておられる。父は、なされることをみな子にお示しになり（20節）、父と子は共に働かれる（17節）。父と子

が一致して人類の救済にあたっておられることがここでわかる。

二、動機の一致

神を父わたしの父と親しく呼び掛けられた主イエスだが、決して傲慢な方ではない。父なる神に服従される謙遜な方である。だから、父は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない」と明言された。つまり、主イエスがされる全てのことは、父なる神を動機としているのである。

主イエスは父なる神を示された方であるが、常に自らを父よりも低い者としておられる。そしてこれこそ受肉された神である主イエスの行ないといふ力の秘訣だった。バックストンは、「只今人間の如くに、少しも力のなきものの如くに父なる神の力を依頼し給いました。けれどもこれは主の行ないの秘訣です」と言つ（『ヨハネ伝講義』98頁）。この態度こそ、主イエスが父なる神と等しい方であることを示している。自分の意志で行うのではなく、常に父なる神のされることを見て、そのとおりにされるからである。父は子を愛して、自らなさることは、すべて子にお示しになるからである」と言われるように、父なる神と子なる主イエスとの間には、親子の一致があるからこそ、動機の一致もあった。

自分のしたいことをするという快楽的動機でもなく、しなければならぬからするという律法的な動機でもなく、父が働かれるから私も働くという動機こそ、私たちが必ず持つべき動機だ。キリ

ストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのである。（Ⅱコリント5・15）

三、目的の一致

父なる神は、万物に命を与え、また滅ぼす権威をもつお方であることは、ユダヤ人の共通認識であつた（申命記32・39）。しかし主は、父もまた、そのころにかなう人々に命を与える」と仰せられ、また、父さばきのことはすべて、子にゆだねられた」ともおっしゃった。これは、主が父なる神と等しい権威をもたれていることの宣言である。それゆえ主は、父わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っている」と言つことができた。父なる神の御心も、子なる神の御心も一つ、全ての人が救われて永遠の命を持つことである。父と子が一致して、そのひとり子をあたえるという犠牲を払って、この目的をはたそうとしておられる。私たちは、そのみわざを信仰によって受け取るのみである。

結論

主イエスは父なる神と一つとなつておられる。父と子が一つになつて、動機を一つにし、目的を一つにして、犠牲を払って人類の救いに取り組んで下された。このことがあつたので、信じる者はこの恵みを受け取れる。そして今度は、信じる者が主と一つになつて奉仕する番なのだ。

研究資料

(足立)

共観福音書は、安息日におけるイエスの行動が論争の焦点となつてゐる出来事を幾つか記している（マルコ2・23・3・6、ルカ13・10・17、14・1・6、参照マタイ12・1・14）。全ての福音書は、安息日に対するイエスとユダヤ人指導者間の議論が大変激しいものであつたと報告している。彼らは、イエス殺害をほめかす言葉さえ発している。ヨハネ5章でも、ヘテスタの池での病人の癒しをめぐり、安息日論争が取り上げられている。ユダヤ人は、安息日の労働に関して39条に及ぶ規定を持っていた。それによると荷物を運ぶことは禁じられていたので、床を取り上げて歩いた男の行為は、律法違反ということになった。ただイエスは、ここでその問題をイエスと父なる神との関係に発展させ、父が働かれるなら安息日に自分がとる行動は正しいと主張するのである。

テキスト

17 わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである イエスの答えは、他の安息日論争の記事で彼が示した内容とは、全く違つたものである。イエスが安息日を破るかどうかは、神が継続して働かれるという点で全てが一致している。それを当然のこととした上で、イエスは自分自身に適用している。ここでの彼の防御は、自分と父なる神との親しい関係に基づいている。父なる神は救済において万物が完成するまで働か

れるお方である。その意味で、イエスも父とともに働かれる。安息日は万物の完成を祝う日である

（創世記2・1・3、出エジプト20・11）から、イエスも罪によつて破壊された世界で万物の完成に向かつて働かれる（参照5・36）。7・21・24から考えるなら、安息日はイエスの宣教のもとで人に全身の回復を与える日になつてゐる。

18 イエスの敵対者たちは即座にイエス殺害計画を練るが、その理由には彼が神を「自分の父と呼んだ事実も含まれてゐる。前節でイエスは神に対して、「わたしの父」と言つ表現を使つてゐる。共同の礼拝において、ユダヤ人は時々「私たちの父」と神のことを呼んでいた。しかしイエスが神を自分自身の父として個人的に呼び掛けたのは、イエス自身が主張する「父と子」というユニークな関係を表すためであつた。

19 よくよくあなたがたに言つておく（1・51、5・24、25、6・26、32、47、53、8・34、51、58、10・1、7、12・24、13・16、20、21、14・12、16・20、23）。イエスは父との一体性を強調している。御子は御父に従属している。彼は御父の御旨と目的から独立した行動をとらない。本福音書を書いてイエスは、御父の御旨を行うことが自分の業であると継続して断言している（4・34、5・30、8・28、12・50、15・10）。性質の同等性、目的のアイデンティティ、そして御旨への服従は相互に関係がある。ヨハネは、イエスを神の奴隷としてではなく、神の御子として提示している。しかも聖なる目的の完全な主体者として、

聖なる「性質の完全な啓示者としてである。

20 御父と御子の間にある関係の打ち明け話は、更なる段階に進んでいる。父は子を愛してとは、御父が御子をお愛さなくなることは決してないという意味である。主人と奴隷、雇用者と従業員ではなく、愛によつて一体とされている関係である。21 御子は御父によつて権限を与えられている。神は命の源である。彼だけが物質的世界の過程を逆転させる力を保持しておられ、死から命を引き出すことができる。その至高の力を御父は御子に授けている。この力はファザロの復活という最後のしるしで実証されている（ヨハネ11・41・44）。

22 話題はさばきに移つてゐる。御子は最後に審判を与える権威をも授けられている。神は全地をさばくお方として長く認められてきた（創世記18・25）。しかしここでは、御子がさばきの立場にたつことを主張している。これは御父から独立してというのではない。ここでも一体である。

23 御父が御子に全てのさばきを委託した理由がここに明白にされている。それは、全ての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。逆に言えば、御子に権威が授けられたゆえに、彼は御父と同等の榮譽を正しく主張することができる。

24 御父と御子との一体性は、人の救いの方法においても見受けられる。よくよくあなたがたに言つておくとは、極めて重要な発言の導入となつてゐる。祝福を受ける人は、御子の御言葉を聞き、御父を信じる人である。今、永遠の命を持つ者は永遠に安全である。

- 週 題 父とひとつになつて働かれる主
- 聖 書 ヨハネ5・17、24
- 暗唱聖句 わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである。ヨハネ5・17
- 目 標 イエス様は、父なる神と一つになつて働かれたことを発見する。

導入

イエス様はベテスダの池で、38年間も病気で動けなかった人を癒されました。しかし、それは安息日だったので、パリサイ人は律法に反している、イエス様を非難しました。そして彼らは、このような行為を堂々と行なうイエス様に、とても腹を立てて、イエス様を迫害し始めたのです。

(起) ストーリーを語る

イエス様は、彼らに言われました。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」
ユダヤ人は父なる神様のことを「私たちの神」とは言いましたが、「私の神」と呼ぶことはほとんどありませんでした。しかしイエス様は、神様を「わたしの父」と呼ばれたのです。これは、天の父である神様が、イエス様のお父さんであり、イエス様自身も神であるという意味です。これを聞いたユダヤ人はますます怒り、イエス様を殺してしまおうと計画するようになりました。

イエス様がここで言われたのは、「わたしの父

である神がこの世界を創造し、支え、今も人類の救いのために働いておられる。だから、子であるわたしも、父の働きと一緒にする」ということです。イエス様と父なる神は一致しておられます。親子が一つとなつて、働いておられるのです。

◆ 動機 ◆ まだイエス様は彼らに、「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない」と言われました。

自分勝手に何でもするというのは、イエス様の方法ではありません。イエス様は、真の神でありながら、神の子として、絶えず父なる神に従う態度をもっておられました。父なる神様はイエス様に、なされることをみんな示され、イエス様もその通りなさいます。イエス様の動機はいつも「父がこうされるから自分もする」でした。皆さんの動機は何ですか。例えば、自分がしたいから、しないと叱られるから、みんなしているからなど、いろんな動機があります。神様が働いておられるから働くという動機が、イエス様の動機でした。

◆ 目的 ◆ イエス様は、「父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのころになう人々に命を与える」とも仰せられました。
ユダヤ人は、神様が全てのものに命を与える方であるとともに、滅ぼしてしまわれる権威も持つておられることを信じていました。しかし、今や神の御子のイエス様が、父なる神様から権威を与えられて、御心になう人に永遠の命を与えるようになったのです。そして、最後のさばきのこと

もイエス様に任されているのです。
父なる神と子なるイエス様の御心は一つ、人々

が一人も滅びないで永遠の命を持つことでした。父と御子が一つとなつて、今に至るまで働いておられる目的は、人類の救いなのです。

(承) 学ぶべき真理

イエス様と父なる神は、一致しておられます。動機も目的も一致しておられます。父が働いておられるから御子も働き、父のされることを見て御子が行なうのです。そして父と御子が一つとなつて働かれるのは、私たちの救いのためなのです。

(転) 生活への適用

皆さんは、一致して何かをしたことがありますか。スポーツなどは、チームが一致していないとなかなか試合に勝てません。同じサッカーをしていても、動機と目的が違うと一致できないことがあります。健康のためにしているのと、将来プロになるためにしているのでは動機も目的も違い、一致できないことがあります。

結論

イエス様と父なる神は一致しておられます。そして一つになつて、私たちの救いのために働いておられます。私たちもまた、この一致の大切さを覚えなさいといけません。私たちにしても、イエス様を信じるということは、イエス様と一つになることです。そして私たちもイエス様につながっていないければ何事もすることができないのです。私たちは、イエス様が父と一つであったように、イエス様の御心を知り、イエス様と共に働いてイエス様と一つになりましょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 ユダヤ人たちは、ますますイエス様を殺そうと計るようになりましたが、それはなぜだったでしょうか。
- 2 イエス様を、聖人の一人とか、偉大な道徳家と考えている人が多くいますが、イエス様はどのような偉人の一人でしょうか。
- 3 イエス様の行ないと力の秘訣はいったいどこにあったのでしょうか。
- 自分に当てはめてみよう
- 1 イエス様は、「自分を神と等しいものとされた」と書かれています。もしこれがうそなら、イエス様は詐欺師か、誇大妄想家になります。あなたはイエス様をどう思いますか。
- 2 イエス様は、「自分からは何事もすることができない」から、父なる神様に従われました。あなたはイエス様のように神様に信頼して、従っているでしょうか。
- 3 イエス様は、父なる神様のなさることを見ていると言われました。これはどういう意味でしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 イエス様は、「わたしの父は今に至るまで働いておられる」と言われました。では、父なる神様はどのように働いておられるでしょうか。
- 2 イエス様の言葉を聞いて神様を信じる者には、何が与えられるでしょうか。

ワーク A

● 導入のヒント

おもちゃ屋に行って、お父さんに買ってもらうおもちゃを選びました。その時、「これにしようね」と話してもないのに、兄弟で同じものを選んだことはないですか。このようなことを、一致すると言つのです。そして神様は、みんなが一致することを喜んで下さいます。

● ワークについて

4枚の絵を使ってゲームをしましょう。まず絵に色を塗って、切り抜きます。できた4枚の絵を手にとって立って下さい。先生が1枚の絵を見せまから、すぐにそれと同じ絵を選んで、高く挙げましょう。間違った人は座ります。さて、だれが最後まで残るかな。

ワーク B

● 質問1 御言葉迷路をたどり、今日の暗唱聖句を記入しましょう。イエス様は神様のことを「わたしの父」と親しく呼ばれました。そして、心を一つにし、共に働いて下さっています。

● 質問2 イエス様が神様の心と一つとなつて歩まれたように、私たちも「御心を行なう」者でありたく願います。イエス様のために「わたしにできること」を考えてみましょう。

● 賛美歌 「けさもわたしの」

(こどもさんびか4番)

● 今日のお祈り 「神様、イエス様のように神様

の御心を知り、それを実行できる子どもにして下さい。」

ワーク C

● イエス様は、父なる神様がなさると同じようになされること、また、私たちもイエス様と同様に、イエス様がなされたようになすべきことを確認します。

● 4問目は、4つの行ないにおいて、いずれも、神様、イエス様、わたしの三者は同じようにすることを書き込みます。同じことを書くのを面倒がらないで下さい。何度も書くことによって、その大切さを印象づけられると思います。

ワーク D

● 質問1 神の子の宣言です。現代でも受け入れがたいことでしょう。十字架の救いを明確に示すため、人に理解されなくても示すべき事でした。(※は理解力に応じて用いて下さい。)

● 質問2 子として、父の御心を従順に行なわれました。父と子の関係は、深い人格的な交わりによって一つとされています。

● 質問3 子によって、父があらわされます。子によって救いが私たちにも与えられました。イエス様を信じることは、神様の救いを信じることです。

● 質問4 父なる神様と主イエスが人格的な愛の交りを持たれたように、神様の救いにあずかった者はこの神様の愛の交わりに入っています。主の御心を知り、それに従えるように導いて下さい。

聖書 ルカ9・28～36
過 題 救いを完成する主（変貌の山）

序論

主イエスは、様々な言葉で自分が何者なのかを語られてきたが、本日のテキストは、現実の主の姿が変えられた出来事である。これは、一時的に主の本来の姿が示された出来事であり、それまで人々が見てきたのは、主が「人の子」として生きておられた姿だったと言える。

今回も主は八折るため、山に登られた。主の姿が変えられたのは、まさに八折っておられる間に、神との交わりにおいて、主の模範である「キリスト」の姿を見ることができた（小島全集6巻324頁）。この出来事で、主はいったい何を示そうとされたのだろうか。

一、十字架による救いを示す

共観福音書は一致して、ペテロの信仰告白の直後に、変貌山の記述を置いている。ペテロは確かに主を「神の子キリストです」と告白したものの、主の使命が十字架であることを認識してはいなかった。そこで主イエスは、自分の使命が十字架であることを示すために、ペテロ・ヨハネ・ヤコブの三人を連れて山に登られたのだ。それは、主がモーセとエリヤと話し合っておられたことによってもわかる。彼らは、主がエルサレムで遂げようとする最後のこと、十字架を話し合っていた。△最後のこと△とは、ギリシャ語でエウソドス（直訳は

脱出）であり、出エジプト記の巻名でもある。出エジプトがイスラエル民族の奴隷からの解放だったように、主がこれからなさることは、全人類を罪から解放する働きなのである。

栄光に満ちた主の変貌の姿はわずかの時間で、この後主は、十字架に向かって進んでいかれる。栄光の主が、全人類の罪の身代わりとなり、十字架につかれるのだ。弟子たちに最もつまずきとなることが、全人類の救いとなることを、彼らは悟らなければならなかった。

二、十字架は律法と預言の成就

主の変貌の姿は、旧約聖書の様々なメシヤ預言と重なっている。まず、モーセが雲に包まれたシナイ山に登った時、彼の顔が輝いたことと似ている。モーセはメシヤを八わたしのようなひとりの預言者△と言った（申命記18・15）。また、ダニエルが見た「人の子の幻」（ダニエル7・13）にも類似する。さらに、天からの声の△これはわたしの子△は詩篇2・7の「王である神の子」を、△わたしの選んだ者△はイザヤ42・1の「受難のしもべ」を暗示する（『新聖書注解』）。

なぜダニエルとダニエルでなく、モーセとエリヤが主イエスの変貌に連わされたのだろうか。モーセとエリヤは、民の熱狂的な支持と、その反対の無理難題による迫害を受けた人物である。彼らは、主の苦しみを経験したかでも理解できる信仰の先輩であり、彼らは主の生涯を予表していたのだ。

さらにもっと明確なのは、モーセは律法を代表する人物で、エリヤは預言を代表する人物だとい

うことである。二人が主イエスと語り合っていたのは、主の十字架が律法と預言の完成であることを示すためであろう。

三、十字架は失敗ではない

この変貌山の出来事は、弟子たちが予想だにできなかった出来事だった。だからペテロは自分が何を言っているのかわからず、△小屋を建てよう△と叫んだ。また、自分たちが見たことについて、そのころだれにも話さなかった。では、意味がなかったのかというと、そうではない。この経験は彼らの心に秘められ、主の復活と召天を経て、イエスこそキリストだと確信させたのだ。そして彼らは後になって、主イエスが父なる神から誉れと栄光をお受けになった出来事として、これを証言したのである（Ⅱペテロ1・17）。

父なる神は35節で、△これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け△と宣言しておられる（マタイとマルコは△わたしの愛する子△と記している）。主イエスの変貌は、父なる神が主イエスを愛しておられること、これから主は十字架につけられるが、それは父なる神に見捨てられただのではないことを示すための出来事なのだ。だから十字架は救いの失敗ではない。△彼に聞け△と言われたように、救いの成就なのである。

結論

主の変貌は、十字架の意味を弟子たちに理解させるためであった。十字架は失敗ではなく、律法と預言の成就であり、全人類を罪から解放するものだ。主は十字架にかかって救う方なのである。

研究資料

(足立)

この箇所は、大きな出来事としてキリストの変貌を提示している。イエスが弟子たちから告白を受け、彼らに警告を与えた後、3人の弟子はイエスの独自性を証明する天からの声を聞いた。弟子たちにとって、このような承認は重要である。すなわち、イエスは苦難の僕、救い主であるということではなく、彼がモーセのような預言者であることも描かれているからである。弟子たちはもつとイエスから学ぶ必要があった。イエスに従う者たちは、彼から苦しみを教えられ、苦難を分かち合い、そして神を喜ぶべきなのである。

イエスが自身について、また神への道について語られるのは、真実である。弟子たちのイエスへの告白にはうそ偽りはないが、中身が問題である。イエスが約束された苦しみは、神が計画されたものであるから、必ず起こる。そしてそれはイエスの出エジプトである。この差し迫った苦難には、イエスの栄光がどのようなものであり、彼が究極的に自分自身をどのように提示するかが表されている。国家の土台的人物であるモーセと、終末の預言者エリヤは、イエスを証しし、彼に従属している。イエスに従う者は彼の新しい教えを受けとめ、彼の人格に信頼する。変貌の前に、弟子たちは沈黙して、言外の意味を知る時が必要であった。私たちもイエスの独自性、栄光、権威を熟考すべきである。

テキスト

28 これらのことを話された後という言葉から、ルカが、28～36節の出来事と18～27節の内容とを密接に結び付けていることがわかる。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、弟子集団の中でもリーダー的存在であったのだろう。山に登られたとあるが、タボル山か、ヘルモン山か、カルメル山か、福音書記者たちは言及していない。彼らにとってはどこで起こったかは重要ではなく、何が起こったかが最も大切なことだった。ピリポ・カイザリヤという地名（マタイ16・13、マルコ8・27）、また高い山（マタイ17・1、マルコ9・2）という記録から、ヘルモン山の可能性が高い。祈るためにという表現は、本福音書でルカが強調する視点である。ルカはイエスの祈りを記録している（3・21、5・16、6・12、9・18、28以下、10・21以下、11・1、22・41以下、23・46、これらの内の7つはルカ特有の記録であり、イエスはその生涯の危機的状況の前にはいつも祈っていたことがわかる）。

29 祈りの只中でイエスは変貌された。モーセの顔の輝きが連想される（出エジプト34・30）。しかしイエスはモーセ以上のお方（参照Ⅱコリント3・7～18）。モーセの輝きは外側からのもの。イエスの輝きは、人の子の栄光である。

30 律法を代表するモーセと、預言者を代表するエリヤの登場（参照ルカ16・29、31、24・27）。旧約においてこの二人だけが、神が自分の前を通り過ぎるのを見ている。従って、イエスこそ旧約を成就される方であり、神の顕現そのものという

示唆があるのかもしれない。

31 栄光の中に現れてという表現により、モーセとエリヤが神の臨在と共に遣わされたことがわかる。最後のこと（エウソドス）とはイエスの死と復活、昇天と考えられる（参照ルカ9・22、51、24・26）。エルサレム（ルカ1・5～23、2・22～38、41、9・51以下）において、十字架、復活、顕現、昇天、聖霊降臨、世界宣教、エルサレム会議などの重大事件が続いて起こる。

32 熟睡していた（比較マルコ14・40）とは、ゲッセマネの園の出来事に通じるものがある（ルカ22・45）。3人の弟子は、イエスの変貌と、モーセとエリヤの存在を目撃した。

33 わたしたちは小屋を三つ建てまいとは、仮庵の祭りを想起したのであろう（参照Ⅰピ23・33～43、出エジプト23・16、34・22、申命16・13～16）。でもペテロは自分が何を言っているのかわかっていなかった。イエスはモーセやエリヤと同等ではない。イエスは栄光の主であり、二人は贖われた被造物。

34 雲がわき起ってとは神の聖なる臨在の象徴。（出エジプト16・10、19・9、24・15～18、33・9～11、40・34、サムエル下22・12、列王上8・10～11、エゼキエル10・3～4、詩篇18・11）。

35 これはわたしの子とは、イエスの受洗に際して臨んだ言葉（ルカ3・22）。ここでは弟子たちに聞かせるため。これに聞けとは、イエスこそ律法と預言者に代表される旧約の成就であり、わたしたちが聞かなければならない唯一のお方。

●週題 救いを完成する主

●聖書 ルカ9・28・36

●暗唱聖句 祈っておられる間に、み顔の様が
変わわり、み衣がまばゆいほどに
白く輝いた。 ルカ9・29

●目標 イエス様の十字架が救いの失敗で
はなく、救いの完成であることを
発見する。

導入

イエス様はこれまで、そのお話や行動で、ご自分が神の子であることを証しておられました。しかし今日の箇所では、イエス様のお姿が、実際に、天での神のお姿に変わったのです。

(起) ストーリーを語る

これまで弟子たちは、寝るのも食べるのも、イエス様といっしょでした。そして、イエス様の力と知恵と愛を身近に体験してきたのです。しかしペテロは、イエス様を「神の子キリストです」と告白したにもかかわらず、イエス様が苦しみにあいい、十字架で死んで、三日目によみがえるとおっしゃると、イエス様をいさめ始めました。弟子たちには、イエス様が十字架につけられることが人類的救いであるなどは、思いもつかないことだったのです。しかしイエス様は、こんな鈍い弟子たちを辛抱強く訓練されました。

イエス様は、「自分が神の子であることをもっとはっきりと教えるために、ペテロ、ヤコブ、ヨ

ハネの三人だけを連れて、山に登られました。そこで、神様に祈りをささげておられると、イエス様の顔がだんだん輝きはじめ、着ておられた衣がまばゆいほど真っ白に輝きだしたのです。普段、見慣れたイエス様とは全然違っていました。天におられた時の、本来の神様としての輝きが現れ出ていたのです。もちろん三人は、こんなイエス様の姿を見たことがありません。

驚いたことに、だれか二人の人がイエス様と話をしていました。一人は神様から十戒をいただいたモーセで、もう一人は預言者エリヤです。この二人は旧約聖書を代表する人物です。彼らはイエス様と大切な話をしていました。それは、エルサレムで迎えるイエス様の最後についてでした。この最後というのは、脱出という意味です。旧約聖書の出エジプト記と同じ言葉です。モーセの時代、エジプトで奴隷だったイスラエル人たちはエジプトから救い出されました。でも、この山で話されている脱出とは、イエス様が、私たちの罪の身代わり十字架で死なれ、罪の奴隷である生活と、永遠の滅びから救い出してくださることです。

ペテロはすっかり興奮してしまい、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。ここに小屋を三つ建てましょう」と言いました。何をしゃべってよいかわからなかったからです。そのとき、雲が彼らを包み込んだので恐れを感じました。すると、天から「これはわたしの(愛する)子、わたしの選んだ者である。これに聞け」という声が聞こえました。この声の後、気がつくとも、モーセもエリヤも消えていて、ただイエス様だけ残っ

ておられました。天からの声は、イエス様が神の子であり、聖書に預言され、約束された救い主だと、神様が保証される声だったのです。

(承) 学ぶべき真理

弟子たちは、イエス様がもうすぐ十字架につけられるのですから、その十字架の意味をしっかりと知っていなければなりません。しかし、ペテロさえもその意義がわかってなかったのです。このイエス様の変貌の出来事は、イエス様は神に愛された神の子で、十字架が救いのわざの失敗ではなく、人類を罪から救うわざの完成であることを弟子たちに教えるためのものでした。

(転) 生活への適用

イエス様が十字架刑で死んだことは、イエス様が神様でない証拠だと言う人に会ったことがありませんか。彼らは誤解しています。また、イエス様が十字架刑で死んだことは救いの失敗で、他の人が救いを完成するのだという人に出会ったことがありませんか。それは間違った教えです。

結論

三人はしばらく、この山で見たことを他の人に黙っていました。あまりにも感動的だったからでしょう。それとも十字架の意味が理解できなかったからでしょうか。しかしペテロは後に、その時の感動を手紙に記しています。これは作り話ではない。自分の頭脳が及ばなくても、イエス様は本当に神の愛する子だと。そう、イエス様の十字架は救いの失敗ではなく、救いの完成なのです。

ワーク A

導入のヒント

イエス様は、「わたしは十字架につけられて死にます。でも3日目によみがえりますよ」と言っておられました。みんなはこの言葉を信じていることができるかな。イエス様と一緒にいたお弟子さんたちは信じていることができました。

ワークについて

イエス様がお祈りをしてられます。まず、色を塗りましょう。点線に沿って切り離し、パズルにして遊びます。大きく区切っていますが、もっと細かくしてもよいでしょう。

ワーク B

●質問1 祈っておられる間に「輝かれた」イエス様、それは「神の輝き」だったことを話し合いましょう。イエス様は「神様」です。

●質問2 変貌された主と語り合っていた2人の旧約の人物(モーセとエリヤ)について知り、主と「十字架」について語っていた事を学びます。旧約の預言の成就者としての主を仰ぎましょ。

●質問3 十字架―神様の贈いの完成はここに!!
●賛美歌 「なぜなせイエスさまは」
(反よ歌おう①より)

●今日のお祈り 「神様であるイエス様が、私たちの罪をゆるすために、十字架で身代わりになつて死んで下さったことを感謝します。」

ワーク C

●9章18節から始まる文脈で悟るべき大切なことは、「人となられたイエス様がまことの神様である」という事実です。20節のペテロの「神のキリストです」という告白や、35節の神御自身の宣言「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」にあるとおりです。イエス様が真の神様であると確信してこそ、その次の段階として、イエス様の十字架の死と復活(救いのみわざ)が本当であり、本物であると悟ることができま。

●ワークCはこの十字架や救いの完成までは言及せず、本日の聖書範囲が直接に語っている、「イエス様がまことの神様だと知ること」を終着点として作成しました。

ワーク D

●質問1 ペテロが主イエスを「神のキリスト」と告白し、主が十字架の死と復活について教えられてから、8日後です。3人の弟子の前で、主は変貌され、「最後のこと」、つまり十字架についてモーセ・エリヤと語り合われていました。

●質問2 十戒(律法)を授けたモーセと、預言(神の言葉)を伝えたエリヤは、十字架が聖書に約束されている救いの成就だと示しました。

●質問3 ペテロはこの時はよくわからなかったのですが、主の復活によって理解できました。彼の証言を読んで下さい。

●質問4 十字架を信じていることが、単なる知識ではなく、個人的事実となるように導いて下さい。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 イエス様は、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて山に登られました。何のために山に登られたのでしょうか。

2 山の上で、イエス様の姿が変わりましたが、この姿はイエス様がどんな方であることを表しているのでしょうか。

3 イエス様が祈っておられる間、三人の弟子たちは何をしていましたか。
●自分に当てはめてみよう

1 主は、身を低くして人間となりました。それでは、あなたは身を低くしているでしょうか。
2 ペテロは、主の輝く姿を見て、言葉が混乱しました。あなたも、祈りの中で言わなければならない経験はありませんか。

3 イエス様は、十字架の前に、モーセとエリヤの励ましを必要とされました。あなたは励ましの必要を感じたことはありませんか。
●話し合ってみよう

1 イエス様は、祈りの中で姿が変わられました。私たちも祈りの中で、自分の思いや願いが変えられた経験があったら話してみよう。

2 イエス様は、「十字架を負ってわたしに従って来なさい」と言われましたが、十字架の苦難の後には、何があるのでしょうか。

3 弟子たちは、この出来事をだれにも話してませんでした。なぜだったのでしょうか。

聖書 マタイ28・16・17・20
週 題 共におられる主

序論

過去四週間、主イエスがどういう方かを学んできたが、この最後の週は、主は現在も私たちと共にいてくださる方であることを学ぶ。「その名はインマヌエル」で筆を起したマタイは、最後に八世の終りまで、いつもあなたがたと共にいると記して、この書を完結する。私たちの教団に与えられた「主と共にいてくださる」という臨在信仰を、確実に子どもたちに受け継がせたい。

一、御自身を現される主

弟子たちは、既にエルサレムにおいて復活された主と出会ったことが記されている。さらに、10節でも主は、ヘリヤヤに行け、そこでわたしに会えるであろうと約束された。それにもかかわらず、ガリラヤにおいて主とお会いしたとき、弟子たちの中には「疑う者もいた」とある。疑ったのが、十一弟子以外の弟子だった可能性もあるが、聖書は冷静に人間の実像を描いている。十一弟子たちでも、復活を信じるのは容易ではなかった。ヨハネ福音書もガリラヤでの出来事を別の観点から記しているが、弟子たちはガリラヤ湖畔におられる主を判別することができなかった。しかし主は、そんな不信仰な弟子たちでも信じることができるよう、自分から近づき、語りかけ、御自身を現される。主は、疑う者が信じられるように、

御自身を現して下さる方なのだ。

二、権威を授けられる主

今まで学んだように、主は罪を赦し、悪霊を追い出し、病を癒す権威をもっておられた。主は、十字架の死に至るまで従順であられたからこそ、父なる神から入ったいのちの権威を授けられたのである（ヘリヤヤ2・8・11）。それは力ある権威だが、その背後には、苦しむ人々への大きな愛があった。さらに、主はその権威を知恵をもって用いられた。ペテロの池では、38年患っている人だけを癒し、他の人々は癒されなかった。癒し方も、命じるだけの時であれば、手を置かれることもあり、患部につばを塗られたこともある。その人、その状況にふさわしく権威を用いられた。

主はその権威を、聖霊を通して私たちにも与えてくださる。パウロが気弱なテモテに言ったように、八神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである（Ⅱテモテ1・7）。この権威が与えられたなら、私たちは人すべての国民を弟子とするために、臆することなく出ていくことができる。

注意すべきは、権威は力と愛と知恵（慎み）がそろわなければならない点だ。悪霊を追い出し、病気を癒しさえすれば、人々が救われるのではない。主のようになすべき場合とそうでない場合を峻別するには、聖霊の知恵がいる。また、知恵と力があっても、愛がなければ何の価値もない。自分の能力や知恵を示すのではなく、人を愛し、人のために用いていくこそ真の権威である。

その後の歴史を見るなら、あの不信仰な弟子たちが御言葉通りのことをしたことがわかる。十一弟子だけではない。彼らによってバプテスマを授けられ、御言葉を教えられ、キリストの弟子となった人々が連綿と生まれ続け、この二十一世紀にまで至ったのである。現在の私たちにも、この権威は与えられる。主は信じる者に、主と同じ権威を与える方なのである（マルコ16・17・18）。

三、共におられる主

「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」という主の約束は、今も変わらない。主イエスは、二千年前に生きていた歴史上の偉人というだけではない。あるいは、十字架で救いを完成して、今は関係ない方でもない。主は、現在も私たちと共にいる助け主である。

時として、私たちも不信仰になることがある。そんな時も、主は私たちから離れず、へいつも共にいてくださる。わたしたちの状態の如何にかかわらず、不信仰の時も、苦難の時も、好調な時も、主と共にいてくださらない時はない。それはイエスが主権者だからだ。イエスが主で私が僕である。僕の如何で主人が左右されることはない。主人の主権で共にいることは、変わらないのだ。

結論

「主と共におられる」との確信こそ、私たちの信仰を生きたまのにする。主は、疑う者にも御自身を現わし、決して見捨てず、世の終りまで共におられる。この主から権威を受けた私たちは、この大きな恵みを伝えることができるのだ。

研究資料

(足立)

復活のイエスは、教会の存在と宣言の中心である。復活がなければ福音は存在しなかったであろう。しかしながら復活は、単に歴史の一資料や過去の出来事に関する言い伝えではない。復活は現在のキリスト者が存在するための偉大な結果である。天と地にある全ての権威を授けられたお方は、復活のイエスである。イエスはここで、弟子たちと歴史上のあらゆる時代の教会に、権限を委託している。彼らは、イエスの御名と権威によって、良き知らせのメッセージを持って、あらゆる所へ行く存在である。

教会が与えられているものには、事実、畏敬の念を持つべき責任が伴っている。すなわち、出ていくこと、全ての国民を弟子とすること、洗礼を授けること、そして教えること。もし彼ら自身の考案と力によるならば、その働きは壊滅状態にあったであろう。復活されたイエスは、教会のみわさが成就するために、彼らと共にいるという約束を与えられた。しかもそれは一時的なものではなく、常に伴うものである。この約束が真実である証は、使徒行伝や教会史の中に端的にあらわされている（参照マタイ16・18）。最初の弟子たちは、疑い深く、困惑しており、全く力のない者たちであった。それにもかかわらず、今やキリスト信者と教会は、世界中のあらゆる土地と人種のうちに見出される存在となっている。

テキスト

16 ユダを除いた弟子たちはガリラヤに戻っており、少なくともイエスの復活後一週間が過ぎていた（参照ヨハネ20・26と21・1）。主から委託を受ける弟子たちは、山でクライマックスを迎えることになった。彼らが啓示を受け、主との交わりを持ったのも、多くの場合、山であった（参照マタイ4・8、5・1、14・23、15・29、17・1、24・3、26・30）。

17 弟子たちのイエスへの応答は、女たちと同様（28・9）礼拝であった。しかし主の復活を疑う者もいた。イエスの復活を疑うことに限っては、他の箇所にも記されている（ルカ24・10・11、ヨハネ20・24・29）が、その場合は、実際イエスに会わず、イエス復活の報告を聞いた人たちに限られていた。従ってこの節はユニークである。一つの説明が可能である。すなわち疑う者とは、11弟子以外の弟子たちの存在を示しているのかもしれない（参照Ⅰコリント15・6）。

18 イエスは彼らに近づいてきてとは、弟子一回とイエスとの間には僅かな距離があったことの証拠である。しかし、おそらくこれはイエスが全集団に容易に語れる距離であったことを意味する。救い主イエスの権威は本福音書において十分強調されてきた（例7・29、10・1、7・8、11・27、22・43・44、24・35、参照ヨハネ17・2）。しかしここでイエスは、天においても地にいても通じる普遍的権威が自らにあることを宣言された。つまり、受肉を通して適合された制限なるも

のが、もはや復活のイエスには当てはまらないことを明確にしている。

19 キリストの委任に伴う中心的命令は、すべての国民を弟子とすることである。弟子とは学ぶ者であり、従う者である。すなわち弟子はイエスを教師として彼から学び、イエスについていく信仰者のことである。その点で、全ての人を弟子とすることは、だれかを信仰告白に導き、その後停滞させる福音宣教命令ではない。弟子作りは、バプテスマを施すことで終わりではない。クリスチャン共同体に決定的に参加したものは、生涯をかけて、継続した主の教育を受けるのである。父と子と聖霊との名によってとは、三位一体の神を示している。父、子、御霊の三者は既にイエスの洗礼の時に出てきているが、ここでは、名（単数）という名詞に、三者の一体性が示されている。

20 イエスの弟子とされた者は、受洗するだけでなく、学び続けなければならない。イエスは、あなたがたに命じておいたいのちの約束を守るように教えよと言われた。教会の教育機能は極めて重要である。イエスの全生涯と教えから、きよい生き方を教えるのである。弟子はすべてを見て学ぶのである。

本福音書の最後に、イエスの慰めに満ちた臨在の約束がある。あなたがたと共にいるとは、イエスにおいてインマヌエル預言が成就したことに結びつく（1・23、参照18・20）。イエスの弟子には常に臨在の約束が伴う。復活の主に信頼して従う者に、主の臨在は保証されている。

●週題 共におられる主

●聖書 マタイ28：16～20

●暗唱箇所 わたしは世の終（わ）りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。 マタイ28：20

●目標 いっさいの権威を持たれる主が、いつも私たちと共にいて下さることを発見する。

導入

イエス様の誕生の預言に、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」という御言葉がありました。それは、「神われらと共にいます」という意味です。イエス様は誕生のときから、私たちと共にいて下さる神様です。今日の聖書の箇所は、イエス様が復活されて、天に帰られる前の出来事です。この時にもイエス様は、「いつも共にいる」という約束を下さっています。

(起) ストーリーを語る

復活の後、弟子たちはガリラヤに行って、山の上でイエス様にお会いし、礼拝しました。しかしそこに集まった弟子の中に、イエス様の復活を疑っている人もいました。そんな不信仰な人にも、イエス様は自分から近づいて、復活の確かな証拠を見せて、信じるように教えられたのです。

イエス様がそこでお話になったのは、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」ということでした。イエス様はそれま

でも、人の罪を赦したり、悪霊を追い出したりしておられ、病気の人を何人も治して、その力を発揮しておられました。すでに権威を持つておられたイエス様でしたが、十字架の死に至るまで完全に従われた後には、父なる神様から全ての権威を授けられたのです。

イエス様に与えられた権威は、聖霊様をおして弟子たちにも与えられます。それは、イエス様を信じる者が、永遠の命を得るようになるためです。権威はめったにやらに使うものではありません。イエス様も病気を癒されることもあれば、そうならないこともありました。どんな時に、何のために権威を用いるかには、知恵ある判断が必要です。また、愛のない権威ほど恐ろしいものはありません。イエス様は、いばりちらす方ではありませんでした。権威は、聖霊様の知恵と力と愛によって与えられるのです。そして弟子たちも、聖霊様によって、全ての国民をイエス様の弟子にすることができるようになります。このように、イエス様が天に帰られてからは、イエス様の弟子たちに神の権威が授けられ、彼らは全世界に出かけて行くように命じられました。

さらにイエス様は、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束して下さいました。「いつも共にいる」という約束は、だれにでも言えることではありません。苦しい時、悲しい時、困った時、不信仰になってしまつ時にも、見捨てずに共にいて下さるのです。また、死んだ後も一緒にいて下さるのです。イエス様は二千年前にいた偉人ではなく、天からくだ

見ておられる方でもなく、どんな時でも私たちと共におられる力強い助け主なのです。

(承) 学ぶべき真理

私たちが今もイエス様の福音を聞くことができるのは、イエス様の御言葉を信じて従った人たちが、二千年間、絶え間なく御言葉を教え続け、バプテスマを授けてきたからです。イエス様が持たれた権威は、今も信じる人に同じように与えられます。そして、イエス様は、御言葉を信じて全世界に出て行く人といつも共におられるのです。

(転) 生活への適用

知らないところで迷子になったら、心細いし、どうしたらいいかわからなくて、泣くかもしれません。今は携帯電話一本で、助けを求められるかもしれません。だれかがそばに一緒にいてくれるほうがもっと心強いでしょう。イエス様はいつも共におられます。イエス様は、私たちが弱いとき、失敗したときだつて、見捨てたりされません。いつも一人ではないことを覚えましょう。

結論

イエス様は、どんな時でも、見捨てたり、離れたりなど絶対なさいません。日曜だけでなく、毎日、寝ている時も、起きている時も一緒です。イエス様が共におられたら、私たちに恐いものはありません。イエス様と一緒になら罪の誘惑にも勝てるし、心配な時でも勇気をもって進めます。そして、イエス様と共に、イエス様の願いである、全てのの人に福音を伝えることができるのです。

ワーク A

●導入のヒント

影ふみ鬼ごっこをしたことがありますか。良い天気の日、外に出ると影ができます。この影は陽が当たっている限りずっとついてきます。イエス様は、イエス様を信じるお友だちとずっと一緒にいて下さるんですよ。

●ワークについて

人の足跡をたどってイエス様がいる天国に行きましょう。イエス様は、私たちが天国に行く日まで、どんな時でも一緒にいて下さることを確認しましょう。

ワーク B

●質問1 弟子たちでさえ不信仰な時がありました。そんな時でも、主は自分から近づいて語って下さるお方であることを知りました。

●質問2 イエス様の持たれた「権威」について学びます。そしてその「権威」が今、伝道する私たちにも与えられているのです。これこそ、信じる者に働く主の力です。

●質問3 主と共にいて下さることが救いです。賛美歌 「気づかなかった」

(ノアCDコレクション1巻76番)

●今日のお祈り 「神様、全ての権威をもつておられる主イエス様が、ずっと一緒にいて下さることとは大きな喜びです。ありがとうございます。」

ワーク C

●今日の箇所(16～20節)の中心メッセージは、「すべての国民を弟子とせよ」という大宣教命令と、言っているように、そのために「行って」、「バプテスマをばたき」、「教えよ」と命じられたのです。そしてその保証(あるいは力づけ、励まし、慰め)として、20節「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」という約束があります。

●本日は、その中の20節「共にいる」が週題、暗唱箇所、目標の中心となっていますから、この点に絞ってワークを作りました。ですから、大宣教命令に関することには触れていません。

ワーク D

●質問1 主に命じられた通り、ガリラヤへ行き主とお会いしました。礼拝する人だけでなく、疑う人もいましたが、主は近づいて宣教の命令をさしました。

●質問2 全てのものを従わせ、何でもなすことのできる権限です。何の例外もありません。

●質問3 「弟子としなさい」という命令は、バプテスマを授けることと、主の教えを教えることによって進められます。そして一切の権威を持つている主が、あらゆる時、所、場合にも共にいて下さるのです。

●質問4 疑い深い者にも主は近づいて下さり、変わらない臨在の約束を与えて下さいます。

中高校へのヒント

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 復活されたイエス様にお会いした弟子たちの中に、疑う人がいたのはなぜでしょう。

2 イエス様は、権威を持つておられる方ですが、具体的に、どんな権威を持つておられるのでしょうか。

3 イエス様は、私たちにも権威を授けておられます。それはどんな権威でしょうか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは、イエス様の復活を信じていますか。信じられないとしたらそれはなぜですか。

2 あなたは、イエス様の権威を認めていますか。あなたが不信仰になったときに、イエス様はあなたから離れられると思いますか。

●話し合ってみよう

1 イエス様が、ここで命じられていることがありますが、それはどんなことですか。

2 イエス様は、いつまで私たちと共にいて下さるのでしょうか。

3 イエス様が共にいて下さることを、臨在と言います。この信仰に立つとき、私たちはどんな信仰生活を送ることができるでしょうか。

聖書 ルカ23・1～25
過 題 不正な裁判

序論

今週より、ルカによる福音書から主の十字架と復活を学ぶ。まず今日は、ピラトの裁判である。すでに前章で、主は、大祭司カヤパによる宗教裁判にかけられ、自分を神の子としたという理由で有罪判決を受けている。しかし、当時のイスラエルはローマ帝国に支配されていたため、死刑を実施するためにはローマの総督の判決が必要だった。この裁判の過程を見るなら、それぞれの人の罪が、主を死刑に追いやったことがよくわかる。

一、祭司長や律法学者の罪

宗教指導者だった祭司長や律法学者たちは、主がガリラヤで伝道を始めたところからつきまとい、安息日を守らないとか、罪人と一緒に食事をするとか、難癖をつけていた。彼らにとっては、今までのしきたりを破って「神の国の福音」を語る主は、邪魔者にはかえりなかつたのだらう。特に彼らを怒らせたのは、主が罪を赦したり、父なる神と一つであることを示唆されたことだった。彼らは、これを「神を汚すことだ」と考えた。しかも主に従っていく者たちがどんどん増えていく。彼らは、主をねだんでいた(マタイ27・18)。それゆえ違法な徹夜裁判を開き、誘導尋問をし、主が神を冒瀆したことにしてしまったのである。彼らの罪は、ねだみである。彼らの立場と職が

脅かされたので、主を十字架につけたのだ。

二、ピラトの罪

ピラトはローマ総督として、祭司長たちの訴えを退けることもできた。現に彼は三度も主イエスの無罪を明言している(4、14、22節)。また、主の宣教の舞台であったガリラヤの統治を委ねられていたヘロデのもとに主を送り、彼の意見も聞いている。ヘロデも主に罪を認めなかった(15節)。しかし最終的にピラトは死刑を宣告した。祭司長たちが、へもしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません」と言ったからである(ヨハネ19・12)。これは、ピラトの最も弱い所だった。宗教指導者たちが、このことをカイザルに訴えたなら、自分の評判に傷が付くと思つたのである。さらに、もし民衆が暴動をおこしたら、その責任もとらねばならないという恐れもあったのだらう。彼は、自分の立場を守るために、あえて間違つた判決を下したのだ。

彼の罪は、保身である。自分の利益のために正義をまげて、主を十字架につけたのだ。

三、群衆の罪

当時エルサレムにいた群衆にも、大きな罪がある。彼らは5日前に、「ホサナ」と叫んで、主を迎えた。しかし、彼らは祭司長たちに煽動されると(マルコ15・11)、へその人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」と叫んだ。バラバは、当時へ暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者Vだった。きつと、反ローマ勢力の中心人物で、民衆には人気があつたのだらう。そして群衆は、イエスを十

十字架につけると言い続け、ついには暴動になりそうになった(マタイ27・24)。

彼らの罪は、付和雷同である。自分で責任を持つた判断をせず、皆やっているから自分もするといふのなら、そこに正義はない。自分の意見を持たず、大きな声を出す人々についていった群衆もまた主を十字架につけたのだ。

四、弟子たちの罪

この時、弟子たちは主のもとから逃げていた。一人ペテロだけが途中までついていったが、三度も主を否定してしまつた。「主と同じように十字架を負おう」と思った者はだれもいなかった。主の御言葉に従わなかつた弟子たちにも罪がある。彼らの罪は、裏切りである。自分の命が危なくなると逃げ出し、主を十字架につけたのだ。

結論

私たちは確かに、主の十字架から二千年後の人間である。しかし、私たちもまた、主イエスを十字架につけた張本人なのだ。あなたのねだみ、保身、付和雷同、また裏切りが、主イエスを十字架につけた。あなたは、できる子をねだみ、仲間外れにしたことがないか。自分がしたことなのに、自分ではないと嘘をついたことがないか。めんどくさくなってドタキャンし、裏切ったことがないか。よく考えずに、みんなについていって、いじめたり、悪口を言ったことがないか。自分の胸に手を当てて考えてみよう。あなたも主を十字架につけた張本人だ。しかし、主が十字架で死なれたことが、私たちの罪の解決となるのである。

研究資料

(長田)

主を十字架につけた人々

主イエスの十字架には、多くの人々が関わっていた。総督ピラトは、人々の訴えるところを聞いて調べた結果として、「この人になんの罪も認めない」と、三度もキリストの無罪を明言した(23・4、14、22)。3年半もの間、寝食を共にしたペテロも、「罪を犯さず、その口には偽りがなかった」(1ペテロ2・22)と書いている。そのお方が、どうして極悪の犯罪者と一緒にされ、十字架刑に処せられることになったのか。

当時の宗教的指導者であった祭司長や律法学者たちのねだみがあつた(マタイ27・18)。また、彼らに煽動されて「十字架につけよ」と叫び続けた群衆たちの無責任な付和雷同があつた(23・21～23)。また、キリストの無罪を認めつつも、人々の要求に屈し、裁判の最終的責任者として十字架刑を言い渡したピラトの自己保身があつた(ヨハネ19・12、13)。加えて、師であるキリストに対する弟子たちの裏切りもあつた(22・3～6、マルコ14・50)。まさに、人間の内側に隠れ潜んでいる罪深さが、キリストを十字架につけたと言える。

どれ一つとして、私たちに無関係であるとは言えないような人間の弱さが、キリストの十字架の死をもたらした事実を見ると、私たちは主に對して、「私こそ、あなたを十字架につけました」と

言わざるを得ない。

テキスト

- 2 貢をカイザルに納めることを禁じ 22章でのユダヤ人による裁判の焦点は、宗教的問題にあつたが(22・70、71、マルコ14・58)、ローマ総督ピラトの前での裁判では、政治的問題として、カイザルに対する敵対の問題が取り上げられ、その線上での訴えがなされた。しかし、実際には、キリストは、カイザルに貢を納めることを禁じてはおられない(20・25)。
- 3 あなたがユダヤ人の王であるか カイザルへの敵対行為があつたかどうかを見極めるための質問。しかし、おそらくピラトは、訴えの本質が、ユダヤ人内部の宗教的な問題であると見極めていたであろう(ヨハネ18・33～38参照)。
- 7 ヘロデがエルサレムにいたのをさいわい、そちらへイエスを送りとどけた やっかいな問題を他に回そうとするピラトの無責任さ。
- 11 ヘロデはその兵卒とも一緒にあって、イエスを侮辱したり…ピラトへ送りかえた 好奇心と侮辱、あざけりの中で、ただ沈黙を守られたキリストは、結局、ピラトのもとに送り返される。(1ペテロ2・23)
- 12 ヘロデとピラトとは…この日に親しい仲になった 一人の人を弱者と見てあざけるうちに互いに親しくなるといふ、人間の残忍な性質の表れ。
- 16 むち打ってから、ゆるしてやることにしよう 罪を認めないにもかかわらず、むち打ちをもって

終わらせようとするピラトの提案は、既に、真理に立つものではなく、妥協的である。

18 その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ 群衆

たちのこの要求は、「人殺しの男をゆるすように要求し、いのちの君を殺してしまった」(使徒3・14、15)とあるように、不合理極まるものであつたが、狂気に取り付かれたような彼らは、その理不尽さに気がつかない。

22 ピラトは三度目に彼らにむかつて言った 群衆たちによるキリストの十字架刑要求は、物のはずみで起こつたものではなく、何度も重ねてのものであつた。(16、18、20、21、22、23)

23 そして、その声が勝つた 真理が隠され、闇が一時的に支配し、勝利を得たかに見えた瞬間。「今は…やみの支配の時である。」(22・53)

24 ピラトはついに彼らの願いどおりにすることに決定した キリストの無罪を認めながら、群衆の強い声に屈して、十字架刑を言い渡したピラトは、裁判についての最終的責任者として、その責を問われなければならない。それは、後に、使徒たちによつても指摘され(使徒4・27)、またその後、使徒に続く教会においても、使徒信条の中で指摘されている。

25 暴動と殺人とのかどで獄に投ぜられた者の方を…ゆるしてやり、イエスの方は彼らに引き渡して「ここに見られる対照は、事の理不尽さを際立たせるとともに、キリストの十字架が、私たちの罪の身代わりであることを思い出させる。

●週題 不正な裁判

●聖書 ルカ23・1-25

●暗唱聖句 この人はなんら死に当るようなこととはしてないものである。

ルカ23・15

●目標 イエス様を十字架につけたのは、人間の罪であることを発見する。

導入

来週は受難週です。何の罪もないイエス様が、裁判で十字架刑に定められた週です。どうして、そのような判決が出たのでしょうか。今日は、イエス様が十字架につけられた理由を考えましょう。

(起) ストーリーを語る

祭司長や長老、律法学者たちなどの宗教指導者は、以前から、イエス様が安息日に病人を治したり、罪人と食事をしたり、先祖からのしきたりを守らないことに腹を立てていました。しかも、人々がどんなその教えを聞きに行くので、ねたんで、いつか殺してやろうとチャンスを探らっていたのです。そして、イエス様を逮捕して、大祭司カヤパのもとで徹夜の裁判を行ない、「神と一つである」と言われたイエス様の言葉が神への冒瀆罪に当たるとして、有罪判決を下しました。

しかし、当時のイスラエルはローマに支配されていて、勝手に死刑を行なうことはできませんでした。そこで、その時のローマ総督ピラトによる

裁判を求め、死刑の判決を要求しました。彼らは、イエス様がガリラヤ地方において、自分が王なるキリストだと言い、国民を惑わし、貢ぎ物をカイザルに納めることを禁じていると訴えました。しかしピラトは、彼らの訴えが宗教的な理由で、罪には当たらないことを知っていました。

そこでピラトは、イエス様の故郷のガリラヤの領主ヘロデが近くにいるので、彼のもとにイエス様を送りました。ヘロデと兵士たちは、イエス様をのしつたり、ふざけてぶつたりした後、はでな着物を着せてピラトの所に送り返しました。

ピラトは、祭司長や役人や民衆を集めて、「自分もヘロデも調べたが、この人が死刑になるような罪は見あたらない」とはっきり言いました。そして、「鞭打ちでゆるしてやろう」と提案しましたが、群衆は「その人を殺せ」と叫んだのです。

そこでピラトは、「毎年の祭りの習慣で釈放する囚人をイエスにしよう」と提案しますが、彼らはかえって、「十字架につけろ」と叫びました。そして「ゆるすのならバラバにしろ」と言うのです。バラバとは、殺人と暴動の罪で捕らえられていた男です。ピラトは、もう一度、群衆に向かって、「イエスをゆるそう」と言ったのですが、群衆は「十字架につけよ」と叫び続けました。3度目に再びピラトは、「この人は死に当たらないからムチで打つてゆるそう」と言ったのですが、彼らは、ますます大声をあげて「イエスを十字架につけよ」と要求しました。そして、とうとうピラトはその声に負け、彼らの訴えの通りに決定しました。彼は、これ以上もめて、暴動でも起きたら自分の立場が

危なくなるのを恐れたのです。

(承) 学ぶべき真理

祭司長や律法学者はねたみから殺意を抱き、イエス様を十字架につけました。ピラトは自分の保身のため不正な裁きをして、イエス様を十字架につけました。群衆は扇動されてよく考えもせず、イエス様を十字架につけると叫びました。弟子たちもイエス様を見捨てて逃げ去りました。みんながイエス様を十字架につけたのです。律法学者の罪はねたみです。ピラトの罪は保身です。群衆の罪は付和雷同です。弟子たちの罪は裏切りです。けれども、この人間の罪によってイエス様が十字架につけられることが、救いの完成でした。

(転) 生活への適用

皆さんは、「みんながやっているから」と、自分でよく考えもしないで行動したことがありませんか。「いじめ」などは、そういう状況で起きます。みんながしているても、罪は罪です。自分で責任をもって行動しないといけません。また、約束していたのに気が変わって、すっぱかしたことがありませんか。それは裏切りです。友だちがいろいろおもちやをもっているのをねたんで、かくしたりしたことがありませんか。それだって罪です。

結論

イエス様を十字架につけたのは、二千年前の人々の罪だけではありません。同じようにけがれた心を持つ私たち一人一人の罪も原因です。しかし、その十字架の死こそ、私たちの罪の身代わりであり、イエス様を信じる人の罪を赦すのです。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 宗教指導者たちは、何のためにイエス様をピラトのもとに連れて行ったのでしょうか。
2 ピラトは、イエス様に「罪がある」と言うことができたでしょうか。
3 イエス様が、ピラトのもとに連れて行かれていた間、弟子たちはどうしていたでしょうか。

●自分に当てはめてみよう
1 宗教指導者たちは、人々がどんなイエス様に従っていくことに対して、ねたみを感じていました。あなたも人をねたんだ経験はありませんか。
2 あなたが、ピラトの立場だったら、イエス様をどのように裁きますか。
3 イエス様は、いわれない理由で、裁判にかけられました。あなたも理不尽なことで、攻撃されたことはありませんか。

●話し合ってみよう
1 宗教指導者たちが、イエス様に対して一番怒っていた理由は、何だったのでしょうか。
2 5日前には、ホサナと言ってイエス様を迎えた人々は、この時にはどんなふうに変化したのでしょうか。豹変したのはなぜですか。
3 ピラトは、イエス様に罪がないと言って釈放しようとしたが、最後にはイエス様を十字架にかけられることを許可しました。なぜでしょうか。

ワーク A

●暗唱聖句 (3月17日～3月31日)

あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。
(ルカ23・43)

●導入のヒント

イエス様は神様の子もだてて知ってるよね。神様の子どもには罪があると思う？罪のないイエス様が十字架にかかれたのはなぜでしょうか。

●ワークについて

いろいろな心があります。悪い心には黒色を、良い心には赤色を塗りましょう。絵だけではわかりづらいかもしれませんので、説明してあげて下さい。この黒く塗った心が、イエス様を十字架につけたのです。

ワーク B

●質問1 イエス様を十字架につけてしまった人々について追ってみましょう。話し合いながら、それは「わたしも持っている罪」であることを知りましょう。
●質問2 群衆の声に負けたピラトでしたが、彼の言葉は真実でした。今日の暗唱聖句です。
●質問3 「わたしの罪」のための十字架です。心を点検しましょう。また主に感謝しましょう。
●賛美歌 「イザヤ53・6」

(ふくいん子どもさんびか16番)

●今日のお祈り 「神様、イエス様を十字架につけたのはこの私です。でも、この私をゆるすために

の十字架を本当にありがとうございます。」

ワーク C

●十字架の場面、イエス様を訴え、裏切り、売り渡した人物を聖書の中から調べます。4種類の人物群が全てイエス様を死刑に導いたのです。それぞれの事情と気持ちと理由を考えながら、名前を書き込みましょう。その時のイエス様の気持ちを考えて顔を描いて下さい。

●後半では、自分にも罪の思い、怒り、不都合、自分勝手などがあつたことを確認させます。そういう自分でありながら、正当化して生きていることは、結局、十字架の周囲にいた4種類の人物群がイエス様に「死刑だ」と叫んでいたのと同じことだと悟らせたいのです。

ワーク D

●質問1 罪状は何でもよかったのです。主を死刑にするためにピラトの所に連れて行きました。
●質問2 「罪がない」と繰り返し言いましたが、群衆が恐ろしくなり、死刑を告げました。
●質問3 ホサナと叫んでいた群衆が、十字架につけるという群衆になりました。群衆心理に動かされると、考えないで行動してしまうのです。
●質問4 弟子はだれも逃げてしまいました。
●質問5 妬み、恨み、保身、無責任、恐れなどは、だれもが持っている弱さです。

聖書
ルカ23・32～43
十字架による救い

序論

先週学んだ裁判は、木曜の夜から金曜の未明にかけて行なわれた。金曜の朝、主イエスは十字架を背負って「されこうべ」と呼ばれている処刑場に行かれ、朝9時頃から昼3時頃まで、十字架の苦しみを味わわれた（マルコ15章）。その約6時間の出来事は、主イエスが私たち罪人のために何をして下さったかをよく示している。

一、十字架は預言の完成

主は、他の二人の犯罪人とともに十字架につけられた。このことをはじめとして、主の善物がくじ引きで分けられたこと、民衆や役人たちがあざ笑ったこと、兵卒が酔いぶどう酒をさし出したことや人自分を救いなさいと言ったこと、これらは全て、旧約聖書の預言の成就である（研究資料参照）。

つまり、全ては神の救いの「ご計画」の中で進んでいるのである。神の御子が人類の罪の身代わりとして罰を受け、弁償を支払う以外に、人類の救いはいりえないからこそ、神はこの「ご計画」を実現された。そして、当然のことながら、御子イエスも、このことをご存じだった。知らなかったのは、御子を十字架につけた人々だ。主の十字架は、預言の成就なのだ。人類を救うという神の「ご計画」が、主イエスの十字架で完成するのである。

二、十字架は罪の赦しの完成

主は祈られた。父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。主は、自分を十字架につける者を赦し愛される方である。彼らのだれも、自分が神の御子を殺そうとしているとは知らないし、それが、全人類の救いのためだということも理解していなかった。無知のゆえに彼らは恐ろしい罪を犯していたと同時に、神の計画を推進していたのだ。

彼らは、主イエスに対して、自分自身を救うがよい、と言った。しかし主は、自分を犠牲にして罪人を救う道をとられた。自分の敵さえも赦す主の祈りを聞いた彼らが、もしあの放蕩息子のように本心に立ちかえったならば、感動的な出来事がおこったに違いない。いや、現実におこった。彼らではなく、十字架につけられていた、一人の犯罪人の上に。自分の敵さえも赦す主の祈りが、極悪な犯罪者を救ったのである。

主の十字架は、罪の赦しの完成である。主イエスが十字架で祈られたように、罪を犯した者が赦されるために、主は十字架にかかれたのだ。

三、十字架は信仰による救いの完成

主イエスの両側には、二人の犯罪人が十字架につけられていた。一人は主に、△自分を救い、またわれわれも救つてみよ▽と、兵卒たちと同じようなことを言つていた。彼も主の十字架の意義を理解せず、十字架刑から逃れることが救いだと思つていた。しかし、もう一人の犯罪人は、彼とは全く違つたふうに考へていた。彼は、主の救ひの

結論

祈りを聞いて、大きな感動を覚えていた。彼はまず、△お互いは自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ▽と自分の罪をはっきりと認識していた。次に、△この方は何も悪いことをしたのではない▽と、主の無罪を確信した上で、主に、△わたしを思い出して下さい▽と謙遜に願っている。彼は、それまで何一つ善行をしてこなかったかもしれない。しかしここで自分の罪を認め、主イエスに信頼したのである。それこそ、本心に立ち返って主イエスを信じることであつた。

その時主は、△あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいる▽と彼の救いを宣言された。どんな罪人でも、神の国に入れることを示されたのだ。これこそ、「信仰による義認」と言うことができる。彼は、主イエスについてそれほど深く理解していたわけではないであらう。しかし、この方が△御国の権威▽を持つ方であり、この方により頼めばよいと悟つたのだ。救われるためにはそれで十分である。

自分の罪を認め、神の御子イエスがその罪の身代わりになったと信じる者に導くことが、教会教育の原点である。「人間は努力すれば何でもできる。神などいらない」とする一般の風潮の中で、私たちは、このメッセージを伝え続けねばならない。主は十字架によって、全人類の罪を赦し、信じるだけで救われる道を開いて下さった。これこそ「福音」なのである。

研究資料

(長田)

十字架—救いのご計画の完成

受難週を迎えるに当たり、主の十字架は何であつたのかを深く覚えたい。それは、歴史の狭間で、偶然に起つたものではなく、「時満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、おつかわしになつた。それは、律法の下にある者をあがない出すため……」(ガラテヤ4:4、5)とあるように、神の救ひのご計画の成就であつた。

旧約聖書は、主の十字架の情景の多くを明確に預言している（例→詩篇22篇においては、7節↓人々のあざけり、8節↓あざけりの言葉、16節↓手足の釘付け、18節↓着物のくじ引き。また、詩篇69・21↓酸いぶどう酒を差し出される、イザヤ53・12↓罪人たちの一人に数えられる）。

御子の十字架は、律法によっては義とされることのない罪人を、信仰によって義とするために、神ご自身が備えられたあがないの供え物であった（ローマ3・21〜26）。それは、ただ一回限りの完成された贖いのみわざであって、どんな罪をも赦し、きよめるものである（ヘブル10・12〜14）。

デキスト

33 されこうべ アラム語では、ゴルゴタ（マタイ27:33）。丘の形がどくろの形に似ていたからであらう。エルサレムの城壁の外にあった。

ザヤ53・12の成就。

34 父よ、彼らをおゆるし下さい。ご自身を十字架につけた者たちのためのこの祈りは、また同時に、十字架によって身代わりとなられた全人類のためのものでもあった。

彼らは、何をしているのか、わからずにいるのです。 私たちもまた、自らの罪が御子を十字架につけるほどのものであることに気づかず、平気で罪を犯してきたのではないかと。

35 自分自身を救うがよい もちろん、主はその力を持っておられたが、そうすることは神の救いのご計画の挫折を意味した。悪魔が荒野で主を誘惑した時、その誘惑の焦点は、十字架への道から御子をそらそうとすることにあった。悪魔は、人々のあざけりを通して、最後まで御子を誘惑したのであろう。

39 自分を救い、われわれも救ってみよ 犯罪人のこのあざけりは、役人たち、兵卒たちのあざけりに便乗し、自分たちの救出を求める、都合のよい要求。

40 もうひとりは、それをだしなめて 彼ははじ
め、もう一人の犯罪者と共に、主をあざけてい
たが（マタイ27:44）、どこかで主に対する見方を
変えたのであろう。あるいはそれは、主の十字架
上での祈り（34節）を聞いた時であったかもしれ
ない。

41 お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ 自分自身の罪を認め、その裁きの当然であることを認める、碎

かれた心がある。

このかたは何も悪いことをしたのではない。周囲の多くの人々が、深い惑わしの中、御子の無実を見失っていたときに、一人の犯罪者がその事実を冷静に認めることができた。自らの罪を認めることのできる者は、全ての真実を見極めることができる。

42 あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、ここには、御国の王としての主、復活・再臨の主を認める信仰が言い表されている。どのようにしてこのような深い信仰が与えられたかはわからないが、彼の信仰が御子の神格を的確に捉えていたことは間違いない。

43 あなたは、きょう、わたしと一緒にパラダイスにいる。悔い改めと信仰を言い表した犯罪者に対して、主は明確に救いを約束された。犯罪者は将来の救いを求めたが、主は、「今日」の救いを保証された。なぜなら、主が十字架につけられたその日、天におけるパラダイスは完成し、あらゆる人に対して場所が備えられたからである（ヨハネ14・2）。

パラダイスは、元來、園の意。エデンの園においては、神と人は自由に交わる事ができたが、人の罪によってその交わりは損なわれた。しかし、主の十字架は、人の罪を赦し、神との和解を得させ、神と人との交わりを回復する。パラダイスとは、「わたしと一緒に」と言われる主と共に、永遠に生きるこのことができる場所である。

● 週題 十字架による救い

● 聖書 ルカ23・32、43

● 暗唱句 あなたはききょう、わたしと一緒に

パラダイスにいるであろう。

ルカ23・43

● 目標 主の赦しの祈りと救いの言葉から、十字架が罪の赦しと信仰による救いの完成であることを発見する。

導入

今週は受難週です。イエス様が十字架によって私たちに下さったことを考えましょう。

(起) ストーリーを語る

金曜日の朝早く、死刑の判決を受けたイエス様は、ご自分がかげられる十字架を背負って、されこつべと呼ばれる場所まで歩いていかれました。その十字架の上で、イエス様は、朝の9時から昼の3時頃まで苦しみを受けられました。

その日、その場所では3人の人が十字架にかけられました。イエス様は真中です。右と左には犯罪人がかけられました。そこでイエス様がおっしゃった最初の言葉は、「父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」という父なる神様への祈りでした。

十字架の下では、人々がイエス様の着物をくじ引きに分けています。遠くから眺めている群衆と、あざ笑う役人がいますが、だれも神の子が苦しんでいると思う人はいません。役人は、「神

のキリスト(救い主)であるなら、自分で自分を救うがよい」と言い、兵士はすっぱいブドウ酒を差し出して、「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい」とのしりましました。

イエス様の頭の上には「これはユダヤ人の王」という札がかけられていましたが、イエス様を真の王だと認めるのではありません。バカにしているのです。罪人たちの目には、イエス様がただの人間にしか見えませんでした。神様から遣わされて、人を愛し、助け、癒しておられた方を、正しく理解する人はいなかったのです。しかし、イエス様は人間の無知を全部ご存じの上で、なお愛にあふれたとりなしの祈りをささげられました。

両側で十字架につけられていた犯罪人のひとりには、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれをも救ってみよ」と悪口を言い続けています。しかし、もう一人は違っていました。彼はこう言いました。「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互い自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」とたしなめてから、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出して下さい」と言いましました。十字架の苦しみ味わいながらも、立派な言葉と態度を保つイエス様こそ、罪のない神様だと悟ったのです。彼は、生涯の最後の時に、イエス様を救い主と信じることができました。

この犯罪人の言葉を聞かれたイエス様は、彼に「よく言うておくが、あなたはききょう、わたしと

一緒にパラダイスにいるであろう」と言われました。イエス様は、その時すぐに天国への約束をされました。その罪人が神様の前に差し出すことができたのは、真心からの悔い改めとイエス様に対する信仰だけでしたが、イエス様はそれをしっかりと受けとめて下さったのです。だれでも、今日、同じ悔い改めと信仰を告白するなら救われます。

(承) 学ぶべき真理

イエス様の十字架は、私たちの罪の身代わりとなって、罪のゆるしを完成するためでした。私たちも、この犯罪人のように、ただ信じるだけで罪が赦され、パラダイスにいることができます。

(転) 生活への適用

あなたは、良い行ないをしたら、または良い子になったら天国に行けると思っていますか。それは間違いです。良い行ないで、悪い行ないを打ち消すことはできません。必ず、謝罪と弁償と刑罰が必要です。イエス様の十字架で罪が身代わりとなされて、はじめて罪は赦されるのです。

結論

イエス様の救いは、良い行ないで得られるものではありません。イエス様は今も、手を広げて、私たちを迎えて下さっています。ただ、自分の罪をおわびして、十字架にかけられたイエス様の身代わりの死を、私の罪のためだと信じ受け入れるなら救われるのです。あなたも今日、自分の罪を悔い改めて、イエス様の救いを頂きましょう。

ワーク A

● 導入のヒント

「福音の汽車に乗って天国行きに」って歌、知ってる？天国に行くためには天国行きの切符がいります。みんなはこの切符持っているかな。どうしたら受け取ることができるのでしょうか。

● ワークについて

絵の中に、●と▲と■があります。このうち、●をつなぐと、何ができるでしょうか(3本の十字架)。イエス様は、このうち、どの十字架につかれたのでしょうか？

ワーク B

● 質問1 主の十字架は、「旧約聖書」の預言の成就。神は人類を愛する故に、ご計画して下さったことを知りましょう。神は愛、主は従順。

● 質問2 3本の十字架を思いつつ主の究極の愛を知ります。十字架にかかりながら罪人を救いに導かれたイエス様。十字架上で、悔改めと信仰によって天国が保証された罪人。これぞ、福音！

● 質問3 「わたしのための十字架」です。

● 賛美歌 「この人によるいがいに」

(教会学校せいか64番)

● 今日のお祈り 「神様、私のために十字架にかかって下さったことを信じます。そのことをいつも思えるように助けて下さい。」

ワーク C

● 2人の強盗の言葉の横に、イエス様の言葉を記入します。十字架の下には、ローマ兵、ヨハネとマリヤたち、律法学者・パリサイ人たち、群衆がいます。自分だっただけにいろいろだろかと、その理由を考えながら話し合います。自分だけでなく、家族、友人といった身近な人々のことも、どこにいたろうかと考えてみましょう。自分を認めて、人々はパラダイスに行けるでしょうか。イエス様に「パラダイスにいる」と言ってもらえるでしょうか。

ワーク D

● 質問1 彼らは、人を不幸にする自己中心な考えで行動していました。でも主は、彼らのために父にとりなしの祈りをささげられたのです。

● 質問2 自分の罪に目を向けられないで罵る人と、自分の罪を認め、主を救い主と信じ、控えめに御国への望みを述べた人がいました。

● 質問3 良い行ないをする者ではなく、罪を認めて信じる者こそ、十字架の救いにあずかることができます。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 神様は、人類の救いを成し遂げるためには、この方法しかないと考えられました。その方法とはどんなことだったのでしょうか。

2 人々はイエス様に、「自分を救え」と言いました。「十字架から降りたら信じてやる」とも言いました。本当にイエス様が十字架から降りたら、彼らは信じたでしょうか。

3 イエス様と共に十字架にかけられた犯罪人の一人は、救われました。どういう理由で救われたのでしょうか。

● 自分に当てはめてみよう

1 イエス様は、自分を十字架にかける人のために祈りました。あなたは、あなたに害を与える人のために祈れますか。

2 罪から救われるために、あなたのすべきことは何だと思えますか。

3 あなたは、「人間は努力しだい、何でもできるから、神などいらない」と思えますか。

● 話し合ってみよう

1 イエス様は、十字架上で「父よ、彼らをおゆるし下さい」と祈られました。その「彼ら」の中に、私たちは含まれているでしょうか。

2 イエス様には、十字架にかけられるに値する罪があったでしょうか。

3 イエス様が十字架にかけられた時、まわりの人々はどんな反応をしたでしょうか。

聖書 ルカ24・1～12
週 題 復活を信じる視点

序論

復活の記事は、4つの福音書でみな微妙に違っている。それは福音書が、4人で集まって相談した結果、書かれたものではないからである。彼らは見た、あるいは聞いた通りに書き記した。

しかし共通するところが一つある。弟子たちはみな最初、主の復活を信じられなかったことだ。視点がずれていると、見えるはずのものが見えないことがある。弟子たちは、主が復活されているのにそのことが見えなかった。

一、ながきらに注視する視点

金曜日の日没時から安息日が始まるため、直前の記述のように、アリマタヤのヨセフたちは、急いで主イエスの死体を墓に納めた。当時の習慣である、死体に香料を塗る時間の余裕はなかった。そこで、ただ香料を入れて亜麻布で巻いただけだったのである(ヨハネ19・40)。女たちはその様子を見届け、安息日が終わってから香料を塗ろうと、そのための準備をしていた。

次の日、女たちは用意しておいた香料を携えて墓に行った。ところが、主イエスのからだが見えたらなかったで、途方にくれてしまったのだ。女たちは、主イエスが亡くなられ、今や何もしてあげることができないから、せめてそのながきらにでも奉仕をしたいと考えたのだらう。女たちの

目は、亡くなられた主のからだに向けられ、そこに香料を塗ることだけを考えていて、以前主が話されたことをすっかり忘れてしまっていた。

だから御使いは、主が「ガリラヤにおられたとき、お話しになったことを思い出しなさい」と言ったのである。女たちの視点はずれていた。ながきらに奉仕できない事を悲しむのではなく、視点を主の御言葉に戻すことが必要だったのだ。

二、生きた方を死人の中に探す視点

ヨハネ福音書を見ると、△輝いた衣を着た方たちの者△とは御使いだとわかる。彼らは、△あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ△と、女たちの視pointsの誤りを指摘した。そして主がすでに何度も仰せられていた、受難と復活の予告を引用している(9・22、44、13・32、33、18・32、33)。

生きた方を死人の中にたずねるのも、視点がずれている。女たちは、主の十字架の死に何を見ていたのか。なんという不幸な出来事と見ていたのではないか。そこに間違いがある。主はよみがえられたのだ。△罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえらる△とおっしゃっていたとおりのおきだ。

私たちも、自分に起きた出来事の中に、不幸な点だけを見て自分を哀れむことがよくある。しかし、起きた出来事そのものには幸、不幸の色はついていない。それは、人間がつけているのだ。起きた出来事の背後にある神の計画を知らなければ、

私たちも、死人の中に生きた方を探すことになる。

主が十字架につかれたのも、復活されたのも、私たちの救いのためである。生きた方を死人の中に探すようなことはしてはならない。「不幸だ、不幸だ」と自分を哀れむのではなく、その出来事の中に神の最善の計画を見よう。すると、その出来事の本当の意味と意義がわかる。不幸ではなく、幸いであり、感謝であることがわかる。

三、視点が定まる

ここで女たちは、復活の出来事を証している。女たちは、その出来事に出会ったから信じたのか。いや、△そこで女たちは、その言葉を思い出し△(8節)とあるように、御言葉を思い出したのである。ついに視点が定まったのだ。

女たちは、墓から帰った後に、△それらいつさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した△。けれど、△使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった△。なんと不信仰な弟子たちだろう。これが真実の姿だ。弟子たちは、まだ視点が定まっていなかった。

結論

復活信仰は御言葉を信頼することによって生まれる。生きた方を死人の中に尋ねてはならない。視点が、起きた出来事だけに向いていては、その出来事を起こされた神の御旨を見損なう。私たちの視点を、主の御言葉に向ける時、その出来事の本当の意味と意義がわかる。△人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえらる△、これが人類の救いなのだ。

研究資料

(長田)

復活の主への信仰

復活日を迎え、私たちは、復活の主を信じるということがどういうことであるかを確認したい。

主のご復活は、御子の神性の証しであり(ローマ4・25)、また終末の時の信仰者の復活の保証である(1コリント15・20)。主の復活の事実、私たちの信仰の土台であり、宣教の本質に関わることである(1コリント15・14)。

同時に、主の復活は、単に教理的な真理として認められるだけでなく、信仰者の生活の中で、常に「主は生きておられる」と認められ、告白されなければならない。

主の死を目撃して、不信仰の闇の中に置かれ、復活の主を認めることができなかった弟子たちや女たちのように、私たちも「生きておられる主」を見出すことが難しい時がある。しかし、「イエスは生きておられる」(ルカ24・23)。御言葉によって不信仰の壁が打ち破られ、復活の主を信じる信仰の世界に生き抜くお互いでありたい。

テキスト

1 週の初めの日 日曜日。主のご復活が日曜日であったゆえに、日曜日は「主の日」と呼ばれるようになった(黙示録1・10)。ユダヤ人の安息日は土曜日だったが、クリスチャンの礼拝は、主の

日、日曜日に行なわれるようになったのである。

夜明け前 香料を塗ることのできない安息日が終つてすぐ(マルコ16・1)。

2 石が墓からころがしてある 御使いのみわざ(マタイ28・2)。

4 途方にくれていると 主イエスの遺体を見出すことができないのを見ても、なお主の復活を予感することができなかった女性たち。不信仰が彼女たちの中にいかに深く入り込んでいたことか。輝いた衣を着た方たちの者 御使い(マタイ28・2)であらう。

5 なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか 御使いたちは、復活の主を墓(死者が置かれる場所)の中に探すことの愚かさを指摘する。

6 そのかたは、ここにはおられない 空になった墓こそ、私たちの勝利のしるしである。よみがえられたのだ 不信仰の中で、悲しみに暮れている女性たちに、主のご復活の事実を明確に宣言する。

まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい 主は弟子たちに、ご自身の復活を何度も予告しておられた。不信仰の故に、主の復活を予想することさえしていなかった女性たちに、御言葉の約束を思い起こすことを命じる。不信仰の闇を打ち破るのは、御言葉の約束以外にない。

7 人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえらる、と仰せられたではないか ルカ福音書では、9・22、44、

13・32、33、18・32、33に記されている。

8 そこで女たちはその言葉を思い出し 彼女たちの心に信仰がよみがえった瞬間であらう。

10 マグダラのマリヤ 彼女は、弟子たちに報告した後、復活の主にお会いするが(ヨハネ20・11、18)、ルカによる福音書においては省略されている。

ヤコブの母マリヤ 彼女は、マタイ28・1では、「ほかのマリヤ」と呼ばれている。また、マタイ28・9によれば、マグダラのマリヤと共に、復活の主にお会いしている。

11 使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった 復活の証人となるベシ使徒たちも、この時はまだ不信仰の中に閉ざされていた。

12 ペテロは立つて墓へ走って行き ヨハネ20・3、10に見られる並行記事には、ヨハネの同行について記されているが、ルカによる福音書では、省略されている。

亜麻布だけがそこにあつたので、事の次第を不思議に思いながら帰っていった 女性たちを通して御使いの言葉が伝えられ、自分の目で空の墓を確かめても、ただ不思議な出来事としてしか見ることができないペテロ。不信仰が人間をいかに深く捕らえるかを見ることが出来る。

●週題 復活を信じる視点

●聖書 ルカ24・1-12

●暗唱聖句 あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にだすねているのか。

ルカ24・5

●目標 御言葉を信じるなら、自分の理解を超えた神様の真理を理解できることを発見する。

導入

イースターおめでとう。死を打ち破って復活され、今も生きておられるイエス様の御言葉を信じて、私たちも復活信仰を持ちましょう。

(起) ストーリーを語る

イエス様が十字架にかかれたのは、金曜日でした。ユダヤ人の安息日は、金曜日の夕方から始まるので、イエス様のからだは、あわただしく墓に納められました。それを見ていたイエス様に従ってきた女たちは、週の初め、日曜日の朝早く夜明けを待ちかねて、イエス様のからだに香料を塗るために出かけました。彼女らは、イエス様の死のために悲しみで一杯でした。そんな彼女たちが、イエス様のからだに納められた墓に到着すると、何と墓の入口をふさいでいた大きな石はころがされておき、すぐ中に入れる状態でした。驚いて中に入ってみると、イエス様のからだは見あたりません。彼女たちは、「どうしたんだろう、何があつたんだろう」と、途方にふれてしまいました。

するとそこに、輝いた衣を着た二人の御使いが現れたのです。女たちはびくびくして恐れを感じ、思わず顔を伏せてしまいました。二人の御使いは「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にだすねているのか。そのかたはここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい」と言って、イエス様が前からお話しされていた通りによみがえられたことを教えました。そして彼女たちは、イエス様が「人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、殺され、そして三日目によみがえらる」と話をしておられたことを思い出しました。イエス様の御言葉は全部本当で、それが実現したとわかったのです。そこで女たちは帰って行き、十一弟子や他のみんなにこのことを報告しました。しかしだれもこの話を信じません。彼らは長い間イエス様と生活し、教えを受け、奇跡を何度も見ていましたが、それでも復活は信じられなかったのです。彼らがイエス様が復活されたとわかったのは、聖書の話を解き明かされた時でした。この後、イエス様はエマオの途上の弟子にも御言葉をときあかし、ペテロなど、エルサレムにいた弟子たちにも聖書を悟らせるために心を開いて下さったのです。イエス様が彼らの心を開いて、聖書の言葉を解き明かされたので、弟子たちは、救い主が苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえらるという聖書の言葉が実現したと悟ることができました。

(承) 学ぶべき真理

弟子といえども、イエス様の復活を初めは信じ

ワーク A

●導入のヒント

みんなの心はどこにある？心は目には見えないけれど、あるって信じてるよね。では、聖書の御言葉は、だれの言葉でしょうか。

●ワークについて

絵の中にいくつかの卵が隠れています。あれあれ、よく見て下さい。字が書いてある卵がありますよ。その字を組み合わせると、ある言葉になります。下の〇の中にそれを書いて下さい。

ワーク B

●質問1 イエス様の遺体が見当らなくて、とまどった女の人たちの気持ちを考えましょう。復活されることを聞いていたはずなのに。

●質問2 今日の暗唱聖句。イースターの喜びの言葉です。主は「生きた方」であることを喜び、感謝しましょう。主はよみがえられたのです。

●質問3 主の言葉には希望と前進があります。女性たちは「伝える」ために出発しました。

●賛美歌 「うれしかったのしい」(イースター)

(日本ホーリネス教団子どもさんびか51番)
●今日のお祈り 「イエス様は、御言葉通りよみがえられたことを感謝します。生きておられるイエス様、これから私たちを守って下さい。」

ワーク C

●イエス様の復活を信じるために、この週の学びをします。その信じる根拠は御言葉によることを強調しましょう。目標には「神の真理」と記されています。「神の真理」といえるものは多くありますが、ここでは特に「復活」のことです。このワークは「生活への適用」の内容を前面に出して、自分の考えや気持ちよりも御言葉に信頼して歩もう、とまとめています。これは、どんな時でも言えることですが、この週に関しては「復活」が焦点なので、御言葉を根拠として復活を信じる、という点を強調して下さい。

ワーク D

●質問1 女たちにとって、主イエスの死は決定的な事実でした。悲しみに満ちていました。主のからだがないことでも絶望的になったでしょう。

●質問2 主イエスの語られた言葉は、すっかり忘れられていました。しかし主の御言葉は、力となり確信となるものです。

●質問3 主の約束の御言葉を、心に豊かに宿らせることは大切です。思い込みで頭が凍りついてしまわないように、御言葉によって軟らかにしてくださいましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 女たちは、イエス様がおさめられた墓に行きました。何のために行ったのでしょうか。

2 女たちが、イエス様の墓に行った時に、墓はどうなっていましたか。

3 女たちは、墓での出来事をだれに知らせましたか。

4 弟子たちは、女たちの言ったことをどう思ったのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 イエス様の墓がからっぽという事実を目撃したら、あなたはと思うでしょうか。

2 あなたは、イエス様がよみがえられたことを信じることができますか。

3 イエス様のよみがえりは、あなたにとってどんな意味がありますか。

●話し合ってみよう

1 今の私たちは、実際によみがえりのイエス様に会うことはできませんが、そのよみがえりの事実を何によって知ることができるでしょうか。

2 「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたすねているのか」という言葉を、今の私たちにあてはめたとき、どんな意味として読むことができますでしょうか。

3 最初イエス様のよみがえりを信じられなかった弟子たちは、どうして信じられるようになったのでしょうか。

られませんでした。弟子たちは、起きた不幸な出来事に目がいて視点があつてなかったのです。目が開いていても見えない状態でした。それが生きた方を死人の中にたすねる状況です。「お話しになったことを思い出しなさい」と御使いは勧告しています。起こった出来事が不幸に思え、そればかりに目がいて、その出来事の本当の意義を見つけれないことがあります。そんな時、主が何とおっしゃったか思い出すと、その出来事の本当の意義を発見できるのです。自分の頭脳の理解を超えた事を理解するために必要なのは、自分の考えよりも御言葉の方が常に正しいと信じていることです。すると視線が上がって、真理を発見することができます。

(転) 生活への適用

皆さんは、聖書の教えている事と、自分が考える事が異なつたらどうしますか。例えば、仕返しをしたくて仕方ない時などです。正しいのは聖書で、間違っているのはわたしなのです。

結論

私たちのまわりには、イエス様を目で見た経験のある人はいません。しかし、聖書の御言葉を信じて救われ、永遠の命を得ている多くのクリスチャンがいます。信じられなかった弟子たちが信じられるようになったのは、生きていられる方を死人の中にたすねるのをやめ、御言葉を思い出したからです。神様の言葉である聖書を信じるなら、復活も十字架も、その意義がわかってくるのです。

編集後記



上巻が出版されてからもう半年がたったのか、と唖然とする思いです。この半年間、何とかより良い『牧羊者』にしたいと、ずっと考えてきました。最善を尽くしたつもりでも、足りない所は山ほどあると思います。しかし、とにかくにも、『編集後記』が書けるところまでこぎつけることができ、ほっとしました。

校正をしながら思ったのは、『どうすればわかりやすくできるか』ということでした。霊的で深い真理を、子どもにわかるように教えることは、難しいことです。しかし、本誌で真理を説き明かし、ワークでやさしく導こうと皆で努力しました。

執筆者が北は函館から、南は熊本まで、日本全国に散らばっているため、なかなか意見の交換ができないのが実情です。月刊で『牧羊者』が出版されていた頃は、先生方に毎月4〜5週分の原稿執筆をお願いするだけでよかったのですが、このたびは、26週分の原

稿を書いていたただかなくてはなりません。一応、毎月15日を締切日としました。しかし、それぞれの教会や伝道の事情もあり、順調に書いて下さった先生方はわずかでした。最終締切日直前には、忙しい思いをさせて、本当に申し訳なく思っています。

『牧羊者』の作成はチームプレーです。それぞれの担当部分が関連性をもたねばなりません。また、一人の執筆者が困難を覚えるなら、みなで支えることが必要です。このような形で、下巻の発行にこぎつけることができたのも、10人の先生方が支えてくださったからだと、心から感謝しています。

執筆者の先生方のご家族や教会員のご協力にも、心から感謝します。多くの時間を割いていただきました。この私も、最後の一週間は、ほとんど教会の仕事はできず、『牧羊者』にかかりきりでした。専門的に『牧羊者』の編集に携わってくださる方がいてくださるなら、と心底願うことです。

今回は、以下の者たちで執筆やイラストの作成をしました。

聖書講解	鎌野 善三
研究資料	森沢 尚生
メッセージ例	長田 栄一
	足立 宏
ワークA	森沢 尚生
	光田 隆代
ワークB	吉田 美穂
	長谷川宣恵
ワークC	長尾 秀紀
	仁科 真人
ワークD	朝川 清英
中高科	竹崎 光則
フラッシュカード	研究資料は、担当者の名前を記すことにしました。聖書講解とメッセージ例は、合作です。また、上巻に引き続き、信徒の矢持英子姉や陰山恭子姉がイラストを描いて下さいました。ありがとうございます。
	鎌野 善三

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇一年九月十五日発行

発行者 岩田扶美二

滋賀県近江八幡市多賀町五〇六の一

日本イエス・キリスト教団出版局

電話(〇七四八)三三―五五一一

FAX(〇七四八)三一―二二五二

編集者 日本イエス・キリスト教団

教会学校局

印刷所 有限会社 あくと

電話(〇二九七)七八―五九三五

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み